(4) 西原（にしはら）遺跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 351
1．遺跡の立地 …… 351
2．周辺の遺跡 …… 351
Ⅱ．調査の方法と経過 …… 354
1．調査の方法 …… 354
2．調査の経過 …… 354
Ⅲ．発見された遺構と遺物 …… 357
1．基本層序 …… 357
2．竪穴住居跡と出土遺物 …… 358
3．焼土遺構 …… 369
4．溝 …… 371
5．その他の出土遺物 …… 371
6．縄文土器 …… 374
Ⅳ．考　　察 …… 376
1．出土土器の分類 …… 376
2．出土土器の組み合わせと年代 …… 377
3．遺構の年代 …… 378
Ⅴ．ま　と　め …… 378

調 査 要 項

遺　跡　名：西原遺跡
遺 跡 記 号：NH（宮城県遺跡地名表登載番号：07014）
遺跡所在地：宮城県柴田郡村田町塩内字西原
調査対象面積：約5,000 ㎡（発掘面積1,479 ㎡）
調 査 期 間：昭和46年4月5日～5月3日
調　査　員：宮城県教育庁社会教育課
　　佐藤庄一、岩渕康治

Ⅰ．遺跡の立地と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地

西原遺跡は、村田町塩内字西原に所在する。村田町の西部、町役場より西方約１㎞の蔵王町との境界近くに位置している。

遺跡付近の自然地形をみると、北部には名取川の南岸から柴田町、大河原町、蔵王町へと続く標高 200～300ｍの大起伏山地（高館丘陵）が発達している。

遺跡は、この大起伏山地からほぼ南側に派生した標高約 60～200ｍ程度の小起伏丘陵の東斜面上に立地する。この丘陵は南北約 10 ㎞、東西約 2～4 ㎞の規模で、周辺は白石川や白石川の支流によって形成された扇状地性低地によってとり囲まれている。東は村田盆地、南は槻木低地、西は円田盆地が白石盆地へと続いている。

遺跡は、標高約 70～90ｍで、南側へ緩やかに傾斜する斜面上に立地し、面積は約 8,000 ㎡である。中央部を東西にはしる小規模な開析分によって南北に分断されている。大部分が畑地、一部が水田として利用されている。

2. 周辺の遺跡

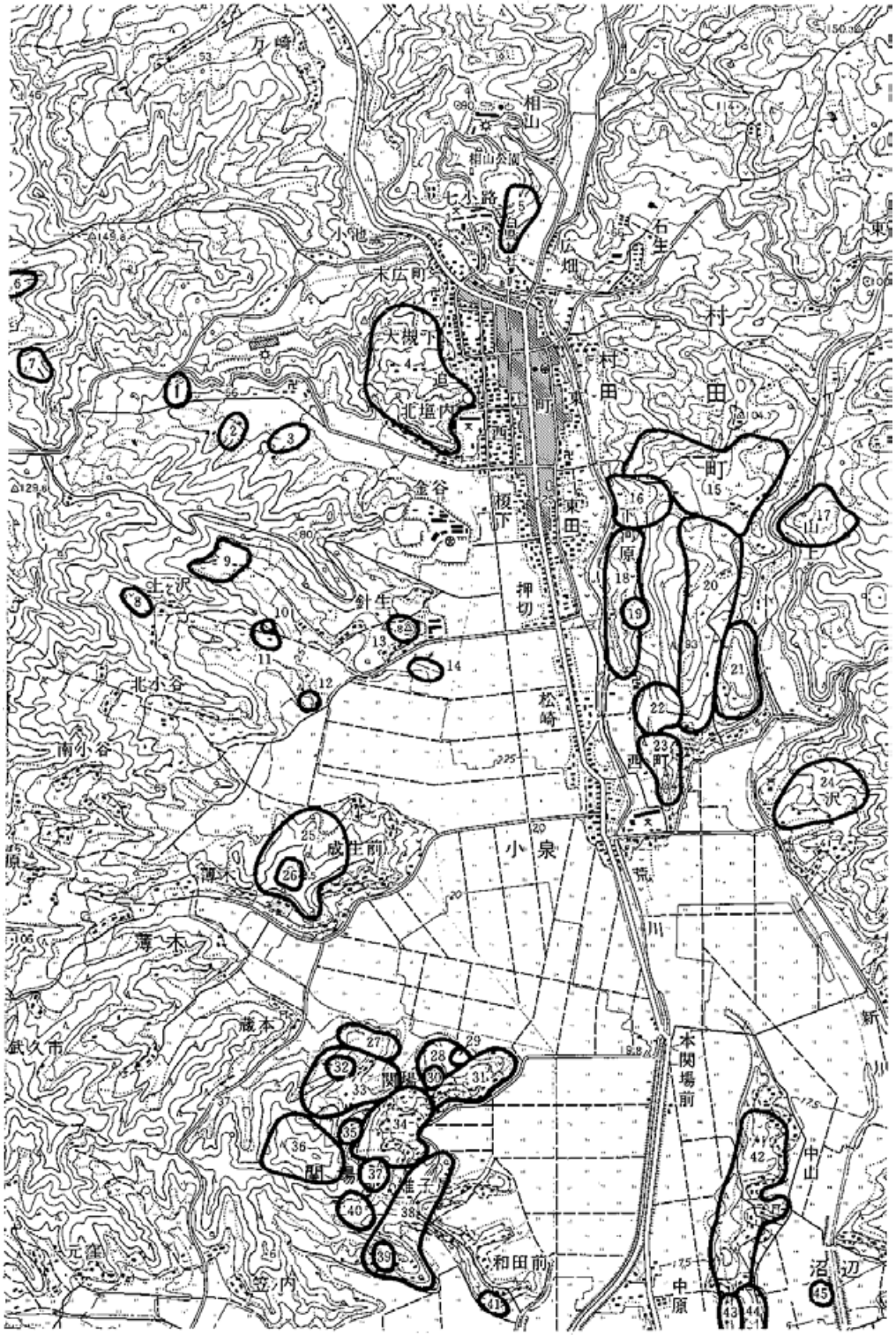
現在、村田町では約 100 ヶ所の遺跡が発見されている。これらは村田盆地に接する丘陵の裾部に最も多く分布し、町の北西、北部を占める丘陵地帯では、やや密度が少くなっている。

遺跡の種別をみると、縄文時代から古代にかけての遺物包含地が多く、次に高塚古墳や中世城館の占める割合が多くなっている。

町内最古の遺跡には、縄文時代早期に属する川村開拓遺跡があり、素山式土器が発見されている。縄文時代中期に入ると遺跡の数は飛躍的に増大し、相山遺跡、大成田遺跡、姥ヶ懐遺跡等からは、大木 8～10 式に相当する遺物が数多く出土している。縄文時代後期から晩期の遺跡には、約 30 ヶ所の遺物包含地がある。これらの多くは村田盆地へ向って張り出した丘陵の尾根や裾部に立地し、山ノ入遺跡や円野山遺跡では広範囲にわたって遺物の散布が認められる。

弥生時代の遺跡には、約 30 ヶ所の遺物包含地があるが、その大部分は丘陵の尾根や裾部に立地している。本遺跡の周辺には、塩内遺跡、北割山遺跡、上ヶ沢遺跡等があり、北沢遺跡では、昭和 52 年の発掘調査の結果、弥生時代中期「円田式」に属する遺構や遺物が検出されている（斉藤、真山：1978）。

古墳時代の遺跡には、高塚古墳や横穴古墳がある。関場地区にある愛宕山古墳（村田町：1978）は、主軸長約 90ｍ、陪塚を伴う県内でも大規模な前方後円墳である。この外には、金原方領山板現古墳、千塚山古墳等の前方後円墳が、また町の南東部には百数十基を数える上野山古墳群がある。沼辺地区には、円頭太刀や金銅製耳飾等が発見された中山囲横穴古墳群がある。



(国土地理院発行1/25,000「村田」を複製)

第1図　周辺の遺跡

古代に属する遺跡は町の北東部丘陵地帯を除いてほぼ全域に分布しているが、その大部分は、遺物包含地である。最近の発掘調査によって、北沢遺跡や東足立（乗越囲）遺跡からは平安時代の竪穴住居跡が検出され、集落跡であったことが判明した（佐々木：1972）。

中世に属する遺跡は大部分が城館である。村田城跡、小泉城跡、薄木城跡等は丘陵を利用して築かれた山城である。また関場地区には経塚があり、中世の文化を解明する上で貴重な資料となっている。

遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	西原遺跡	丘陵中腹	集落跡包含地	縄文・平安	24	鍛冶屋城遺跡	丘陵麓	生産遺跡(製鉄)	奈良・平安
2	塩内遺跡	丘陵麓	包含地	弥生(後)	25	沼ノ内B遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
3	塩内窯跡	丘陵斜面	生産遺跡(窯跡)	近世	26	方領山権現古墳	丘陵頂	前方後円墳	古墳(中)
4	村田城跡(古館)	丘陵	城館	中世	27	炭釜横穴古墳群	丘陵	横穴古墳	古墳(後)奈良
5	相山遺跡	丘陵麓	包含地	縄文(中)弥生(後)	28	沼ノ内C遺跡	丘陵端	包含地	奈良・平安
6	蔵王町(143)				29	台遺跡	丘陵	包含地	縄文(中・後)
7	北割山遺跡	丘陵頂	包含地	縄文・弥生	30	大橋遺跡	河川敷	包含地	縄文(中・後)奈良・平安
8	上ヶ沢遺跡	丘陵中腹	包含地	弥生	31	北沼田遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(後)奈良・平安
9	北沢遺跡	丘陵中腹	包含地	弥生(後)	32	猪倉遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
10	北沢塚跡	丘陵上	円墳	古墳(中)	33	十八津入横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)奈良
11	稲崎遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生・平安	34	赤柴遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生(後)奈良・平安
12	上ヶ沢稲荷古墳	丘陵上	円墳	古墳(後)	35	中内遺跡	丘陵頂	包含地	縄文
13	針生A古墳	丘陵端	円墳	古墳(後)	36	八幡堂後遺跡	沖積平野	包含地	奈良・平安
14	針生古墳	台地	前方後円墳	古墳(中)	37	剣塚古墳	沖積平野	円墳	古墳(後)
15	山ノ入遺跡	丘陵	包含地	弥生(後)古墳	38	宮前遺跡	自然堤防	包含地	古墳・平安
16	月本遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生	39	小花館跡(入間田城跡)	丘陵	城館	中世
17	石塚古墳	沖野平野	円墳	古墳(後)	40	新畑中遺跡	沖積平野	包含地	奈良・平安
18	寺後遺跡	丘陵端	包含地	縄文(中・後)弥生(後)・奈良・平安	41	八幡前遺跡	自然堤防	包含地	奈良・平安
19	西田遺跡	自然堤防	横穴古墳	古墳・奈良	42	下山遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(晩)
20	楔形横穴古墳群	河川敷	包含地	古墳(後)奈良	43	松崎貝塚	丘陵端	貝塚	縄文(早・前)
21	白石川下流遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安	44	入袋遺跡	自然堤防	包含地	奈良・平安
22	銀谷地遺跡	丘陵斜面	生産遺跡(製鉄)	奈良・平安	45	明神堂遺跡	自然堤防	包含地	奈良・平安
23	川原遺跡旭ヶ丘遺跡	自然堤防丘陵斜面	包含地	奈良・平安縄文					

Ⅱ．調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査は、東北自動車道建設に伴う事前調査であり、調査対象範囲は路線敷に限定される。

まず、昭和 42 年度に実施された試掘調査の結果を参考（県教委：1967）に、路線敷内における遺物の散布状況を再度調査した。その結果、中心杭 107＋00～108＋60 の間に縄文土器、剥片石器、土師器等が散布しており、この範囲内に発掘区を設定することにした。

発掘区は、中心杭 108＋60 の南にある開析谷を境に北をＡ地点、南をＢ地点、Ａ地点の北側をＣ地点として、それぞれ独自に設定した。

Ａ地点では、中心杭 108＋60 と 108＋40 を結ぶ線を南北の基準線とし、108＋40 に直交する線を東西の基準線とした。108＋40 を起点として、一辺が 3m四方のグリットを一単位とし、南北方向はアラビア数字、東西方向はアルファベットで表示した。

Ｂ地点では、中心杭 107＋40 と 107＋20 を結ぶ線を南北の基準線とし、次に 107＋40 に直交する線とした。ここでは、107＋40 を起点としてＡ地点同様南北方向はアラビア数字、東西方向はアルファベットで表示した。

更にＣ地点には、遺跡の北辺を明らかにする目的で試掘トレンチを 2 ヶ所に設定した。

遺構の実測図は簡易遣り方を用いて 1／20 の平面図を作成した。遺構が検出されなかった地区では、一部 1／20 の断面図を残した外、基本層序、地山面までの深さ、遺物の出土状況等必要事項を記録した。

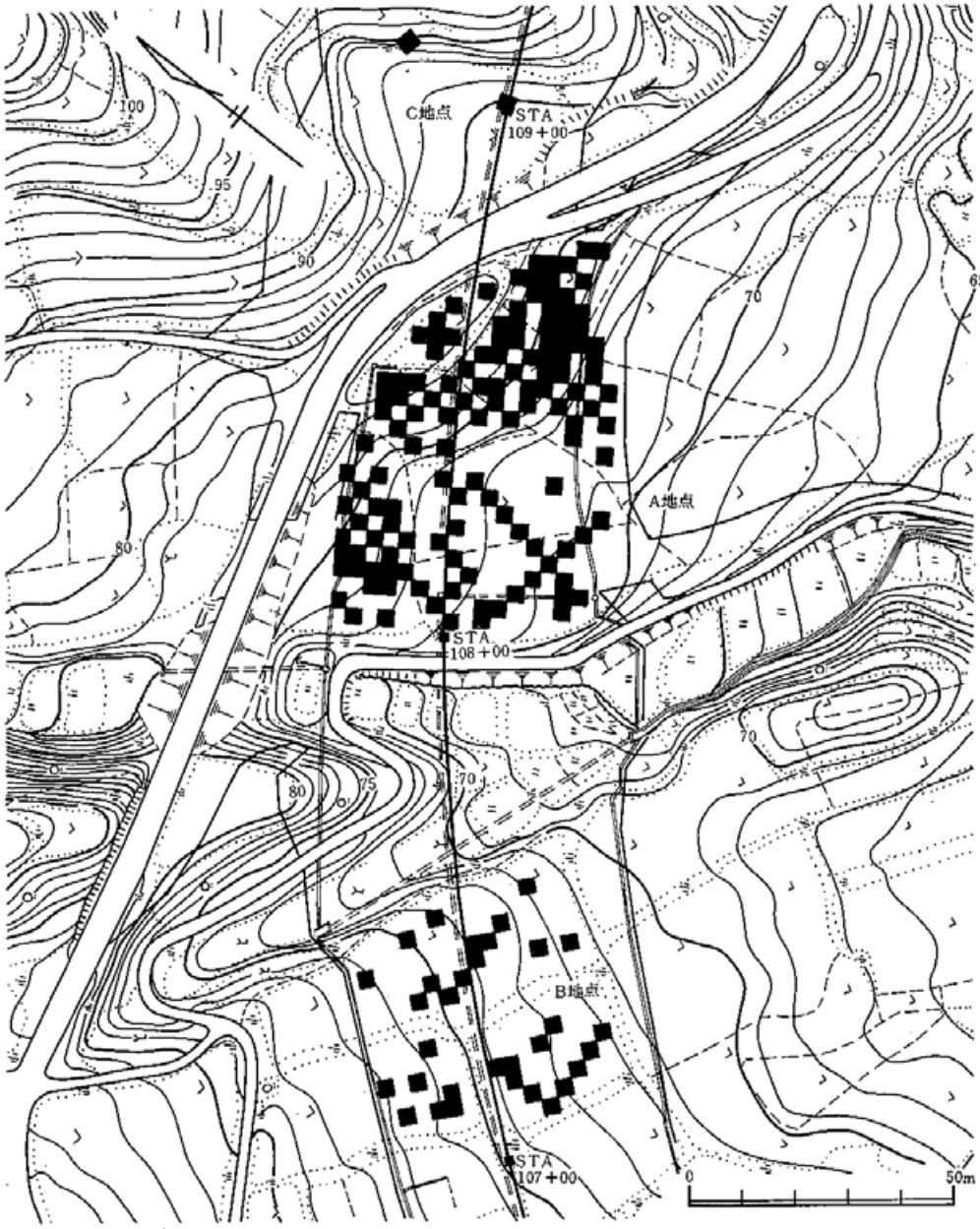
2. 調査の経過

調査は昭和 46 年 4 月 6 日に開始した。まず調査対象区域内の下刈りを行った後、Ａ地点の東半部にグリットを設定した。遺構、遺物の分布状況を把握する目的で、南側から北側へ向って放射状に粗掘りを行っていった。

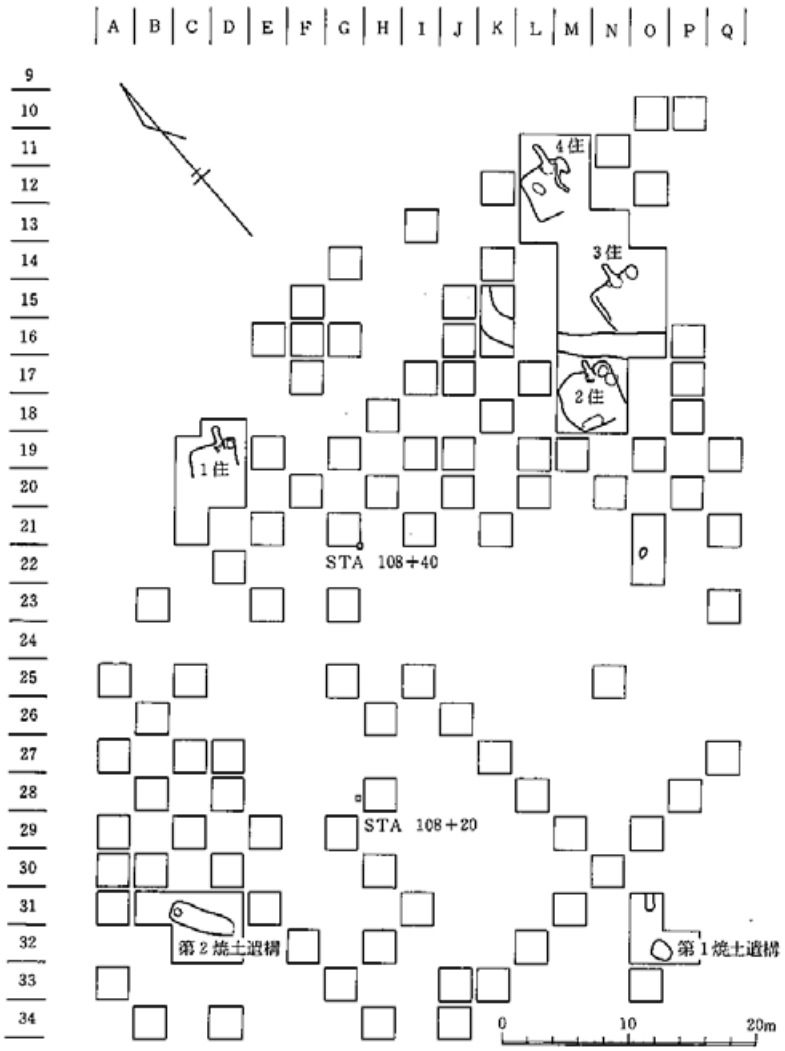
各グリットでは、層序が複数に分かれる箇所があった。調査が進行する過程で各グリッドから縄文土器や土師器の破片が発見され、遺跡の範囲は西側にも広がることが明らかになったため、4 月 9 目以降には西半部にもいくつかのグリッドを設定した。4 月 12 日には、O．Ｐ－31 区から第 1 焼土遺構、4 月 13 日にはC．Ｄ－30 区から第 2 焼土遺構とC．Ｄ－18 区から第 1 住居跡が検出された。次いで 15 日には、第 2 住居跡、19 日には第 3、第 4 住居跡が相ついで検出された。遺構が検出された地区では、グリッドを拡張し、遺構の全体的把握に努めた。

4 月 16 日には、遺物の散布が認められる目地点にグリッド設定を行った。その結果、遺構は検出されず、表土から縄文土器や土師器の破片が採集されたにすぎない。

4 月 24 日には、遺跡の地辺を明らかにする目的で、Ｃ地点に 3×3、3×4mのトレンチを



第２図　遺跡付近の地形とグリッド配図



第３図　Ａ地点遺構配置図

設けたが、遺構遺物は全く発見できず、遺跡の北辺は９区付近であることが明らかとなった。

４月末には、遺構の精査、実測図の作成、写真撮影等が終了した。

調査の結果、Ａ地点から竪穴住居跡４軒、焼土遺構２基、溝１本が検出された。発掘面積はＡ地点 1161 ㎡、目地点 297 ㎡、Ｃ地点 21 ㎡に達した。すべての調査は昭和 46 年５月３日に終了した。

Ⅲ．発見された遺構と遺物

1．基本層序

Ａ．Ｂ．Ｃ地点の基本層序は次の通りである。なお断面図はＡ地点のものである。

〔Ａ地点〕

第１層　暗褐色の耕作土である。層の厚さは10～25㎝である。遺物の散布が認められる。

第２層　部分的に小さな円礫を含む黒色土である。21区以南では広範囲に分布する。20～60㎝であるが、南側へいくに従い厚くなっている。

第３層　黒褐色土である。24区以南ではどのグリッドからも検出された。層の厚さは20～60㎝で、大きな礫を多量に含む地区がある。地山付近では地山の漸移層と混合し、黄化している部分が認められる。本遺跡の中では縄文土器が比較的多く含まれている。

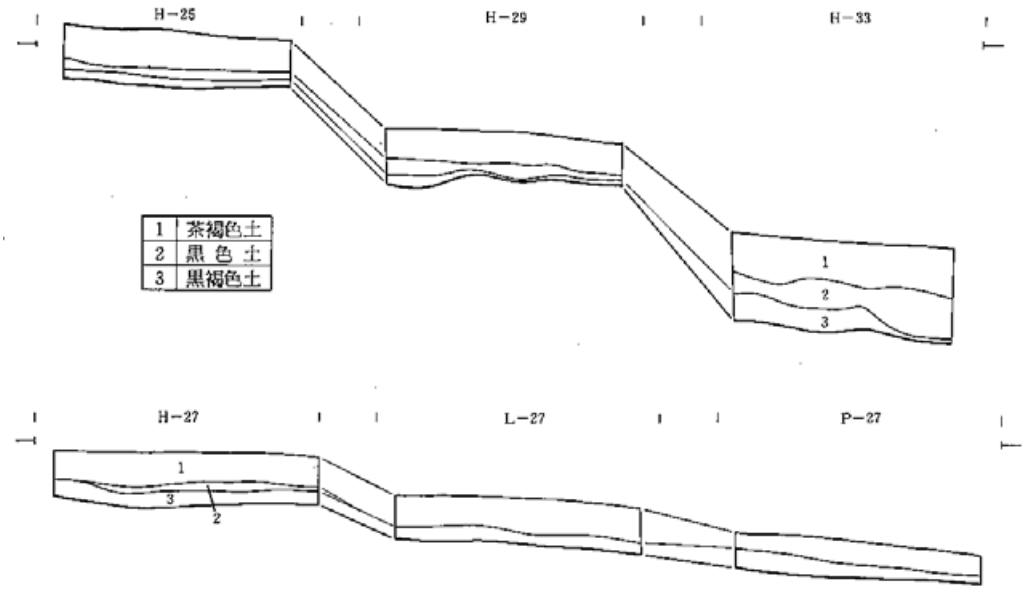
〔Ｂ地点〕

Ａ地点の20～32区と類似した状況を呈す。表土から地山面までの深さは20～80㎝で、南東部で深くなっている。表土から遺物が採集されている。

〔Ｃ地点〕

第１層　暗褐色土である。層の厚さは60㎝である。

第２層　小さな円礫を含む黒色土である。Ａ地点の第２層と類似している。層の深さは15㎝である。



第４図　基　本　層　序

2. 竪穴住居跡と出土遺物

A地点から竪穴住居跡が 4 軒検出された。第 1 住居跡は発掘区域内の北西部に第 2、第 3、第 4 住居跡は隣接して北東部に分布している。

第 1 住居跡

〔遺構の確認〕 C・D－17～19 区の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕 平面形は、南半部を欠くが方形を基調としたものである。北辺では約 3.7m である。東壁は約 1.9m、西壁は約 1.8mほど遺存する。

〔壁〕 地山を壁とする。残存壁高は最も高い北壁で約 30 ㎝、立ち上り角度は全般的に急角度である。

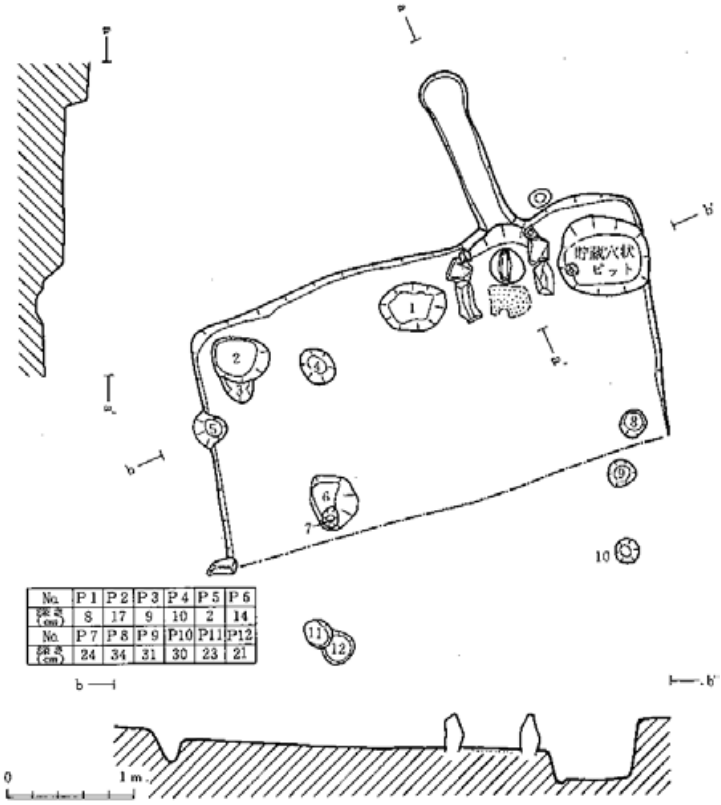
〔床面〕 地山を床とする。ほぼ平坦であるが、南東側へいくぶん傾斜している。

〔柱穴〕 床面及び住居跡と推定される範囲から 12 個のピットが検出されたが、これらには柱痕跡を伴うものはなく、また、相互の配置に規則性が見い出せず柱穴については不明である。

〔カマド〕 北壁の東寄りに付設されている。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部の規模は側壁の内側で 50×60 ㎝である。左右の側壁は壁から 55 ㎝ほど張り出しており、礫および割石が利用されている。燃焼部底面はほぼ平坦で、焚き口付近には 30×25 ㎝の範囲にわたって焼面が認められた。奥壁寄りには、掘り方を伴う石が立てられている。煙道部は長さ 1.3 m、幅 30 ㎝、先端はピット状を呈す。燃焼部底面との間には 15㎝ ほどの段差がある。

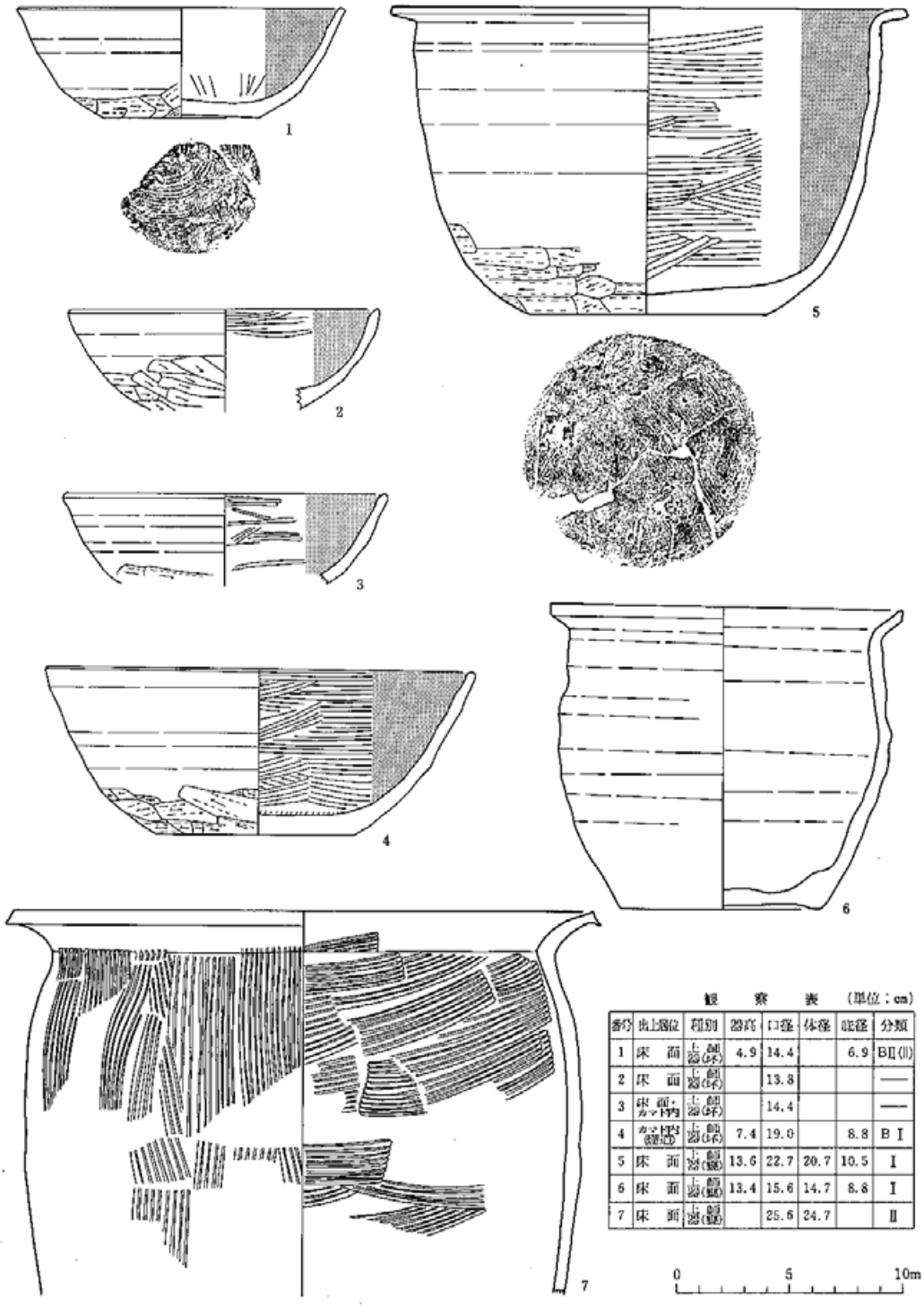
〔貯蔵穴状ピット〕 北東隅に位置する。平面形は長軸 70㎝、短軸 63 ㎝の円形を呈し床面からの深さは約 20 ㎝である。

〔伴出遺物〕 遺構に伴うと考えられる遺物には、床面及びカマド内出土の土師器坏・甕等がある。



No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6
深さ(cm)	8	17	9	10	2	14
No.	P7	P8	P9	P10	P11	P12
深さ(cm)	24	34	31	30	23	21

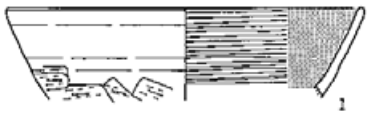
第5図 第 1 住 居 跡



観　察　表　（単位：cm）

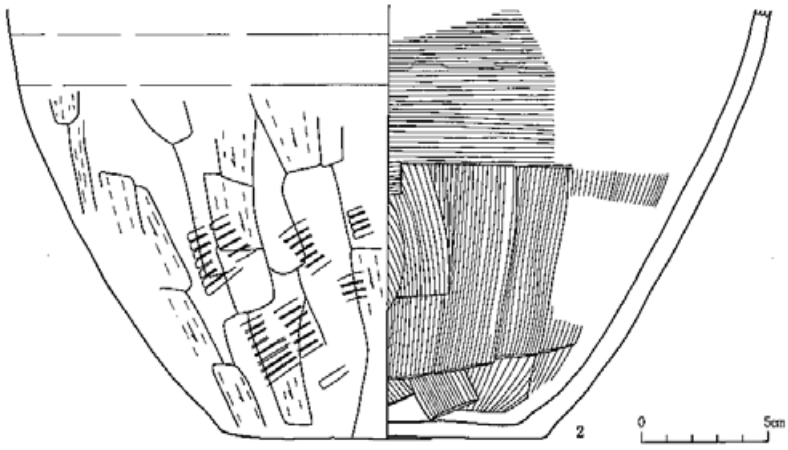
番号	出土図位	種別	器高	口径	体径	底径	分類
1	床　面	土師器(坏)	4.9	14.4		6.9	BII(II)
2	床　面	土師器(坏)		13.8			—
3	床面・カマド内	土師器(坏)		14.4			—
4	カマド内(堆積)	土師器(坏)	7.4	19.0		8.8	B I
5	床　面	土師器(鍋)	13.6	22.7	20.7	10.5	I
6	床　面	土師器(鍋)	13.4	15.6	14.7	8.8	I
7	床　面	土師器(鍋)		25.6	24.7		II

第６図　第１住居跡出土遺物



観　察　表

番号	出土層位	種別	器高	口径	体径	底径
1	堆積土1	土師器(坏)		14.1		
2	堆積土1	須恵器(甕)				12.8



第７図　第１住居跡堆積土出土遺物

土師器

坏（第 6 図 1～4）製作にロクロを使用したものである。2、3 は底部を欠いている。器形はいずれも底部から内弯ぎみに立ち上がるものである。底部切り離し技法は 1 が回転糸切り、4 は再調整が加えられ識別できなくなっている。1 は体部下端と底部の一部に、4 は体部から底部全面に手持ちヘラケズリが加えられている。内面にはいずれもヘラミガキ、黒色処理が施されている。4 は法量の大きなものである。

甕（第 6 図 5～7）製作にロクロを使用したものである。5 は底部から内弯ぎみに立ち上がり、体部でほぼ直立し頚部に達する。口縁部は急角度で外傾する。底部切り離し技法は回転糸切りで、その後手持ちヘラケズリが加えられ、体部下端にも及んでいる。内面にはヘラミガキ後黒色処理が施されている。6 は底部から外傾して立ち上がった後に体部中央で膨み、頚部がほぼ直立する。口縁部は外傾し、端部が上方につまみ出されている。

7 は、体部下端から底部を欠くが長胴のものと考えられる。口縁部は頚部から外反し端部が下方につまみ出され、角ばる。体部内外面に刷毛目が施されている。

〔堆積土出土遺物〕堆積土からは土師器坏・須恵器甕等が出土している。

土師器

坏（第 7 図 1）製作にロクロを使用している。底部を欠く。器面調整は体部下端に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

須恵器

甕（第 7 図 2）体部下半から底部の破片である。底部からわずかに内弯ぎみに立ち上がる。外面には、平行タタキ目を施した後にヘラケズリを加えている。内面は下端部にヘラナデ、その上方に横ナデが認められる。

第２住居跡

〔遺構の確認〕Ｍ・Ｎ－16・17 区の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕平面形は東南隅の一部を欠き、北壁が外側へ張り出しているが、長軸 4.6m、短軸 4.5mの方形を基調としたものである。

〔壁〕地山を壁とする。南東隅は削平されているが、残存壁高は北壁で最も高く約 40 ㎝、南側では次第に低くなる。立ち上がり角度は北壁の張り出した部分を除いて急角度である。

〔床面〕地山を床とする。ほぼ平坦な面であるが南東側へ傾斜している。南半部には深さ 6～10㎝のくぼみが認められた。

〔柱穴〕床面から11個のピットが検出された。そのうちピット8は柱痕跡を残すものであるが、他に柱痕跡を残すものが存在せず、またピット相互の配置に規則性がなく、柱穴については不明である。

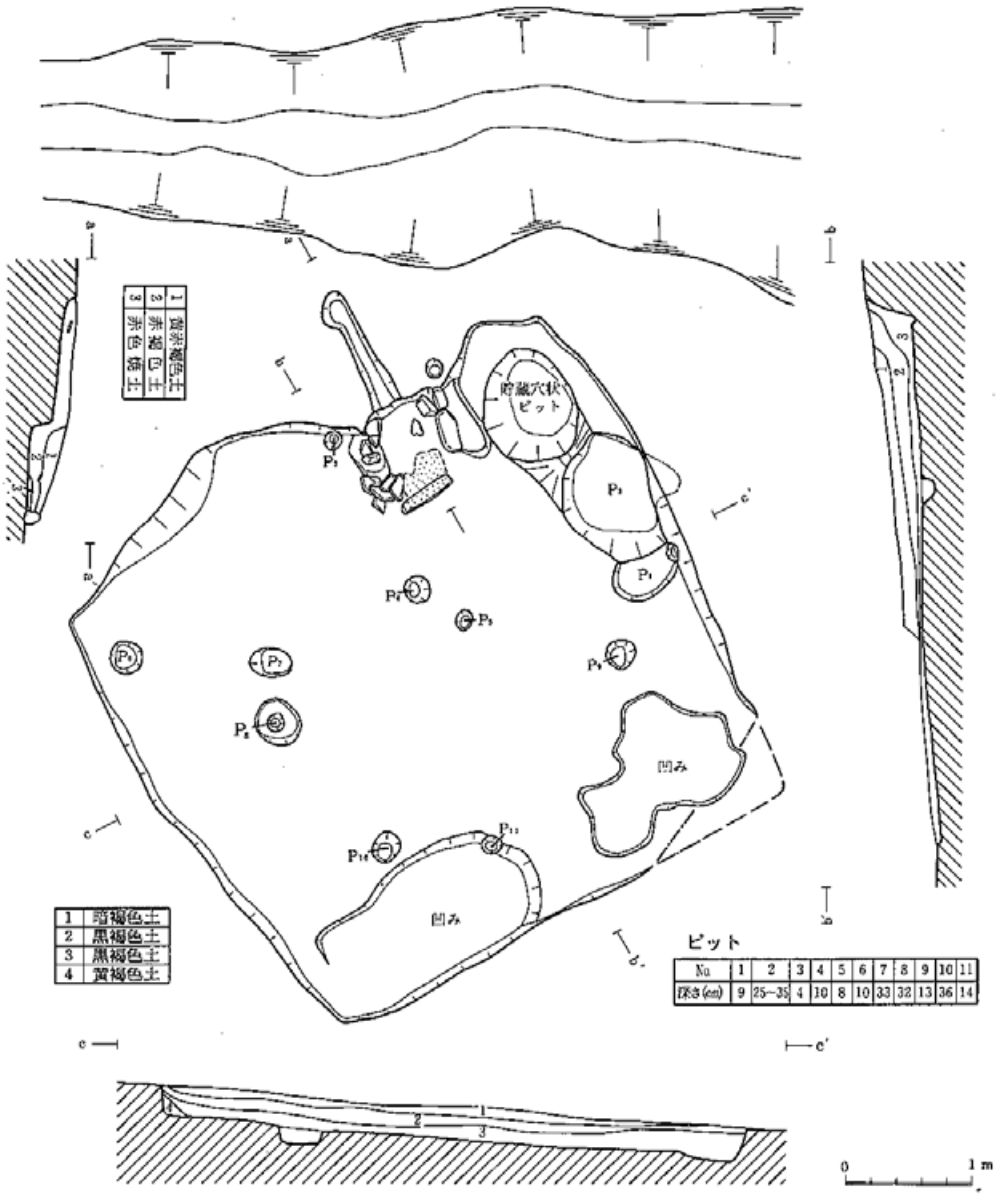
〔カマド〕北壁の東寄りに付設されている。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部の規模は側壁の内側で 60×50 ㎝である。左右の側壁は壁から約 60 ㎝ほど張り出しており、礫や割石を用いて構築されている。右側壁には石を被覆していたと考えられる粘土の残滓が認められる。燃焼部底面はほぼ平坦で、焚き口付近には 40×25 ㎝の範囲にわたって焼面が認められる。この上には長さ 45 ㎝、幅 10 ㎝の焼けて変色した凝灰岩がある。また、燃焼部の中央には一辺が 10 ㎝、高さ 20 ㎝ほどの割石が立てられている。煙道部は長さ 1.0m、幅 15～25 ㎝、先端はピット状を呈す。燃焼部に向かって傾斜し底面との間には 15 ㎝ほどの段差がある。

〔貯蔵穴状ピット〕北東隅に位置する。平面形は長軸 90 ㎝、短軸 74 ㎝の円形を呈し、床面からの深さは 25 ㎝である。土師器坏、須恵器甕・壺等が出土している。

〔伴出遺物〕遺構に伴うと考えられる遺物には床面、貯蔵穴状ピット、ピット 2 出土の土師器坏・甕、須恵器甕・壺等がある。

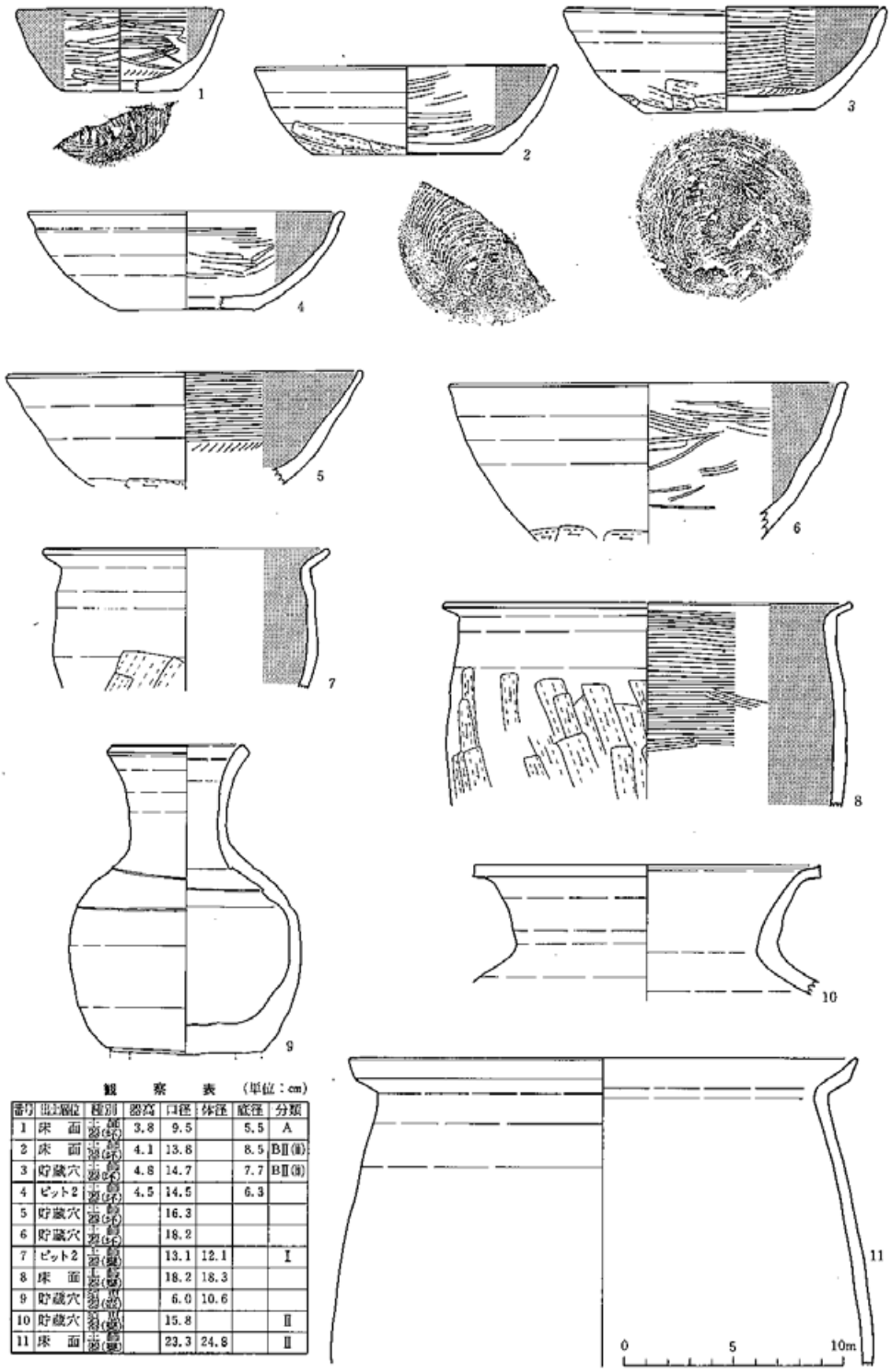
土師器

坏（第 9 図 1～6）製作にロクロを使用していないもの（1）とロクロを使用したもの（2～5）がある。1 は本遺跡から出土した坏のうちで唯一のロクロ不使用のものである。底部形態は平底で、底部から内弯ぎみに外傾する器形である。器面調整をみると底部にはケズリ、内外面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。製作にロクロを使用した坏の器形は、いずれも体部が内弯するが、口縁部で外反（2、4、5、6）あるいは直立ぎみに（3）になる。底



第8図　第２住居跡

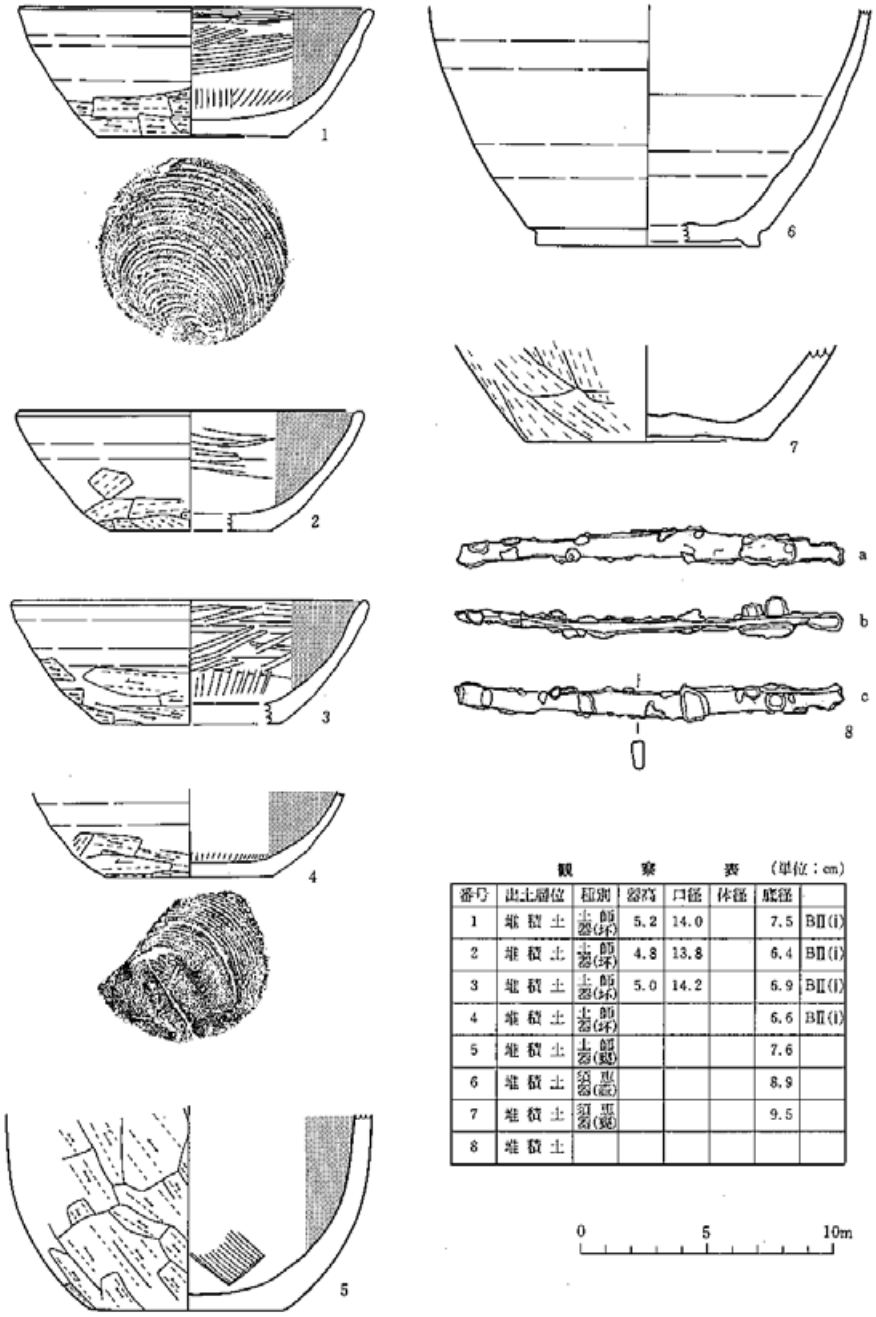
部を有す2、3、4の切離し技法はいずれも回転糸切りで、2、3はその後底部の一部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリが加えられている。5、6の体部下端にも手持ちヘラケズリが施されている。内面にはいずれもヘラミガキ、黒色処理が施されている。4 は磨滅のため調整は不明である。



観　察　表　（単位：cm）

番号	出土層位	種別	器高	口径	体径	底径	分類
1	床　面	土師器(坏)	3.8	9.5		5.5	A
2	床　面	土師器(坏)	4.1	13.8		8.5	BⅡ(a)
3	貯蔵穴	土師器(坏)	4.8	14.7		7.7	BⅡ(a)
4	ピット2	土師器(坏)	4.5	14.5		6.3	
5	貯蔵穴	土師器(甕)		16.3			
6	貯蔵穴	土師器(甕)		18.2			
7	ピット2	土師器(甕)		13.1	12.1		Ⅰ
8	床　面	土師器(甕)		18.2	18.3		
9	貯蔵穴	須恵器(甕)		6.0	10.6		
10	貯蔵穴	須恵器(甕)		15.8			Ⅱ
11	床　面	土師器(甕)		23.3	24.8		Ⅱ

第９図　第２住居跡出土遺物



観　察　表　（単位：cm）

番号	出土層位	種別	器高	口径	体径	底径	
1	堆積土	土器(甕)	5.2	14.0		7.5	BII(i)
2	堆積土	土器(甕)	4.8	13.8		6.4	BII(i)
3	堆積土	土器(甕)	5.0	14.2		6.9	BII(i)
4	堆積土	土器(甕)				6.6	BII(i)
5	堆積土	土器(鉢)				7.6	
6	堆積土	須恵器(甕)				8.9	
7	堆積土	須恵器(甕)				9.5	
8	堆積土						

第10図　第２住居跡推積土出土遺物

甕（第９図7、8、11）製作にロクロを使用したものである。いずれも体部下端から底部が欠損している。7、8は口縁部に最大径をもち、体部がわずかに外側へ膨らみ、頸部がせばま

った後口縁部に達する。体部の器面調整は外面がヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。11 は体部に最大径をもち、体部が外側へ張り出した後頚部に向かって内傾する器形である。長胴のものと推定される。口縁部は外傾し端部が上方につまみ出されている。内外面に再調整は施されていない。

須恵器

壺（第 9 図 9）底部に高台を付した痕跡が認められる。底部から内弯ぎみに立ち上がり丸味を帯びた肩部に達する。頚部は直立した後口縁部に向かって外反する。

甕（第 9 図 10）頚部から口縁部にかけて遺存する。頚部から口縁部にかけて「く」字型を呈し、端部が大きく外反し角ばるものである。

〔堆積土出土遺物〕堆積土から土師器坏・甕、須恵器壺・甕、刀子などが出土した。

土師器

坏（第 10 図 1～4）すべて製作にロクロを使用したものである。器形は底部から内弯ぎみに外傾するもの（2、3、4）と直線的に外傾するもの（1）がある。底部切り離し技法は、いずれも回転糸切りで、体部下端に手持ちヘラケズリが施される。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕（第 10 図 5）体部下半から底部にかけての破片である。外面にヘラケズリ、内面は著しく磨滅しているが、一部ヘラナデ状の調整が認められ、黒色処理が施されている。

須恵器

壺（第 10 図 6）体部下端から底部にかけて遺存する。高台を付し体部は内弯ぎみに立ち上がるものである。内外面にロクロ調整痕を残す。

甕（第 10 図 7）体部をわずかに残す底部破片である。外面にヘラケズリが施されている。

刀子（第 10 図 8）鉄製のもので全長 15.3 ㎝、幅 0.9 ㎝、厚さ 0.5 ㎝を計る。錆化が著しく造込みの方法、茎の位置を明らかにすることができない。

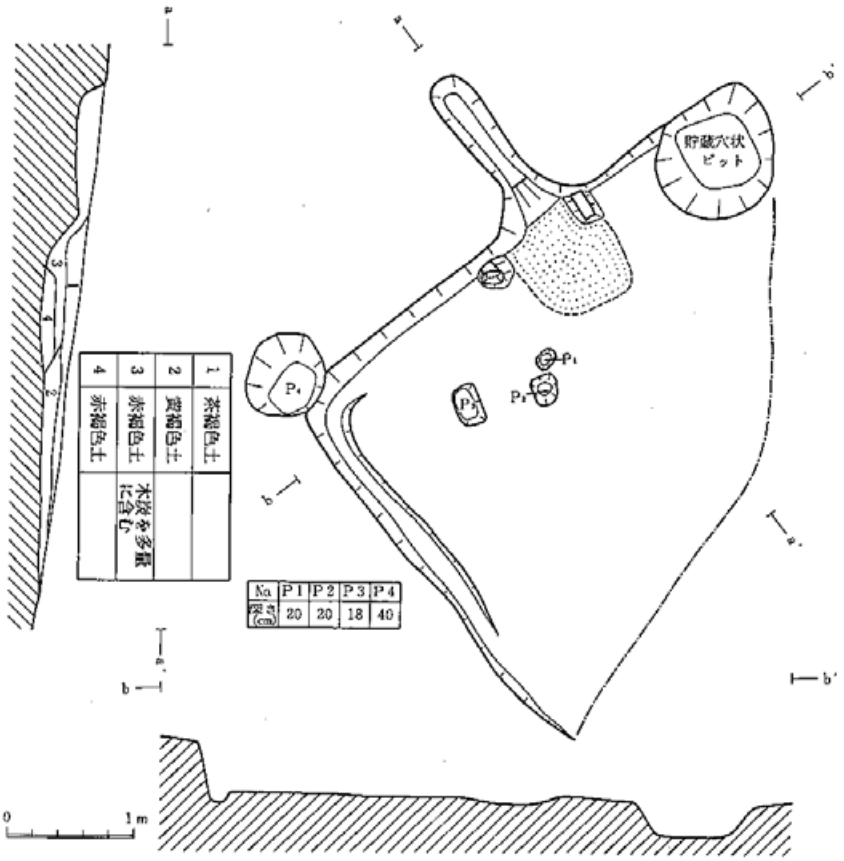
第３住居跡

〔遺構の確認・重複〕M・N・O－13～15 区の地山面で確認された。北東隅がピット 4 によって切られている。

〔平面形・規模〕平面形は南東部分の大半が削平されているが、方形を基調としたものである。規模は遺存状態の良い北辺で、4.4ｍである。北壁は 3.5m、南壁は 3.3ｍほど遺存する。

〔壁〕地山を壁とする。残存壁高は最も高い北壁で 40 ㎝で、立ち上がりは全般的に急角度である。

〔床面〕地山を床とする。削平によって南東部分は失われているが、平坦で固くしまった面をなす。



第11図　第３住居跡

〔柱穴〕床面より３個のピットが検出されたが、柱痕跡を伴うものはなく、また配置に規則性がみられず、柱穴については不明である。

〔周溝〕北西隅から西壁沿いに約2.3mの長さで検出された。上端の幅は14～25㎝、床面からの深さは最深部で10㎝、断面形は「U」字形である。

〔カマド〕北壁に付設されている。燃焼部の規模は側壁の内面で 80×80 ㎝である。左右の側壁は、遺存状態が悪く壁から24～28㎝ほど張り出しているにすぎない。左の側壁には礫が残っている。燃焼部底面は床面より 4～6 ㎝ほど低く掘り込まれ、80×85 ㎝の範囲にわたつて火熱のため赤変している。煙道部は長さ1m、幅26～34㎝で先端に向かって低くなっていく。燃焼部低面との間に24㎝の段差が認められる。

〔貯蔵穴状ピット〕北東隅に位置する。平面形は長軸1.1m、短軸93㎝の円形を呈し、床面からの深さは25㎝である。

〔伴出遺物〕遺構に伴うと考えられる遺物は床面及びカマド内出土の土師器坏・甕がある。

土師器

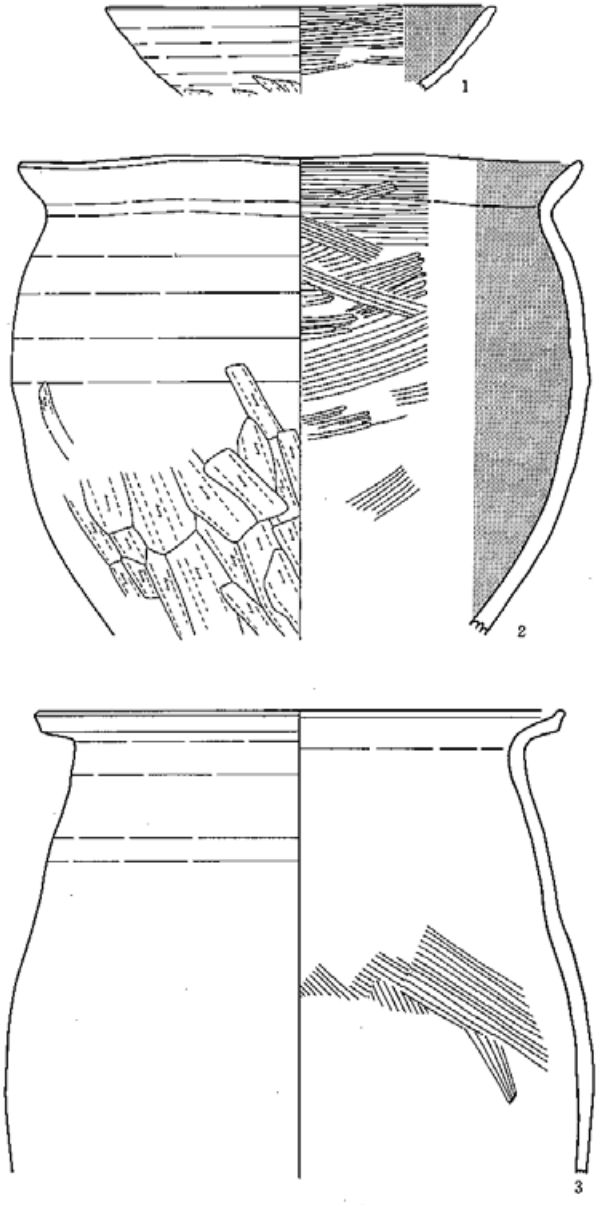
坏（第12図1）製作にロクロを使用したもので底部を欠く。体部下端には手持ちヘラケズリが加えられ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕（第12図2、3）製作にロクロを使用したものである。いずれも底部が欠損している。

2は、体部が丸味を帯び球形に近い形を呈し、頚部に向かって内弯する。口縁部形態は頚部が短く直立した後外傾する。器面調整は、外面の体部下半に縦方向のヘラケズリ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が加えられている。

3は、長胴形を呈すものと考えられる。体部に最大径があり、頚部に向かってせばまる。口縁部形態は、頚部から急角度で外傾し、端部が上方につまみ出される。器面調整は内外面ロクロ調整、内面にはさらに一部ヘラナデが認められる。

〔堆積土出土遺物〕堆積土から土師器甕、須恵器甕が出土している。実測できるものはなく破片集計するのにとどめた。



観　察　表　（単位：cm）

番号	出土層位	種別	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床　面	土師器(坏)					
2	カマド内	土師器(甕)		22.2	22.8		Ⅱ
3	床　面面	土師器(甕)		20.9	23.1		Ⅱ

0　5cm

第12図　第３住居跡出土遺物

第４住居跡

〔遺構の確認〕L・M－10～12区の地山面で確認された。発掘区の最北部に位置する。

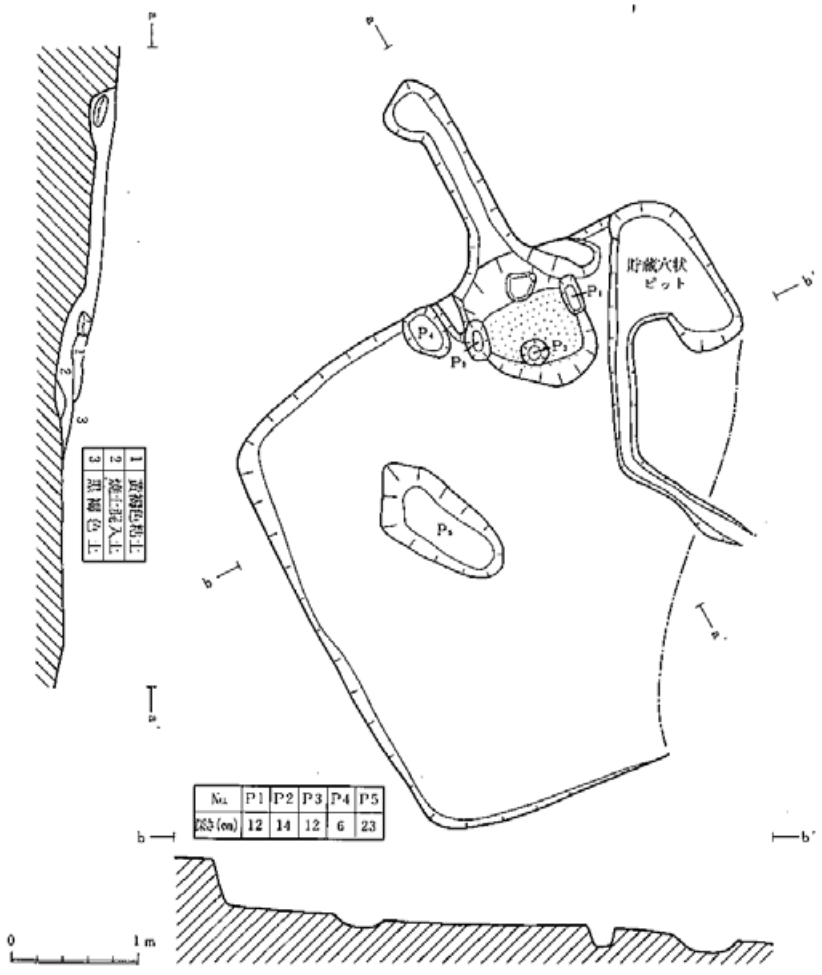
〔平面形・規模〕平面形は南東隅が削平されているが隅丸方形を呈す。規模は残存部で長軸4.1m、短軸4.0mである。

〔壁〕地山を壁とする。残存壁高は最も高い北壁で約40㎝である。立ち上がり角度は下端部で緩やかであるが上端部では急角度である。

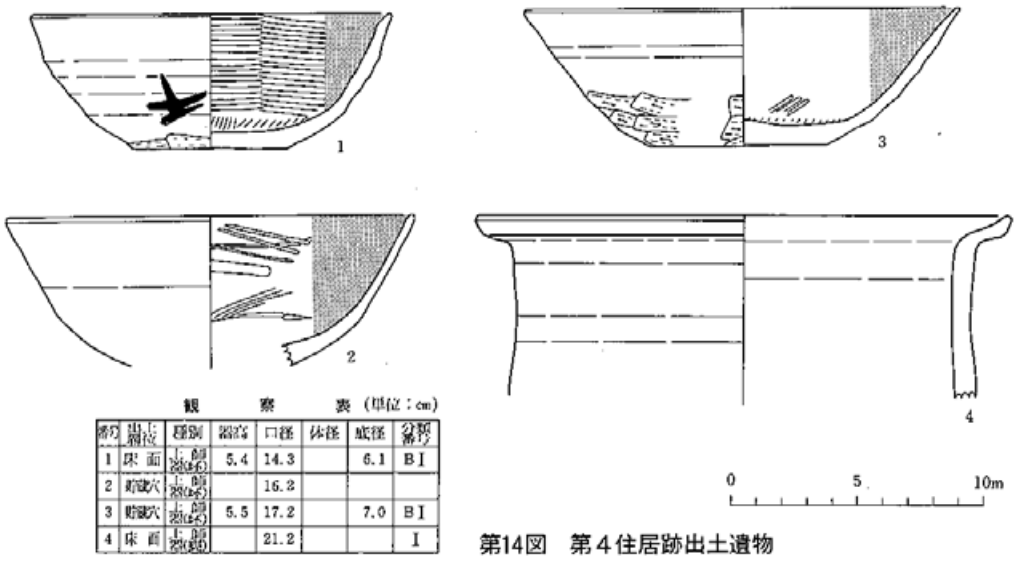
〔床面〕地山を床とする。カマドの周辺部に僅かな起伏が認められるが全体的にはほぼ平坦である。貯蔵穴状ピットと接し平面形が「く」字形を呈す溝が検出された。幅15㎝、深さ10～15㎝、断面形は「U」字形を呈す。

〔柱穴〕6個のピットが検出されたが、柱痕跡を伴うものはなく柱穴については不明である。

〔カマド〕北壁に付設されている。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部の規模は側壁の内側で80×80㎝である。左右の側壁は粘土構築されたものであり、壁より30～40㎝ほど張り出している。左右の側壁に接して2個のピットが検出されたが芯とする石を埋設した時の掘り方など、側壁に関連するものであろう。燃焼部底面は床面より6㎝ほどくぼみ、この範囲内は火熱のため赤変している。ピット3は支脚を用いた時の掘り方である可能性がある。煙道部は長さ1.7m、幅



第13図　第４住居跡



観　察　表（単位：cm）

番号	出土層位	種別	器高	口径	体径	底径	分類
1	床面	土師器(坏)	5.4	14.3		6.1	BⅠ
2	貯蔵穴	土師器(坏)		16.2			
3	貯蔵穴	土師器(坏)	5.5	17.2		7.0	BⅠ
4	床面	土師器(甕)		21.2			Ⅰ

第14図　第４住居跡出土遺物

30 ㎝で先端はピット状を呈す。煙道部と燃焼部は緩やかに接続している。

〔貯蔵穴状ピット〕北東隅に位置する。平面形は長軸 1.3m、短軸 52 ㎝の長楕円形を呈す。平面形が「く」字形の溝と重複しているが新旧関係は明らかでない。

〔伴出遺物〕遺構に伴う遺物には、床面、貯蔵穴状ピットから出土した土師器坏・甕がある。

土師器

坏（第 14 図 1～3）いずれも製作にロクロを使用したものである。2 は底部を欠く。器形は底部から内弯ぎみに立ち上がるもの（1、2）と外傾して立ち上がるもの（3）がある。1、3 は口縁部が外反する。底部切り離し技法は再調整が加えられ識別できなくなっている。外面の器面調整は 1、3 は体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。2 は残存部に再調整がみられない。内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理されている。1 には体部に「千」の字が倒位で墨書されている。

甕（第 14 図 4）体部下半から底部が欠損している。製作にロクロを使用したものである。口縁部に最大径をもつ。器形は体部がほぼ直立し、頸部に達するものである。口縁部は頸部から急角度で外傾し、端部が上方につまみ出されている。

〔堆積土〕堆積土から土師器甕等が出土したが図化できるものではなく、破片集計をするにとどめた。

3. 焼土遺構

A地点の南半部から、形態の異るものが 2 基検出された。

第 1 焼土遺構

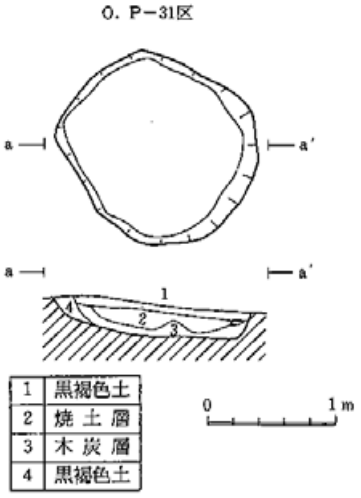
〔遺構の確認〕O・P－31 区の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕平面形は、長軸1.5m、短軸1.3mの円形を呈す。

〔堆積土〕焼土や木炭を含む層が堆積している。壁沿いに黒褐色土が堆積した後に、炭化物層、焼土層が堆積し、黒褐色土によって覆われている。

〔壁〕地山を壁とする。確認面からの深さは約20～30cmである。立ち上りは、下端では急角度になる。

〔底面〕平坦な面をなす。南半部では、厚さ4～6cmにわたって火熱のため赤変している部分が認められた。



第15図　第１焼土遺構

第２焼土遺構

〔遺構の確認〕C・D－30・31区の地山面で確認された。

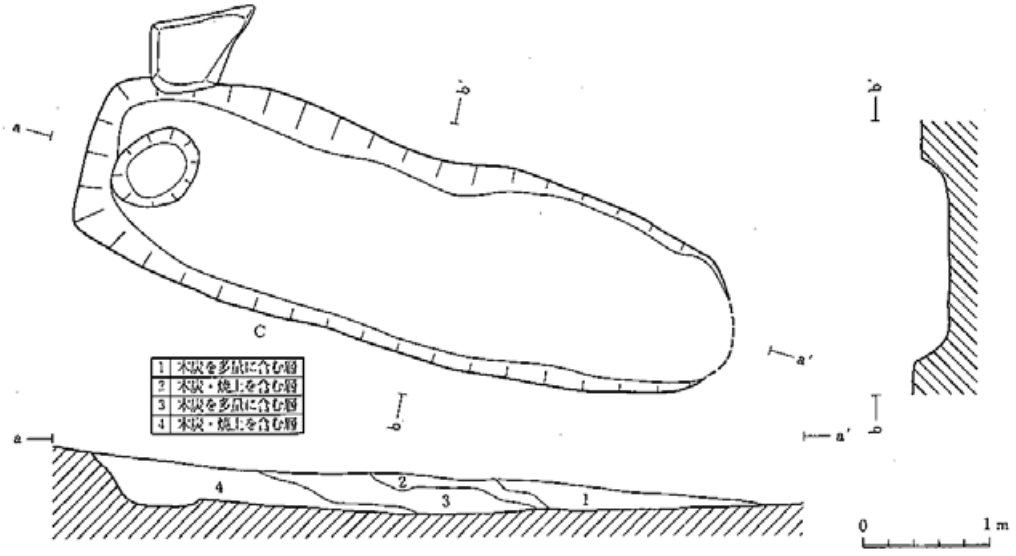
〔平面形・規模〕平面形は、長軸5.30m、短軸1.6mの長方形を呈す。

〔堆積土〕炭化物を多量に含む層と焼土を含む層が交互に堆積している。

〔壁〕地山を壁とする。確認面からの深さは、最も深い北西部で約50㎝、南東側へ行くに従い浅くなる。

〔底面〕一部僅かな起伏が認められるが、全体的には平坦である。中央部がいくぶん窪んでいる。

第１・第２焼土遺構とも遺物は出土していない。



第16図　第２焼土遺構

4. 溝

A地点、K－14・15 区、M・N・O－15 区の地山面から検出された。上端幅約 1.6～3m深さ 60～80 ㎝で、断面形は逆台形を呈す。上層の堆積土からガラスの破片が出土した。

5. その他の出土遺物

溝、あるいは表土および第 2、3 層から土師器、須恵器、縄文土器、石器、剥片、砥石等が出土した。

ａ．土師器（第 17 図 1～4、6）

坏　すべて製作にロクロを使用したものである。2、4 は口縁部を欠く破片である。1、3 の器形は体部から外傾して立ち上り、口縁部が僅かに外反するものである。2、4 は体部が僅かに外側へ張り出している。底部切り離し技法は、いずれも回転糸切りであり、1・3・4 は体部下端と底部の一部に手持ヘラケズリが加えられている。2 は、外面に再調整が施されていない。内面は、ヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕　製作にロクロを使用したものである。口縁部に最大径を持ち、体部がわずかに外側へ膨らむ。口縁部は頚部がせばまった後、外傾する。内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。

ｂ．須恵器（第 17 図 5、7～9）

坏　破片を含め本遺跡から出土した唯一の坏である。体部から直線的に外傾して立ち上る器形である。底部切り離し技法は、回転糸切りである。再調整は認められない。

壺　体部から底部にかけての破片である。短い高台を付し、体部が丸味をもって立ち上る器形である。体部外面に回転ヘラケズリが施されている。

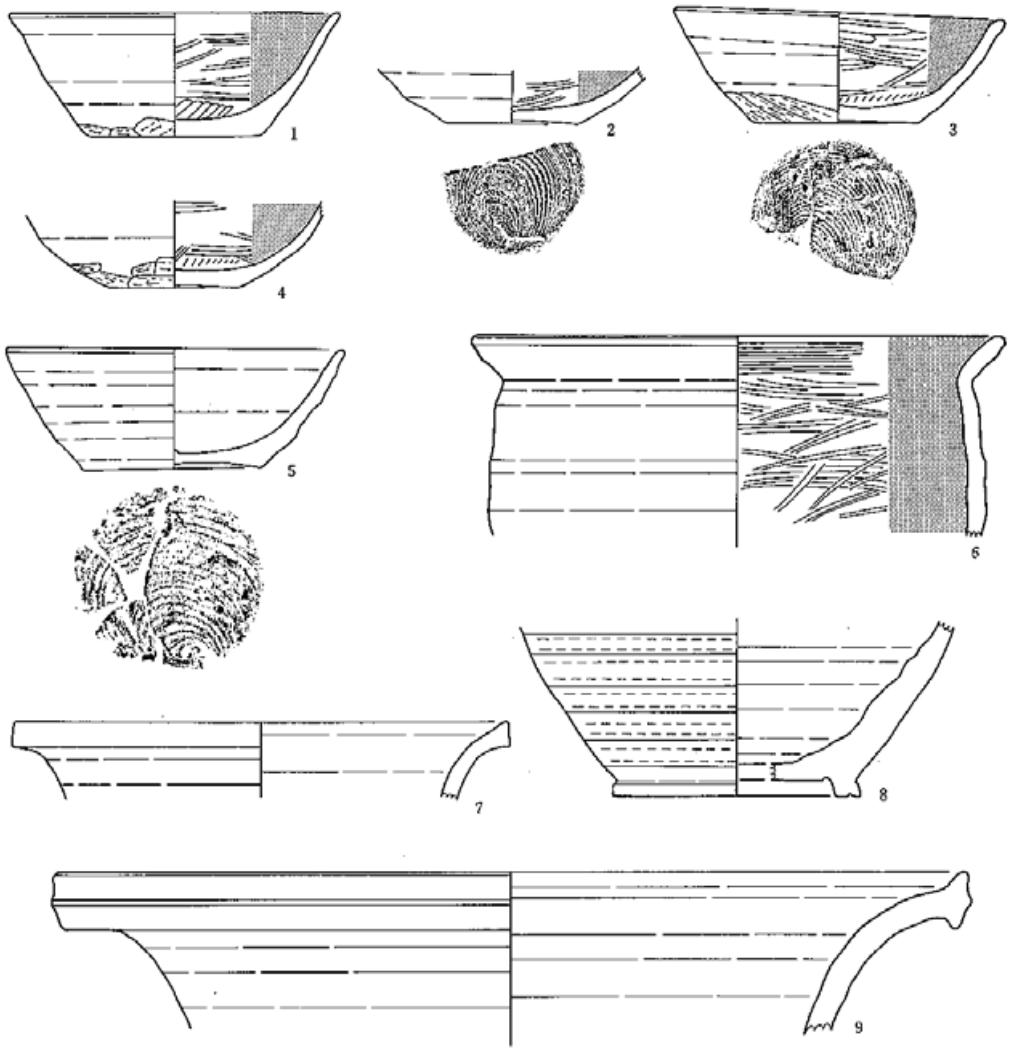
甕　7、9 は何れも口縁部だけの破片である。7 は外反して立ち上った後に、端部が平坦に作られている。9 は大きく外反して立ち上った後に端部が上下につまみ出されている。大型の甕である。

ｃ．石器・剥片（第 19 図）

剥片石器 3 点、剥片 8 点が出土した。ほか砕片が 3 点出土したが小破片であるため省略した。出土地点はすべてA地点である。

剥片石器

石鏃（1）と不定形石器（2、3）である。1 は先端の一部と基部を欠く。両面にやや荒い調整剥離が加えられている。2 は背面の右側縁と下端に調整剥離を加え刃部を形づくっている。腹面には二面の剥離面が認められ、バルバスカーが剥取されている。3 は背面、腹面ともほぼ同一の方向から剥離されている。背面では左、下、右端に、腹面では左右端に調整剥離が加えられ、打面が剥取されている。



観　察　表　（単位：cm）

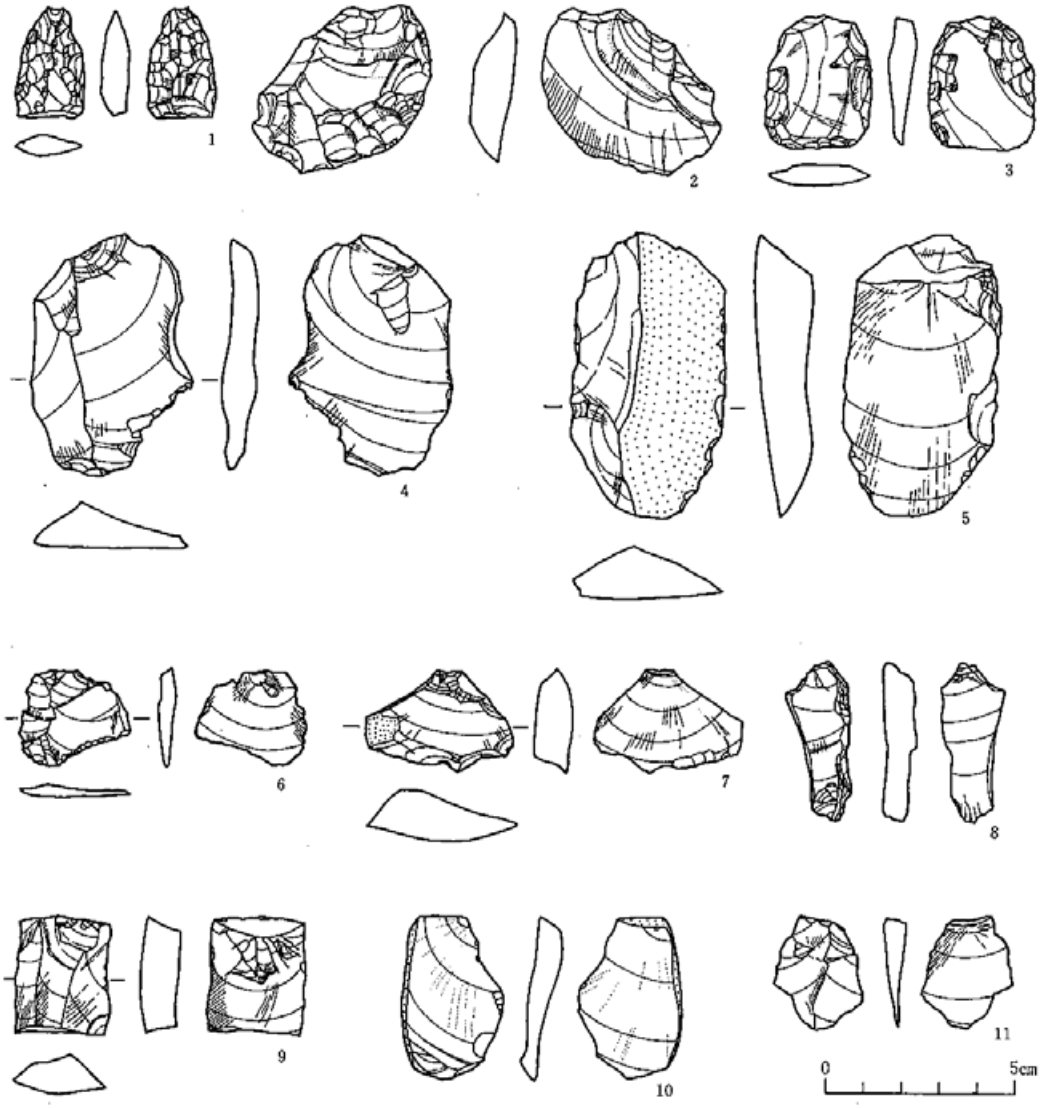
番号	出土層位	種別	器高	口径	体径	底径	分類
1	層位不明 地点不明	土師器(坏)	5.0	13.4		6.3	BII(a)
2	層位不明 地点不明	土師器(坏)				5.3	BIII
3	溝	土師器(坏)	4.7	13.3		6.7	BII(b)
4	層位不明 地点不明	土師器(坏)				5.2	BII(b)
5	層位不明 地点不明	須恵器(坏)	4.9	13.1		7.2	
6	B-27 4層	土師器(甕)		21.3	20.0		I
7	層位不明 地点不明	須恵器(甕)		19.8			
8	N-17 2層	須恵器(壺)				9.9	
9	層位不明 地点不明	須恵器(甕)		36.5			

0　5　10cm

第17図　遺構以外の出土遺物（土師器、須恵器）

剥片

縦長のもの（4、5、8、9、10、11）と横長のもの（6、7）がある。打面は、10が自然打面であるが、他は調整打面である。剥離面に自然面を残すもの（5、7）がある。



番号	出土地点	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	打面	打角	材質
1	G－15層	28.65	18.10	7.35	3.80	—	—	石英安山岩質細粒凝灰岩
2	G－15層	36.00	52.55	12.35	21.80	平坦打面	120～125°	石英安山岩質細粒凝灰岩
3	O－13層	35.00	27.55	6.95	7.65	—	—	流紋岩
4	N-12 1層	61.95	42.40	11.20	24.05	平坦打面	115°	頁岩
5	X － X	73.90	41.20	17.05	51.40	平坦打面	126°	珪質頁岩
6	P-31 3層	24.80	29.20	4.45	2.15	平坦打面	92°	珪質頁岩
7	A-30 3層	27.45	38.80	10.60	10.85	平坦打面	100～125°	石英安山岩質細粒凝灰岩
8	O-3 2層	41.50	16.00	8.25	4.90	平坦打面	110°	珪質頁岩
9	X － X	30.25	25.35	10.85	11.10	平坦打面	116°	玄武岩
10	J-19 2層	42.75	26.70	9.15	8.60	自然打面	108°	石英安山岩質細粒凝灰岩
11	P-31 3層	28.70	23.45	5.80	2.35	平坦打面	98°	珪質頁岩

第18図　遺構以外の出土遺物（石器、剝片）

d．砥石（第 19 図）

3 点発見された。1 は、石英安山岩質細粒凝灰岩製のものである。砥面は一面であり、側縁と裏面は自然面である。2 は、石英安山岩質細粒凝灰岩製のものである。砥面は 4 面から成り先端と末端は欠損している。3 は、砂岩製のものである。4 面に砥面がある。

観　察　表（単位cm）

番号	出土層位	種別	最大長	最大幅
1	遺構未調	砥石	9.54	3.06
2	G-15 3層	砥石	8.99	4.64
3	遺構未調	砥石	10.86	9.72

第19図　遺構以外の出土遺物（砥石）

6. 縄文土器

縄文土器は 63 点出土した。これらのうち時期の推定できるもの 27 点を選んで収録した。いずれも小破片であり、器形の明らかなものはない。

(1)　早期（第 20 図 1～10）

1～6 は、外面は、沈線文と半截竹管による連続刺突文によって施文され、内面にはミガキが施されるものがある。1 は、口縁部破片であり、山形の小突起をもつものと考えられる。植物性繊維を含まないものである。明神裏Ⅲ式と考えられる。

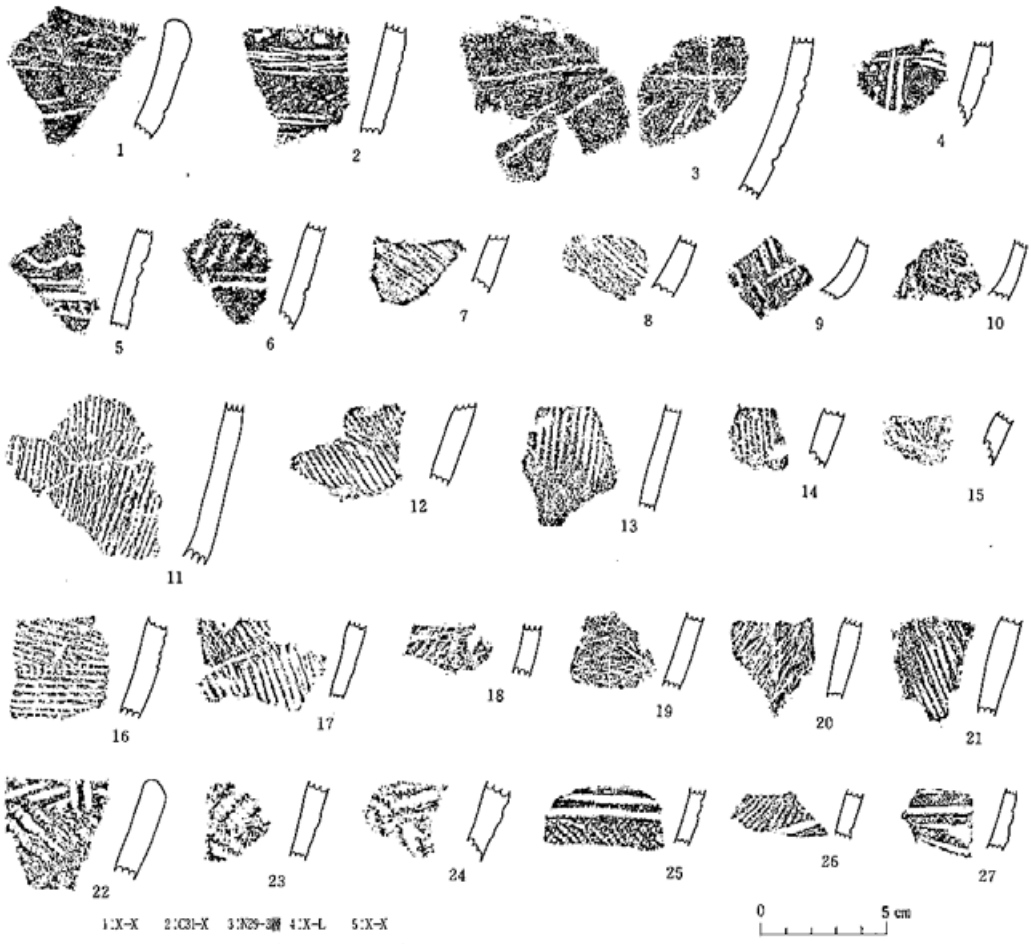
7～10 は、内外面に条痕文が施されている。9、10 は底部破片で砲弾状を呈している。植物性繊維を含んでいる。素山Ⅱ式と考えられる。

(2)　早期～前期（第 20 図 11～21）

11～21 は、破片のため、時期、器形等は断定できないものである。文様をみると外面には全破片に撚糸文が施されている。Ｒの撚糸文(11～16)、Ｌの撚糸文(17、18)、ｒの撚糸文(1 、の撚糸文(20、21)に分類することができる。いずれも植物性繊維を多量に含んでいる。

(3)　前期（第 20 図 22～24）

22～24 は、外面に単節による羽状縄文が施されている。22 は口縁部破片である。口唇部に竹管による刻目が施されている。植物性繊維を含む。前期初頭に位置するものと考えられる。



1:X-X　2:C31-X　3:K29-3層　4:X-L　5:X-X
6:O29-2層　7:X-3層　8:A24-3層　9:K29-3層　10:F76-1層
11:H25-3層　12:C31-1層　13:B25-3層　14:L27-2層　15:X-X
16:O30-1層　17:2住-1層　18:P26-3層　19:P26-3層　20:P27-3層
21:B25-3層　22:X-X　23:X-X　24:K26-3層　25:H25-X
26:3住-2層　27:X-X

第20図　縄　文　土　器

(4)　晩期（第20図25～27）

25～27は、外面には沈線文と縄文（ＲＬ）が施されている。晩期中葉のものと思われる。

Ⅳ. 考　　察

1. 出土土器の分類

出土土器には土師器、須恵器、縄文土器等がある。ここでは図示遺物の多い土師器坏、甕について分類作業を行う。

〔土師器〕

坏　図示遺物のうち底部を有し器形の明らかな遺物を対象に分類作業を行った。製作にロクロを使用していないものとロクロを使用しているものがあり、前者をA類、後者をB類として大別した。

A類　製作にロクロを使用していないものである。1 点出土例がある。底部形態は平底で、体部から口縁部にかけて外傾する器形である。器面調整は底部にヘラケズリ、体部から口縁部は内外面ともにヘラミガキされ黒色処理が施されている。

B類　製作にロクロを使用しているものである。底部切離し技法と再調整技法の相違によってⅠ～Ⅲ類に細分した。

Ⅰ類　底部全面に手持ちヘラケズリが施され、切り離し技法が識別できないものである。体部下端にも手持ちヘラケズリが及んでいる。

Ⅱ類　回転糸切り技法によって切り離され、再調整が加えられているものである。体部下端（ⅰ）、あるいは体部下端から底部の一部（ⅱ）に手持ちヘラケズリが施されている。

Ⅲ類　回転糸切り技法によって切離され、再調整の加えられていないものである。

甕　図示遺物は 11 点を数えたが、底部を欠くものが多く、口縁径と体部径の明らかな 10 点を対象に分類作業を行なった。すべて製作にロクロを使用したものである。最大径の位置によって次の 2 類に分かれる。

Ⅰ類　最大径が口縁部に位置するものである。ロクロの調整の後に体部外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理のみられるもの、体部内外面に刷毛目の施されているものがある底部が回転糸切り技法によって切り離されているものもある。

Ⅱ類　最大径が体部に位置するものである。内外面ともロクロ調整痕がみられるが、その後体部内外面に刷毛目、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理の加えられているものなどがある。

2. 出土土器の組み合わせと年代

① 出土土器の組み合わせ

出土土器は前項のように分類されたが、各住居跡における共伴関係は次のようになり、土師器坏ＢⅢ類を除くすべての類について、組み合わせ関係が成立する。

第１住居跡	土師器坏	ＢⅠ・ＢⅡ類	甕　Ⅰ類
第２住居跡		Ａ　・ＢⅡ類	Ⅰ・Ⅱ類
第３住居跡			Ⅱ類
第４住居跡		ＢⅠ・ＢⅡ類	Ⅰ類

② 出土土器の年代

本遺跡の土師器は上記の類が組み合わせ関係にあることから同一時期のものといえる。その最大の特徴は坏Ａ類を除いて製作に際しロクロが使用されている点である。このことからこれらの所属時期は表杉ノ入式が比定される。

個々の器形でみると、坏にはロクロ使用、不使用がある。前者は底部の切り離しが回転糸切り技法によるものと、再調整されて不明なものがあり、いずれにも手持ちヘラケズリが加えられている。後者は、ロクロ調整痕は観察されないが、内外面ともヘラミガキ、黒色処理されていることと、破片から復原実測したものであることからロクロ使用の有無についても不確定なところがある。

甕は図示したものにはすべてロクロが使用されており、破片集計表に含めたものの中に口縁部破片に１点だけロクロ不使用のものがみられるだけである。

また、内面にヘラミガキ、黒色処理の加えられているものが多い。

このような土師器の特徴を他遺跡と比較すれば、高清水町手取遺跡などの例をみると、坏の外面に再調整が加えられるものは回転糸切りで再調整のみられないものより先行する技術的特徴を有すると考えられ、本遺跡の坏はすべてに再調整がみられることから、表杉ノ入式のなかでも古い時期に位置づけられる可能性がある。ただし、手取遺跡の場合には再調整に回転ヘラケズリが多く、本遺跡では手持ちヘラケズリという違いが認められ、この点がどのような問題を含んでいるかは今後の課題である。

また、内外面ヘラミガキ・黒色処理された坏（Ａ類）は、類例をみても器形と技法の特徴が他の坏と異っており、用途が違う可能性がある。さらに、ロクロ不使用の甕がごく少いことは他に例がなく、須恵器の出土量が少いこととあわせて本遺跡の大きな特徴といえる。

なお、坏ＢⅢ類は他との共伴関係は認められないものの、ロクロ使用の点から表杉ノ入式に属することが明らかである。

3. 遺構の年代

伴出遺物から遺構の年代を考察してみたい。

①竪穴住居跡、竪穴住居跡の年代は、伴出遺物の年代に求めることができる。4 軒の竪穴住居跡からは、いずれも土師器編年上、「表杉ノ入式」期に該当する遺物が出土している。以上から 4 軒の竪穴住居跡の年代は「表杉ノ入式」期であるといえる。

②焼土遺構　第 1 焼土遺構、第 2 焼土遺構とも出土遺物がなく年代は明らかでない。

③溝　堆積土の上層からガラス破片が検出されている。造られた年代は明らかでないが、近代に入ってから廃棄されたものと判断することができる。

V. ま と め

1. 西原遺跡は小起伏丘陵の斜面上に位置する遺跡である。
2. 発掘調査の結果、竪穴住居跡 4 軒、焼土遺構 2 基、溝 1 本が検出された。
3. 竪穴住居跡の年代は、土師器編年上「表杉ノ入式」期に属するものであることが明らかになった。焼土遺構の年代は、出土遺物がなく明らかにすることはできなかった。溝については造られた時期は不明であるが、近代に入ってから廃棄されたものと判断される。
4. 縄文土器や石器が発見されたことにより、縄文時代に既に人々の生活の場として利用されていたことが考えられる。

参 考 文 献

氏家和典(1957)：『東北土師器の型式分類とその編年』「歴史第14輯」

加藤　孝(1954)：『塩釜市表杉ノ入貝塚の研究』「宮城学院女子大学研究論文集Ⅴ」

白鳥良一・高野芳宏(1971)：『東山遺跡』「宮城県文化財調査報告書第24集」

早坂春一・阿部　恵(1980)：『手取、西手取遺跡』「宮城県文化財調査報告書第63集」

佐々木安彦(1972)：『東足立遺跡』「宮城県文化財調査報告書第25集」

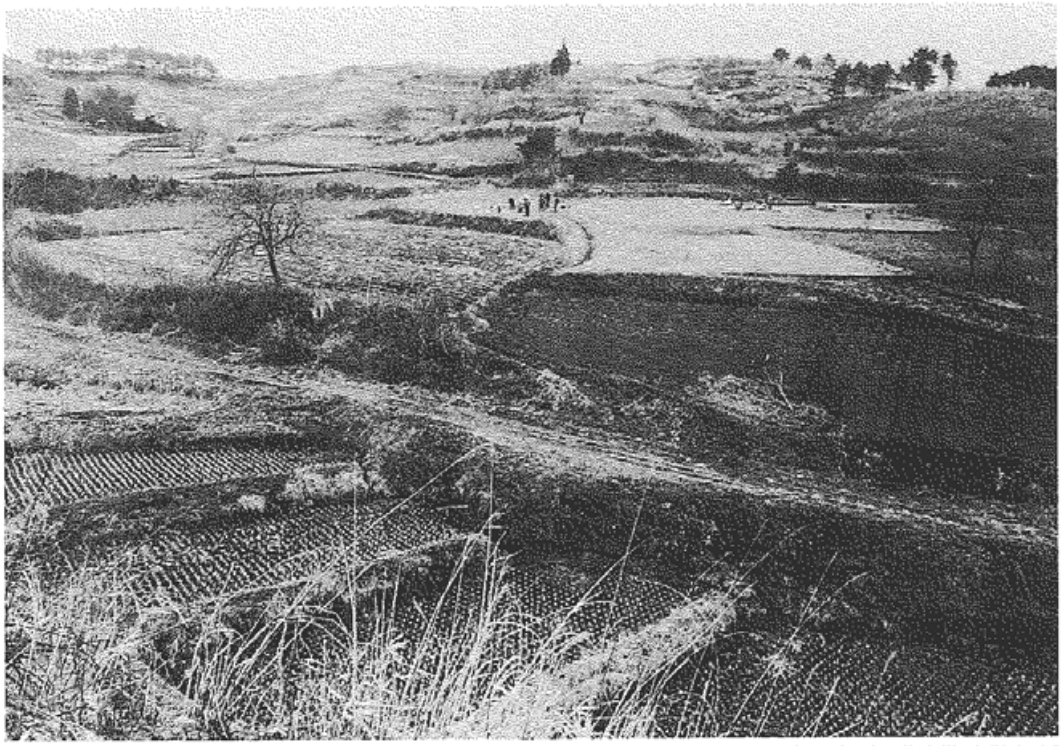
斉藤吉弘・真山悟(1978)：『北沢遺跡』「宮城県文化財調査報告書第56集」

村田町(1978)：「村田町史」

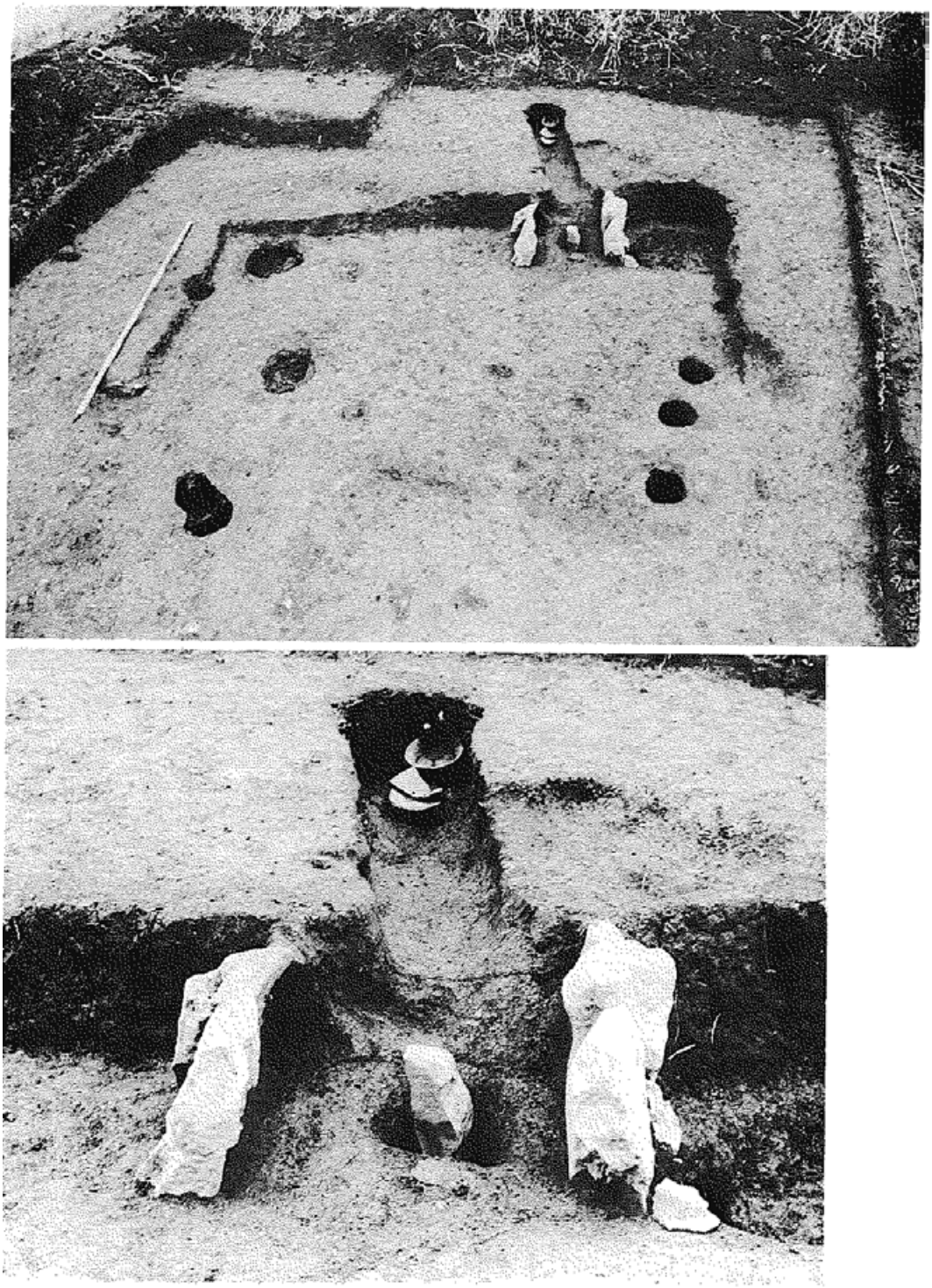
土器破片集計表

			1住					2住							3住						4住				基本層序					計
			床面	カマド	貯	ピット1	埋1	床面	カマド	貯	埋1	埋2	埋3	X層	床面	カマド	貯	埋1	埋2	X層	床面	カマド	埋1	X層	1層	2層	3層	溝	X層	
土器	口縁部	ロクロ－ミガキ(黒色)	1	1		1	2		3	1	16	18	7		4	3		7			1	1	1	7	31	2	4		3	117
		－ミガキ																						2	3					5
		ロクロ・ケズリ－ミガキ(黒色)	3				2				1		1					1							2					10
		不明－ミガキ(黒色)	1									2													4					7
		ロクロ－不明																							1					1
	体部	－ミガキ(黒色)	1								3		6		1	2		1						1	5	1	1			22
		－ミガキ											1			1									2		1			5
		－不明	1								2																			3
		ロクロ・ケズリ－ミガキ(黒色)					1					1	2					1						1	2					8
		－ミガキ																							1					1
		ケズリ－ミガキ(黒色)	2		1					1	2	3	3			2		1						1	16		1		1	34
		－ミガキ							1						1										1					3
		－不明																3			1				1		1			6
		不明－ミガキ(黒色)	3								1	5	3					2	1	1					13	1	3		1	34
		－ミガキ	1									2													2	1	1			7
		不明									1		2												3	1	2		1	10
	底部	回転糸切り	1						3		1		2					1							1	1				10
		回転糸切り＋ケズリ							1		1	1	1												1		1		1	7
		ケズリ	2				1				1					1									11	3	1			20
		不明								1	1		1							1					2					6
土師器	口縁部	ロクロ－ミガキ(黒色)												1											3	1				5
		－ミガキ																		1										1
		－ロクロ	1								2	2	2			2				2					2		1			14
		横ナデ－横ナデ											1																	1
		不明－ミガキ(黒色)																							1					1
		－ミガキ																							1					1
		－不明	1										1					1							3	1				7
	体部	ロクロ－ミガキ(黒色)						1			1																			2
		－ミガキ									1																			1
		－ロクロ							1		2		2			1									1					7
		－不明	2								3					2									1					8
		ロクロ・ケズリ－ミガキ(黒色)	1							1						1														3
		－不明										1													1					2
		ケズリ－ミガキ(黒色)							1		1	1	2												4	1	1			11
		－ナデ							3		1					1														5
		－不明									6	2	1							2										11
		刷毛目－刷毛目	2								11	5	2			2				1										23
		－ヘラナデ																								3				3
		－不明									1	2	2												1					6
		不明－ミガキ(黒色)						1			1		1												2					5
		－ミガキ									1	1		1											1					4
		－ヘラナデ													2					2					1					5
		－ナデ							2		2	3	1	5		1	1			2	1	1		1	1					21
		－刷毛目							1			6		5											3	1				16
		－不明	6				1	2	2	1	11	20	11	33	1	4	3			12				5	18	4	4	1		139
	底部	糸切り								2															1					3
		ケズリ	2											2											1					5
		不明	1								1	1	1	1										1	4			1		11
須恵器	甕	平行タタキ－オサエ													4		2		2		2				6	1			3	20
		－不明				2											1								2					5
		ロクロ－ロクロ																								1				1
		不明－オサエ																							2					2
		－不明																							1					1
	壺	ロクロ－ロクロ																							1					1
		不明－不明																											1	1
																									3					3
		計	35	1	1	3	7	4	18	7	75	76	56	48	13	23	7	18	3	24	5	2	1	19	167	23	22	2	11	671

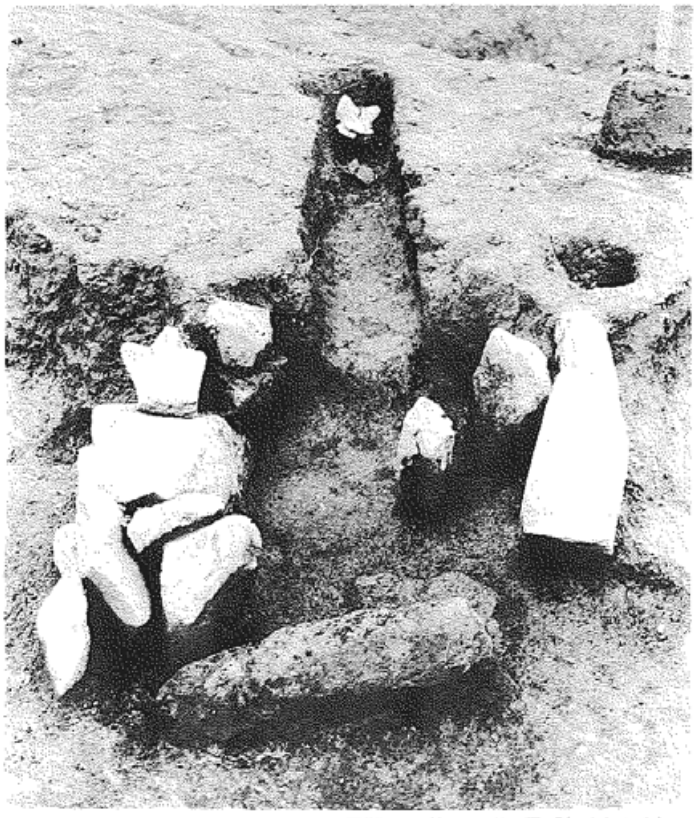
写　真　図　版



図版1　遺跡遠景（南から）

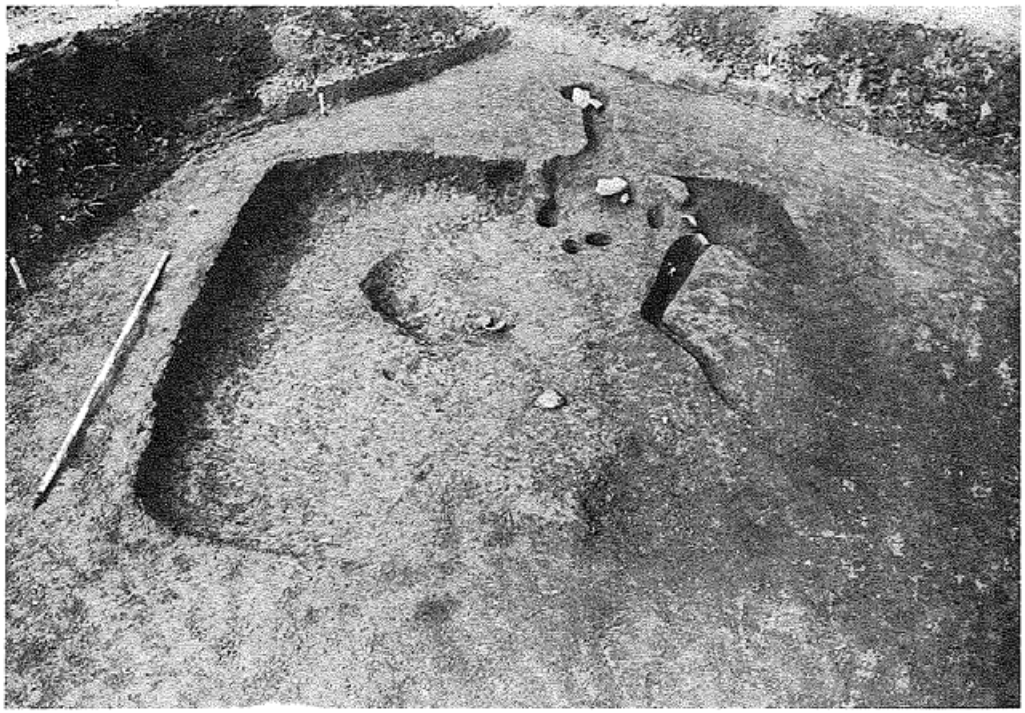


図版2　第 1 住 居 跡 (南から)



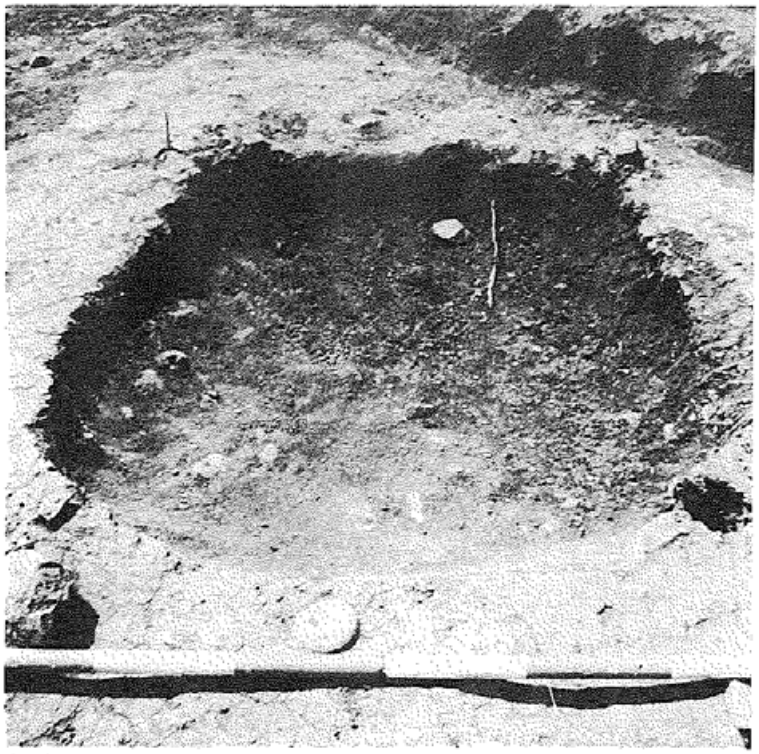
図版3　第 2 住 居 跡（南から）

第３住居跡（南から）

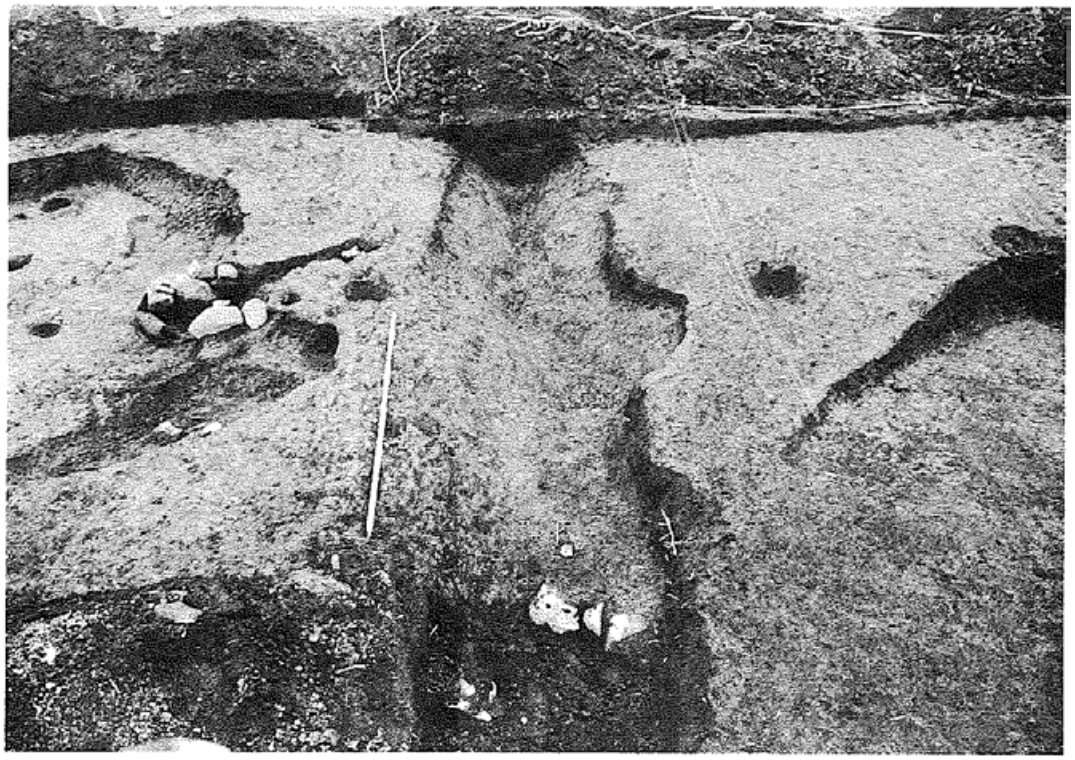


第４住居跡（南から）

図版４　第３・４住居跡

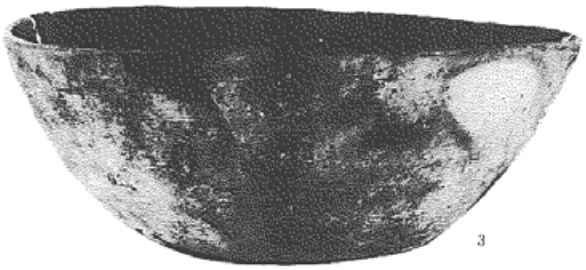


焼土遺構

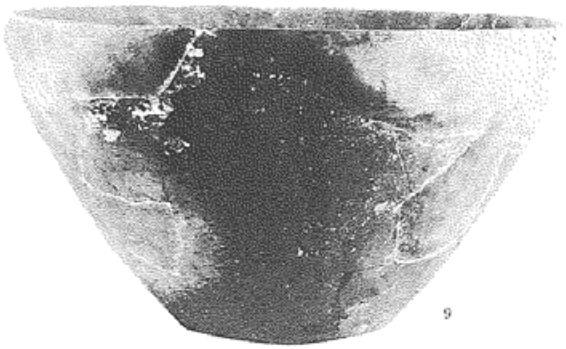


溝

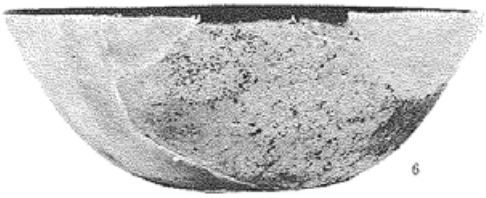
図版5　焼土遺構・溝

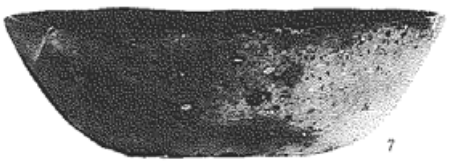


1：第6図1　6：第6図5
2：第6図2　7：第6図6
3：第6図4　8：第6図7
4：第6図3　9：第7図2
5：第7図1　（縮尺不同）



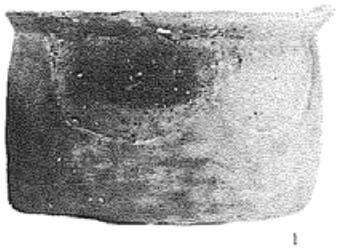
図版6　第1住居跡出土遺物





1：第9図1
2：第9図2
3：第9図3
4：第9図4
5：第9図6
6：第9図5
7：第10図1
8：第10図2
9：第10図3
（縮尺不同）

図版7　第2住居跡出土遺物（Ⅰ）



1

5

2

6

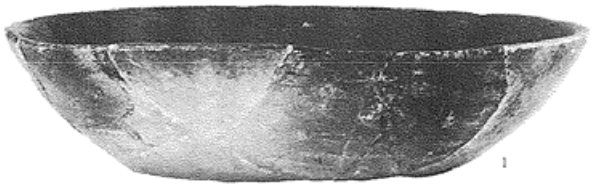
3

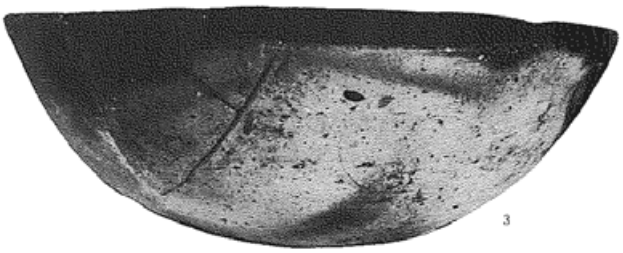
7

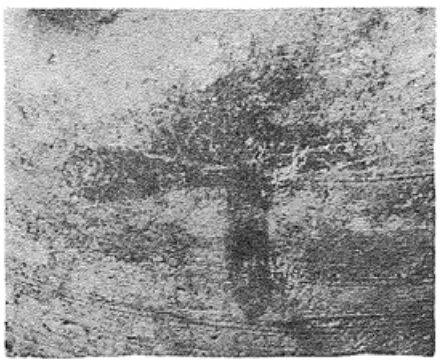
1：第9図7
2：第9図9
3：第9図10
4：第10図6
5：第9図8
6：第9図11
7：第10図5
（縮尺不同）

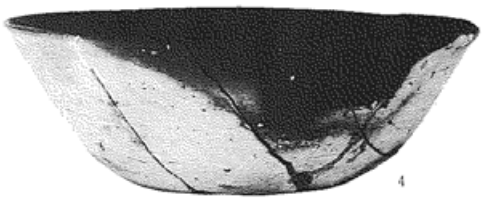
4

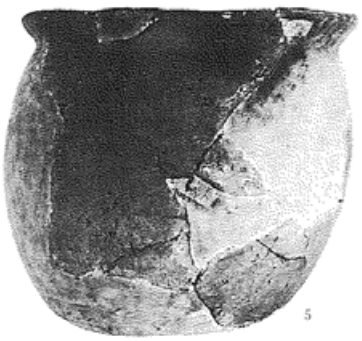
図版8　第2住居跡出土遺物(Ⅱ)





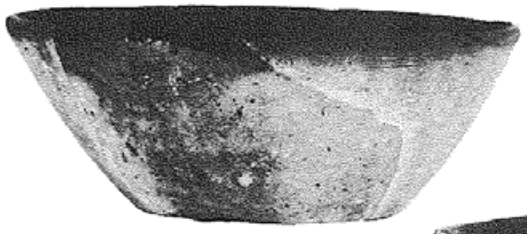






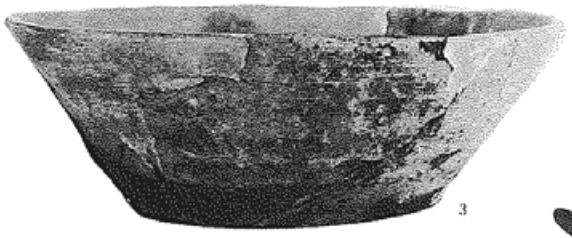
1：第12図1　5：第12図2
2：第14図1　6：第12図3
3：第14図3　7：第14図4
4：第14図2　（縮尺不同）

図版9　第3・4住居跡出土遺物



1

2



3

4

5

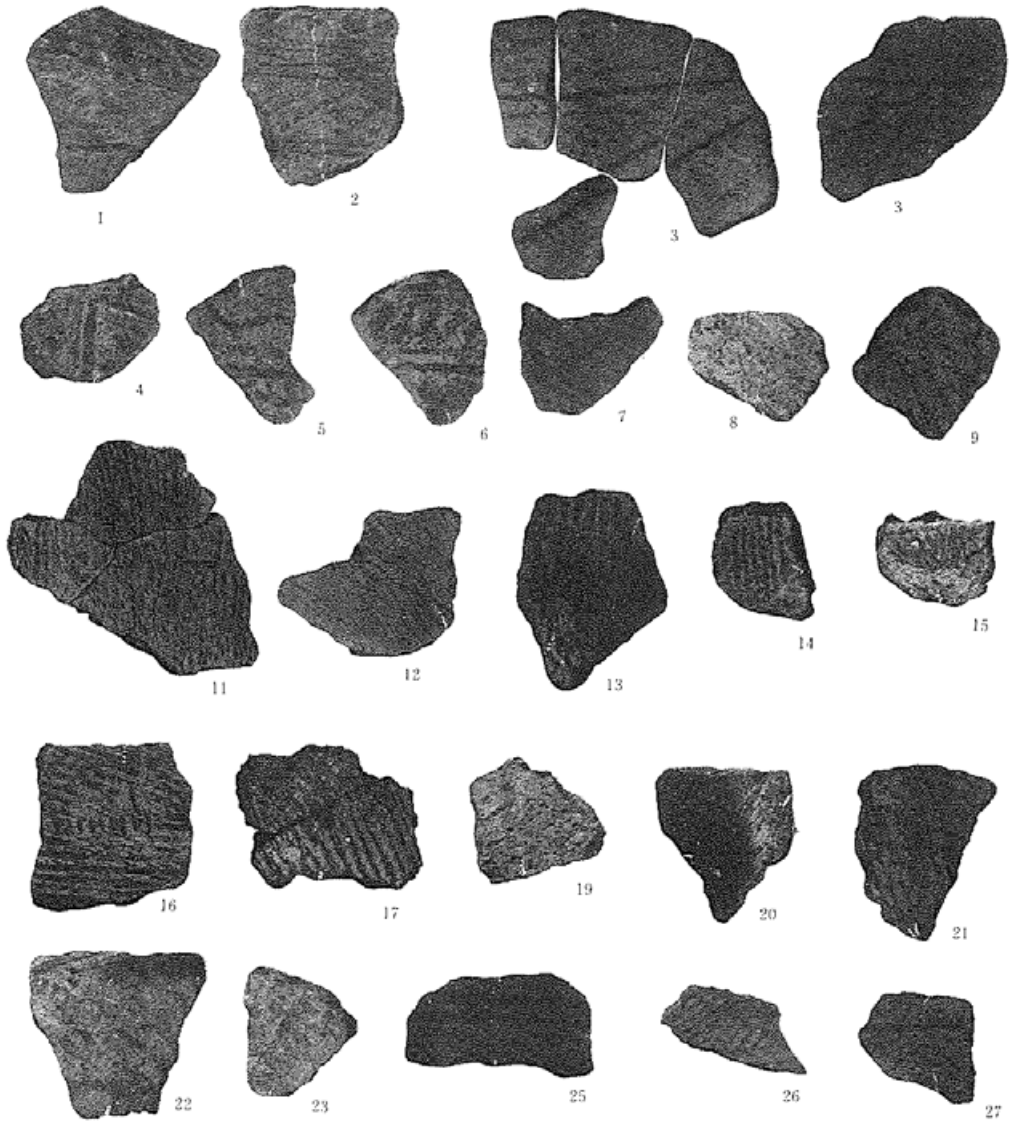
6

7

8

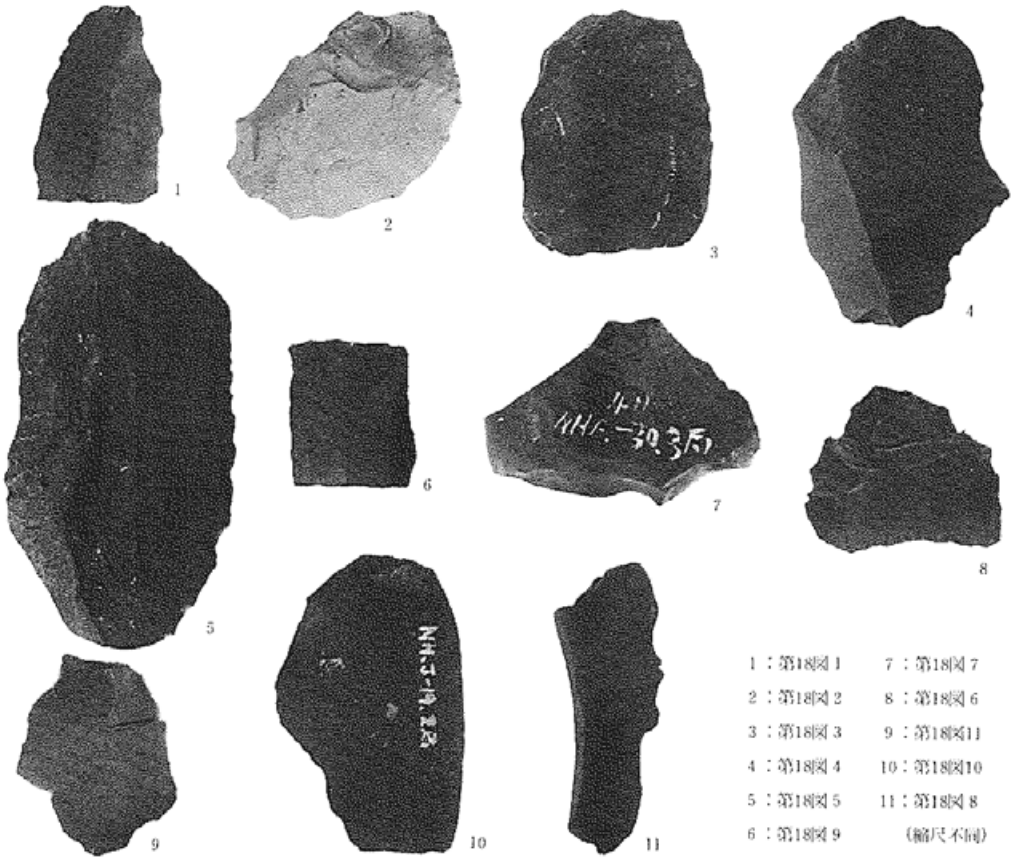
1：第17図1
2：第17図3
3：第17図5
4：第17図8
5：第17図6
6：第17図7
7：第19図1
8：第19図2

図版10　遺構以外の出土遺物

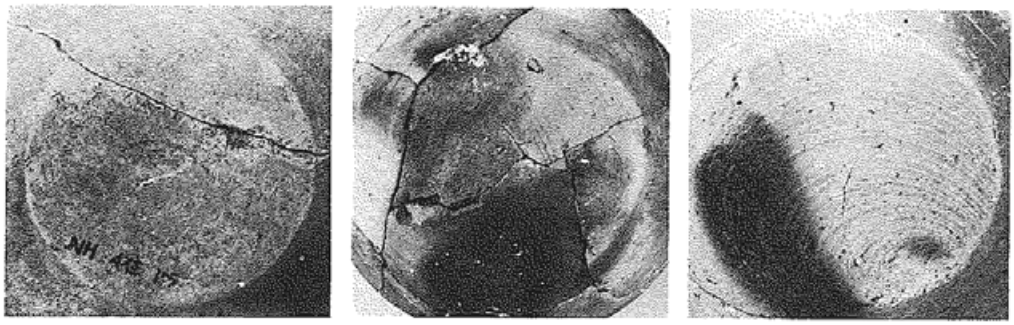


番号は指定図と共通

図版11　出土遺物（縄文土器）



1：第18図1　7：第18図7
2：第18図2　8：第18図6
3：第18図3　9：第18図11
4：第18図4　10：第18図10
5：第18図5　11：第18図8
6：第18図9　（縮尺不同）



図版12　出 土 遺 物（石器・剥片）

(5) 一本杉遺跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置 395
Ⅱ．調査の経過 395
Ⅲ．調 査 結 果 395
Ⅳ．ま と め 397

調 査 要 項

遺　跡　名：一本杉遺跡

遺 跡 記 号：ＢＢ（宮城県遺跡地名表登載番号：27032）

遺跡所在地：宮城県古川市宮沢字一本杉

調査対象面積：約6,000 ㎡（発掘面積：約2,070 ㎡）

調 査 期 間：昭和49年12月3日～12月20日

調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課

平沢英二郎・恵美正之・熊谷幹男

Ⅰ．遺跡の位置

一本杉遺跡は、陸羽東線古川駅より北西約７㎞の古川市宮沢字一本杉に位置する。古川市を中心に広がる大崎平野の北側には、奥羽山脈より派生する標高 50m前後の（築館丘陵）が樹枝状に東に延びている。この丘陵の南側で、大崎平野に直面するのが、本遺跡のある長岡丘陵である。標高 50m前後のこの丘陵は本遺跡のある化女沼西側付近で、急に幅 500m前後にくびれて細くなりながら、標高 30m前後の緩斜面になり、さらに、南に約 1.２㎞のびた端部で、ふたたび、標高 50m前後の丘陵となる。現状は大部分が畑地であるが、休耕地のためひどく荒れており、一部分は原野となっている。丘陵下は水田となっており、遺跡との比高は約 10mである。

付近には、南約 700mに愛宕山遺跡、同約 400mに長者原遺跡、そして化女沼の東 500mには朽木橋横穴古墳群などがある。

Ⅱ．調査の経過

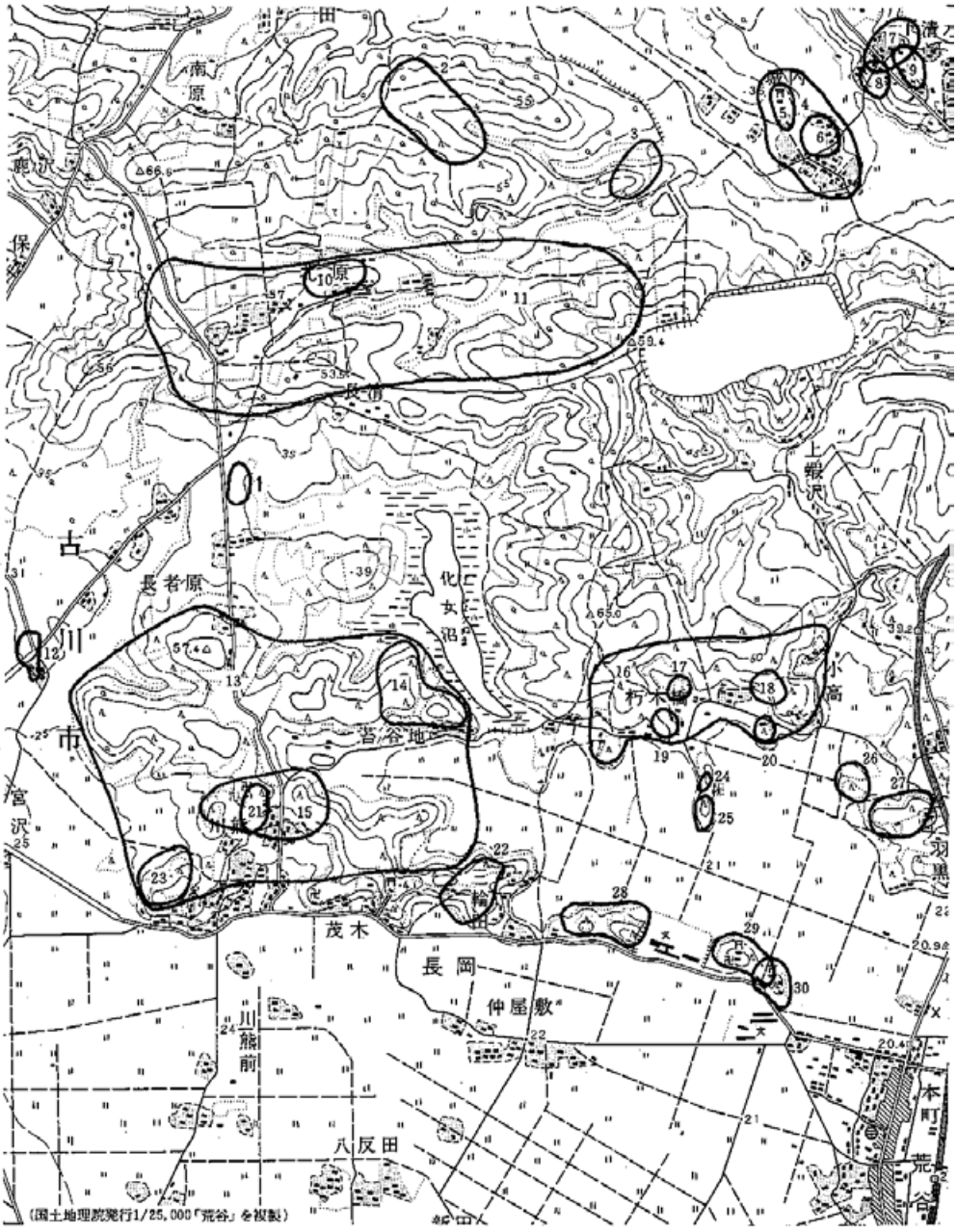
一本杉遺跡は昭和 47 年の自動車道の分布調査の際に発見された遺跡で、縄文晩期、平安期の土師器片が表採され遺跡として登録されていた。発掘調査は昭和 49 年 12 月 3 日に開始された。

調査区を設定するにあたってはＳＴA334＋20 を基準にＳＴA334＋40 と結ぶ線を北東－南西の基準線とし、ＳＴA334＋20 上で直交する線を基準線として、対象地区全体に 30m単位の方眼を組んだ。グリッド名は 3m単位に北東－南西方向をアラビア数字、南東－北西方向をアルファベットで示した。

発掘調査は自動車道道路敷内に 3mおきに幅 3m長さは道路敷いっぱいのトレンチを入れ、北東方向より南西方向にむかって行なわれた。遺構はまったく検出されず、遺物も表土から土師器片 1 片という状態のため、途中よりトレンチ間を 6mに広げ、調査を行なった。遺跡はほとんどが畑地で一部が原野となっている。表土は黒色ノボク土で、層は 3～6 層認められたが、地山に至るまで、ほぼ同質の土が堆積している。地山は黄色の凝灰岩風化土である。遺構はまったく検出されず、遺物も縄文時代の土器片、平安時代の土師器片、須恵器片がそれぞれ少量、無茎の石鏃 1 点が発見されただけである。調査は 12 月 20 日終了した。

Ⅲ．調 査 結 果

遺構はまったく検出されなかった。遺物は縄文時代晩期土器片が 58－Ｖ区表土から、平安時代の土師器片が 22－Ｖ区、20－Ｉ区表土から、同じく須恵器片が 55－Ｒ区表土より少量出土し



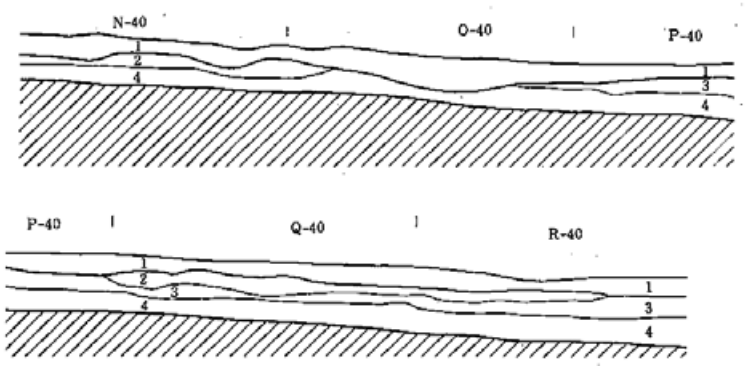
1.一本杉遺跡　7.市ケ坂館跡　13.宮沢遺跡　19.小野横穴古墳群　25.小野横穴古墳群
2.畑谷地古墳群　8.堀崎遺跡　14.苔ノ谷地遺跡　20.小野横穴古墳群　26.いもり塚周辺遺跡
3.十八引沢遺跡　9.梅女遺跡　15.長清古墳　21.稲荷塚古墳　27.小野横穴古墳群
4.鴻ノ巣館跡　10.北原遺跡　16.姥沢遺跡　22.三輪田遺跡　28.権現山遺跡
5.鴻ノ巣遺跡　11.原者原遺跡　17.姥崎横穴古墳群　23.川熊館跡　29.稲荷山遺跡
6.城内窯跡　12.庚塘遺跡　18.姥沢小高窯跡　24.岩崎古墳　30.新江川遺跡

第1図　一本杉遺跡と周辺の遺跡

ている。52－Q区表土からは無柄石鏃が１点出土している。遺物は極めて少量であり、広い範囲にわたってわずかに散布するだけである。また、いずれも表土または、その付近からの出土であり、地山近くよりの遺物の出土はまったくなかった。

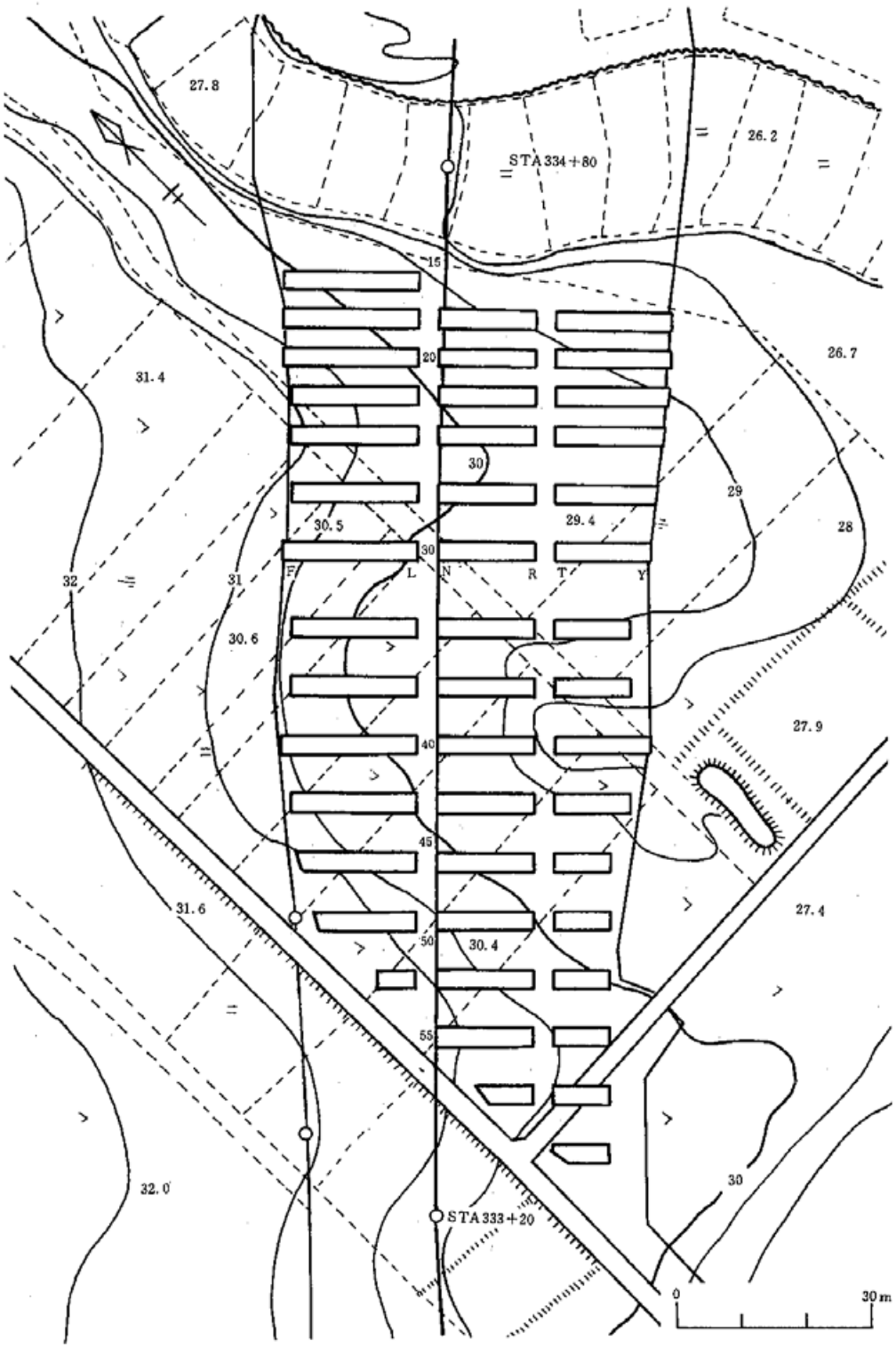
Ⅳ. ま と め

1. 一本杉遺跡は長岡丘陵の標高30m前後の緩斜面上に位置している。
2. 今回の調査によって遺構はまったく発見されず、遺物も縄文晩期土器片、平安期の土師器須恵器片少量と無茎石鏃１点を発見しただけである。
3. 層は3～4層認められたが、地山に至るまで、ほぼ同質の土が堆積している。
4. 出土遺物はわずかで、すべて表土近くの層中よりの出土であり、地山近くの層中よりは出土していない。
5. 以上のことから、本遺跡の中心は道路敷外にあり、今次発掘区はその散布地であることが判明した。



大別層	層No.	土　色	土性	混入物、その他
第Ⅰ層（表土）	1	暗　褐　色(10YR3/3)	シルト	耕作土である
	2	暗　褐　色(10YR3/4)	シルト	No1層よりややかたい
第Ⅱ層	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山の土が混入している　やや粘質
第Ⅲ層	4	黒　褐　色(10YR2/2)	シルト	やわらかい

第２図　40区セクション図


27.8
26.2
STA 334＋80
15
20
26.7
31.4
30
29
30.5
29.4
28
30
F
L
N
R
T
Y
32
31
30.6
27.9
40
45
31.6
27.4
50
30.4
55
30
32.0
STA 333＋20
0
30m

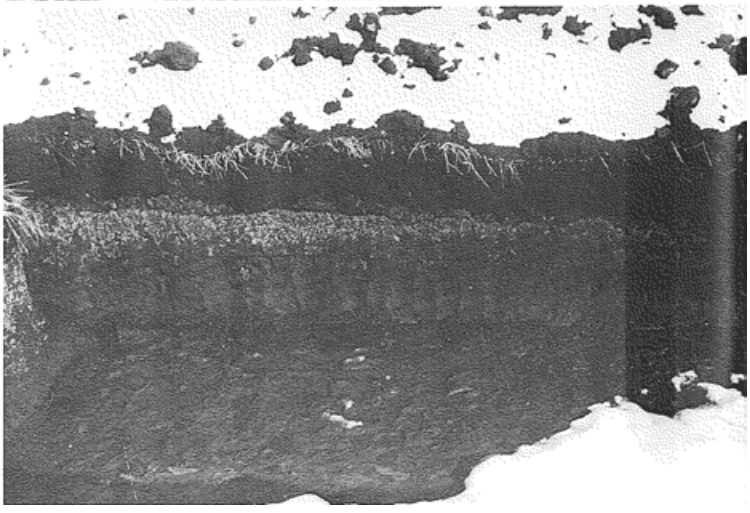
第３図　トレンチ配置図

写　真　図　版

遺跡全景
（南側から）

遺跡全景
（北側から）

発掘区堆積層の状況



(6) 宮（みや） ノ 脇（わき） 遺 跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境 403
1．位置と地形 403
2．周辺の遺跡 403
Ⅱ．調査の経過 405
Ⅲ．発見された遺構と遺物 405
1．塚 405
2．土壙 415
3．溝 416
4．表土出土の遺物 416
Ⅳ．考　察 417
Ⅴ．まとめ 420

調 査 要 項

遺　跡　名：宮の脇遺跡
遺 跡 記 号：ＢＦ（宮城県遺跡地名表登載番号：44022）
遺跡所在地：宮城県栗原郡高清水町小山田萩生田字宮ノ協
調査対象面積：約 400 ㎡（発掘面積 210 ㎡）
調 査 期 間：昭和 48 年 7 月 3 日～7 月 14 日
調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課　白鳥良一
調 査 指 導：三崎一夫（河北新報社勤務）
調査協力者：佐藤正人（東北学院大学学生）
　　佐藤房枝（　　〃　　）
　　斉藤真澄（　　〃　　）

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1. 位置と地形

宮の脇遺跡は栗原郡高清水町小山田荻生田字宮ノ脇に所在し、高清水町役場から北西約４㎞一迫町、岩出山町、さらに古川市、築館町とも近接した地域に位置している。奥羽山脈からはいくつもの丘陵が派生しているが、県北部の山塊を形成する栗駒山や荒雄岳からは標高約 100ｍの築館丘陵が南東方向にのびている。この丘陵は、岩出山町や高清水町付近ではさらにいくつかの小丘陵に分岐している。本遺跡はその一つで、岩出山町真山付近から南東方向に細長くのび、端部が高清水町中心部の北側にまで達している小丘陵の尾根上に立地している。本遺跡が立地する小丘陵の北側には一迫町持会沢の持会沢堤より発する善行寺川が、南側には、遠く玉造郡鳴子町上原より発し、高清水町の灌漑をあずかる小山田川が東流している。小山田川は透川などの支流を集め、高清水町の中心部の南側を通過し、町の東側で善光寺川と合流する。これら丘陵地帯を画している各河川の流域には扇状地性低地が発達しており、現在、主に水田として利用されている。立地する小丘陵は遺跡の付近で幅がせばまっており、南北幅は約 400ｍほどである。さらに尾根付近には、幅100ｍの平坦面がみられる。この平坦面は標高約62ｍ南側水田との比高約30ｍで、北から南にかけてゆるやかに傾斜している。現状は雑木林で、この林中に５基の塚が東西方向に１列に並んで立地している。なお、今回の調査対象からはずれるが、この塚付近の丘陵南斜面には方形の土壇がみられる。

2. 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には縄文時代から近世にいたるまでの数多くの遺跡が存在する。これらのうちでは、奈良、平安時代の遺跡が最も多く、台地上の各所に集落が営なまれるようになる。なかでも五輪Ｃ遺跡や西手取の遺跡では、これまでの発掘調査によって数軒ずつの竪穴住居跡などが検出され、当時の集落の様相が把握されている。中世になると高清水城、新圧館、陣館などの城館が一定の地域単位につくられるようになる。観音沢遺跡からは掘立柱建物跡や井戸跡などが多数検出され、全国的にも類例の少ない中世集落を解明する貴重な手がかりが得られた。

さらに、本町内には弘安や延文などの元号をもつ板碑もみられ、当時この地における民間信仰の普及のようすがうかがえる。

一方、本遺跡の西方約２㎞には、中世から近世にかけての墳墓であると考えられている清水側遺跡がある。内部施設に土壙やピットをもち、火葬骨が出土するなど、本遺跡といくつかの類似点を有しており興味深い。

1．宮の脇遺跡　11．袖山遺跡　21．高清水城跡　31．新寺館跡　41．松ノ木沢田遺跡A
2．陣館館跡　12．五輪C遺跡　22．明宮遺跡　42．一ノ坪遺跡　42．一ノ坪遺跡
3．小深沢殿上館跡　13．五輪B遺跡　23．外沢窯跡　33．梅女遺跡　43．下沢田遺跡
4．小深沢遺跡　14．五輪A遺跡　24．透川遺跡　34．堀崎遺跡　44．覚満寺跡
5．小深沢Ⅱ遺跡　15．新庄館跡　25．観音沢遺跡　35．鴻ノ巣館跡　45．中ノ峯遺跡
6．下田遺跡　16．下折木遺跡　26．向野B遺跡　36．鴻ノ巣遺跡　46．大窪遺跡
7．経壇遺跡　17．下佐野遺跡　27．松ノ木沢田遺跡C　37．城内窪跡　47．下堰沢遺跡
8．殿上館跡　18．大寺遺跡　28．向野A遺跡　38．仰返り地蔵前遺跡　48．運雉館跡
9．極楽寺跡　19．堂の池遺跡　29．台町西遺跡　39．萩田遺跡　49．西手取遺跡
10．宿ノ沢遺跡　20．東館遺跡　30．北山開古墳群　40．松ノ木沢田遺跡　50．生深町遺跡

第1図　宮の脇遺跡と周辺の遺跡

Ⅱ．調査の経過

本遺跡は東北自動車道関係の分布調査により、この丘陵尾根上の雑木林中に、東西に並んでいる5基の小塚が発見され遺跡として登録された。今回、本遺跡の範囲が東北自動車道の路線内となるため、発掘調査が実施された。調査は塚の構造と性格を把握するとともに、塚周辺についても遺構の有無を調査することを意図して行なわれた。調査は、昭和48年7月3日から開始された。最初に現状のまま塚の測量図を作製した。その後、各塚の断面図を作製し、のこり半分を基底面まで掘り下げた。ついで東西約33m、南北約6～10mの範囲に塚の大きさに応じて5基の塚を取り囲むように調査区を設定した。塚の名称は東側から1号～5号とした。1号塚はこの塚の東をはしる道路によって、東半分がこわされ、すでに失われている。発掘は盛土観察のため、塚の半分をのこして盛土の観察および、内部主体の検出を行ないながら順次基底面まで掘り下げた。

その結果、5基の塚のうち、第1号塚周縁部からはピット2個、配石が、第2号塚中央部基底面からは土壙1基とピット3個が、第3号塚中央部基底面からは土壙1基とピット7個が、塚以外の調査区からは塚から検出された土壙よりやや規模の小さい土壙2基、長軸の方向にピットを持つ土壙2基、溝1の遺構などが検出された。遺物としては、土壙内より火熱を受けて変形した古銭10枚、磁器片1、人の歯の残片1、赤焼土器片が、盛土、溝、および塚以外の調査区より赤焼土器、須恵器片、石器の遺物が出土した。調査は7月14目に終了した。発掘面積は塚、およびその周囲約210㎡である。

Ⅲ．発見された遺構と遺物

1．塚

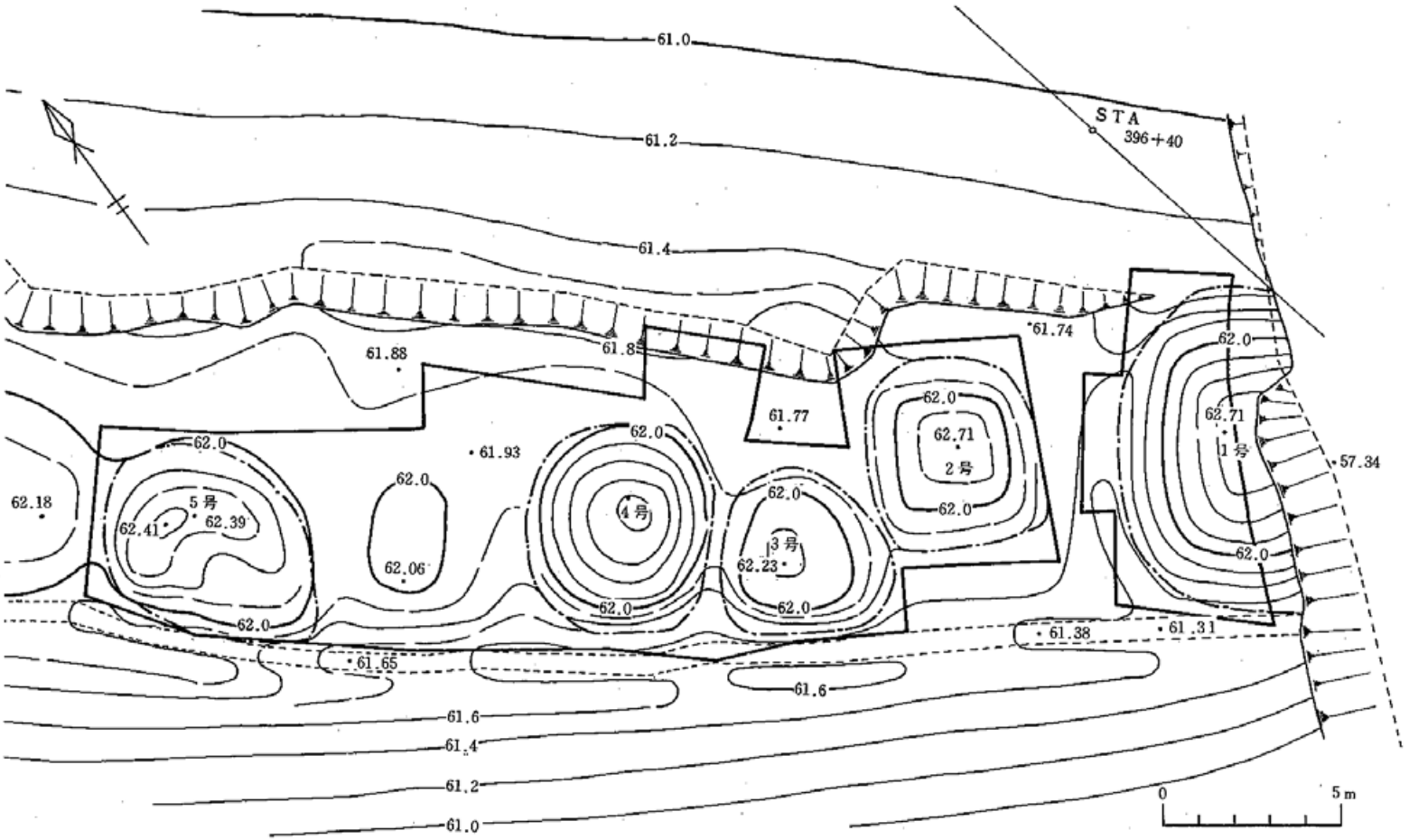
以下1～5号塚について調査結果を記す。なお、塚の規模については表土除去前の数値である。

第1号塚

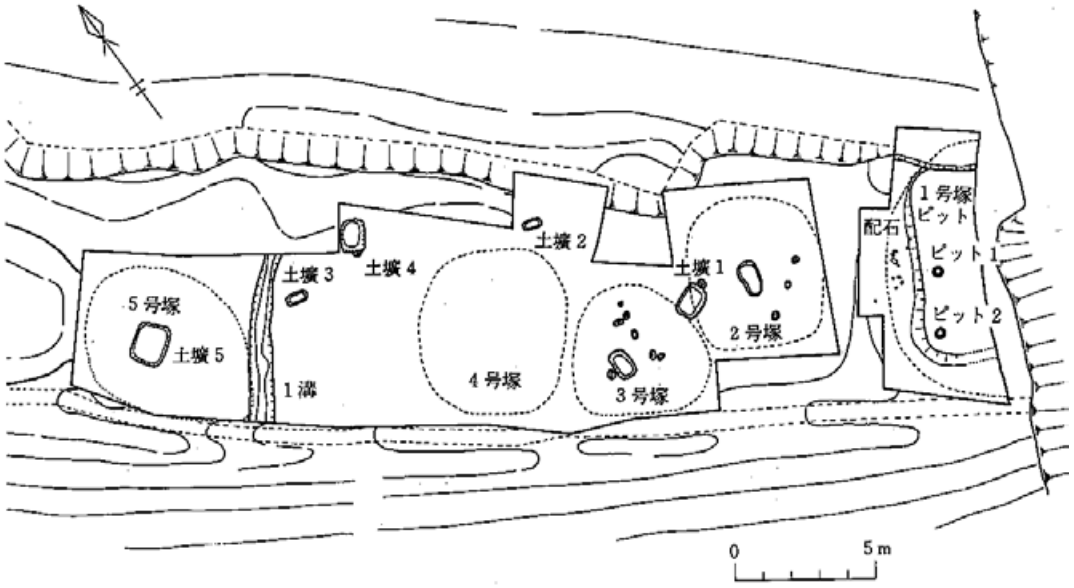
(形態、規模)

塚東側半分が道路により破壊されているため、全体の形は不明であるが、のこされた西半分の形により、平面形はややゆがんだ隅丸の方形と思われる。南北長は約 9.1mである。高さは約95㎝ある。

旧表土や地山の一部を削り平坦に整地し、基底面を作り出している。基底面は中央部を高くのこして周囲を深くし、その上に盛土を行っている。10層の盛土が認められた。盛土Ⅰ層は暗褐色土層である。厚さ約10～15㎝でほぼ水平に盛られている。ローム、明褐色土をブロック状


61.0
61.2
61.4
STA
396+40
61.74
62.0
61.88
61.8
61.77
62.71
1号
57.34
62.0
61.93
62.0
62.71
2号
62.0
62.18
5号
62.41
62.39
62.0
4号
62.0
3号
62.23
62.06
62.0
62.0
62.0
62.0
61.38
61.31
61.65
61.6
61.6
61.4
61.2
61.0
0
5m

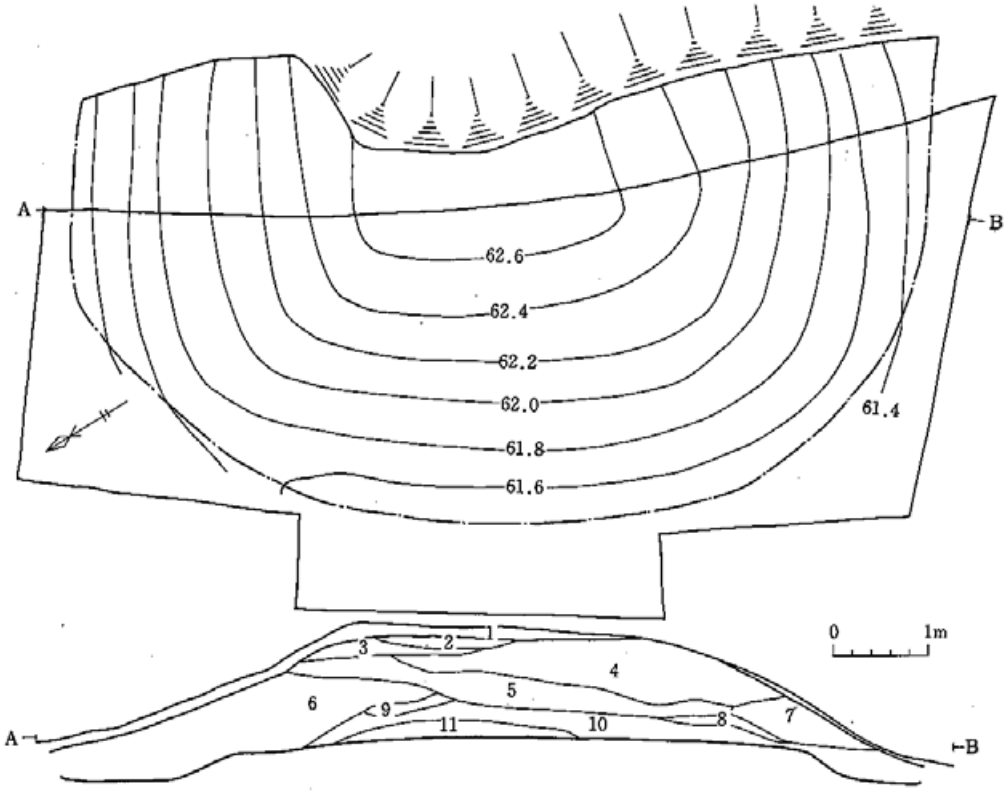
第2図　塚測量図



第3図　遺構配置図

に含んでいる。盛土Ⅱ層は黒褐色土層である。厚さ約6～18㎝でほぼ水平に盛られている。ロームを班点状に含んでいる。盛土Ⅲ層は褐色土層である。厚さは約20～70㎝でほぼ水平に盛られている。ローム、黒褐色をまばらに含んでいる。盛土Ⅳ層は褐色土層である。厚さ約15～30㎝である。盛土Ⅴ層は暗赤褐色土層である。厚さは約20～80㎝あり、塚の北側周縁部に盛られた土である。Ⅵ層は暗褐色土である。厚さは約20～40㎝あり、塚の南側周縁部に盛られた土である。Ⅶ層は暗褐色土である。厚さは約10㎝である。塚の一部分にみられる。Ⅷ層は暗褐色土層である。厚さ約10～13㎝である。塚の一部分に中央部から北側に傾斜して盛られている。Ⅸ層は黒褐色土層である。厚さ約10～30㎝で、北側と中央部分の一部をのぞく、塚基底面直上にほぼ水平に盛られている。ロームをわずかに混入する。Ⅹ層は暗褐色土層である。厚さは約10～20㎝であり、塚中央部分の基底面上にほぼ水平に盛られている。全体的にみると盛土は厚くほぼ水平に盛られており、頂部はやや平坦になっている。

（塚に伴うと考えられる施設）　盛土下の基底面でピット2個、配石が検出されている。ピットは南西周縁部で検出されたもので、大きさはピット1は径約30㎝、深さ約10㎝、ピット2は径約35㎝、深さ約15㎝でどちらもほぼ円形である。配石は塚中央西側盛土下で検出されたもので、10～25㎝程度の自然石からなり、2×1mの範囲にまとまっている。これらはいずれも塚の周縁部から検出されたものであり、中央部からは内部主体と考えられるような施設は検出されなかった。



層の名称	層No	土　色	土 性	混入物、その他	層の名称	層No	土　色	土 性	混入物、その他
表　土	1		シルト		盛土VI層	7	暗 褐 色(10YR¾)	シルト	しまっている
盛土I層	2	暗 褐 色(10YR¾)	シルト	明褐色土をブロック状に含む	盛土VII層	8	暗 褐 色(10YR¾)	シルト	黒色土を斑点状に含む
盛土II層	3	黒 褐 色(10YR¾)	シルト	ロームを斑点状に含む	盛土VIII層	9	暗 褐 色(10YR¾)	シルト	しまりなく粘性がない
盛土III層	4	褐　色(7.5YR¼)	シルト	黒褐色土をごくまばらに含む	盛土IX層	10	黒 褐 色(10YR¾)	シルト	ロームをわずかに含む
盛土IV層	5	褐　色(7.5YR¼)	シルト	暗褐色土、黒褐色土を斑点状に含む	盛土X層	11	暗 褐 色(10YR¾)	シルト	しまっている
盛土V層	6	暗赤褐色(5YR¾)	シルト	粘性なく、軽くてばさばさしている					

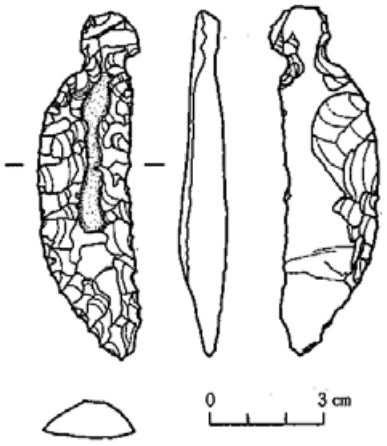
第4図　第 1 号 塚

	形　態	長さ(cm)	深さ(cm)
ピット1	円　形	30	10
ピット2	円　形	35	15

（出土遺物）　遺物は盛土中から石匙、須恵器、赤焼土器などが発見されている。なお、塚に直接関係するような遺物の発見はなかった。

石器（第５図）

石匙　盛土Ⅴ層より完成品が１点出土している。つまみ部軸線が主要刃部に対してほぼ平行な縦型石匙である。



第５図　第１号塚出土遺物

須恵器

坏　盛土Ⅷ層より１片出土している。口縁部の小破片である。内外面ともロクロ調整されている。

赤焼土器

坏　盛土Ⅴ層より１片、盛土Ⅸ層より２片出土している。小破片のため、いずれも全体の器形は不明である。すべて内外面ともロクロ調整であり、底部はすべて糸切りで再調整はほどこされていない。色調は橙色、にぶい橙色を呈する。なお、ヘラミガキ、黒色処理は施されていない。

第２号塚

（重複関係）　盛土が土壙１をおおっている。

（形態、規模）　平面形はややゆがんだ隅丸の方形である。長軸の長さ約5.4m、短軸約5mで、長軸の方向は南西－北東である。高さは55㎝ある。

（盛土）　北側では旧表土と地山の一部を削り取り、南側では旧表土をある程度のこし、平坦面をつくり出し基底部としている。これは、塚周辺の旧地形が南に傾斜しているための処置と考えられる。この基底部上には、２層の盛土が認められる。盛土Ⅱ層は黒褐色土層である。厚さ約10～20㎝で、塚の中央部にほぼ水平に盛られている。盛土Ⅱ層は黒褐色土層である。厚さ約10～25㎝で塚の周縁部にみられる。全体的にみると、盛土はほぼ水平に盛られている。

（塚に伴うと考えられる施設）　盛土下の基底面で、土墳１基とピット３個が検出されている。土壙は、塚中央部の基底面にみられた南北約1.3m、東西約1.2mの範囲に分布する炭化物の薄い層の下で、検出されたもので（第７図）、位置、及び検出面から考えて、この土壙が本塚の主要な内部主体と考えられる。

土壙は方形で長軸約1.2m、短軸は東半分を掘りすぎてしまったが、ほぼ70㎝と考えられる。深さは約12㎝である。

土壙内の堆積土は２層認められる。堆積土Ⅰ層は黒色土層である。厚さは約10～18㎝である。長さ約3～5㎜の木炭片を多量に含んでいる。堆積土Ⅱ層も黒色土層である。厚さは約10㎝で

長さ1㎝大の炭化物を多数含んでいる。いずれの層にも多量の炭化物と少量の焼土が含まれている。また、土壙の側壁の一部に焼面がみられた。

また、塚の東南部には基底面から掘りこまれたピットが3個検出された。（ピット1～3）平面形はいずれも楕円形に近い。ピット1は約33×27㎝深さ約15㎝、ピット2は約30×20㎝深さ約20㎝、ピット3は約30×25㎝深さ約20㎝である。

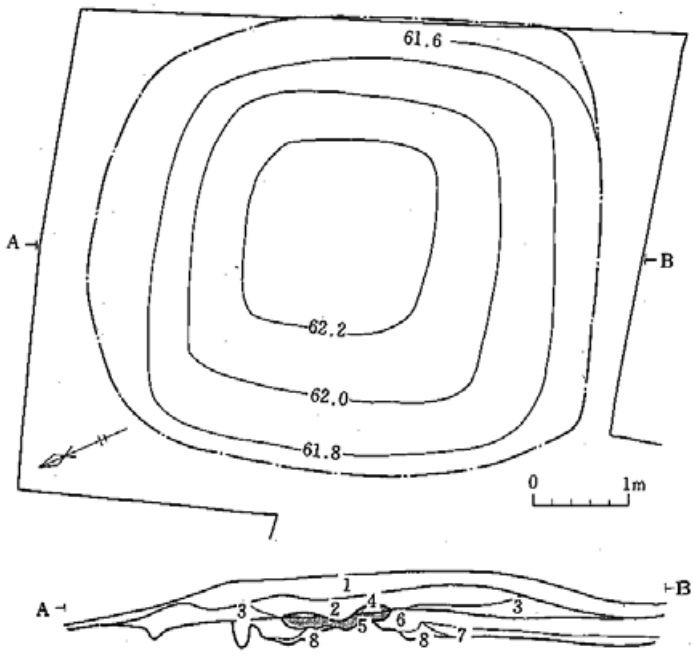
	形態	長さ(cm)	深さ(cm)
ピット1	楕円形	33×27	20
ピット2	楕円形	30×20	20
ピット3	楕円形	30×25	20

（出土遺物）

塚の内部主体と思われる土壙の堆積土第Ⅱ層からは、木炭や焼土にまじって4枚の古銭がまとまって出土した。また、盛土中からは赤焼土器が数片出土している。

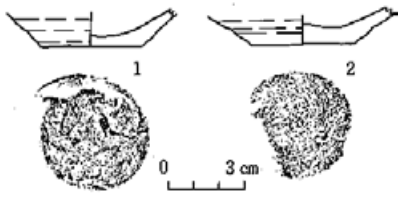
赤焼土器（第8図1、2）

坏　盛土Ⅱ層より3片出土している。小破片であり、全体の器形をうかがえるものはない。すべて内外面ともロクロ調整であり、底部はすべて糸切りで再調整は施されていない。底部の切り離しが粗雑で、底部で粘土がはみ出しているものもある（第8図1）。底径は1、2とも約4㎝である。色調は橙色、にぶい橙色を呈する。



層の名称	層No	土色	土性	混入物、その他
表土	1		シルト	
盛土Ⅰ層	2	暗褐色(10YR3/)	シルト	黒褐色土を斑点状に含む
盛土Ⅱ層	3	黒褐色(10YR3/)	シルト	しまり、粘性ほとんどない
土壙堆積土Ⅰ層	4	黒色(7.5YR3/)		3～5㎝炭化物を含む
土壙堆積土Ⅱ層	5	黒色(7.5YR3/)		大きな炭化物を含む
旧表土	6	極暗褐色(7.5YR3/)	シルト	暗褐色土を斑点状に含む
断移層	7	褐色(7.5YR4/)	シルト	黒褐色土がローム中に混入している
断移層	8		シルト	暗褐色土をまだらに含む

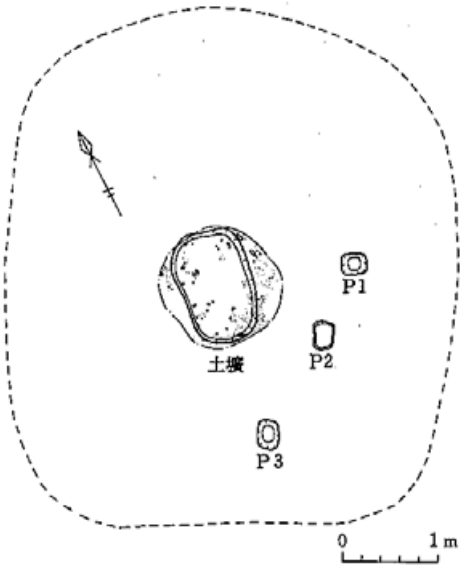
第6図　第2号塚



第8図　第２号塚出土遺物

古銭

土壙堆積土第Ⅱ層から４枚発見された。内わけは洪武通宝と永楽通宝が２枚ずつである。いずれも変形しており、強い火熱を受けた形跡が認められる。



第7図　第２号塚、土壙と炭化物層

第３号塚

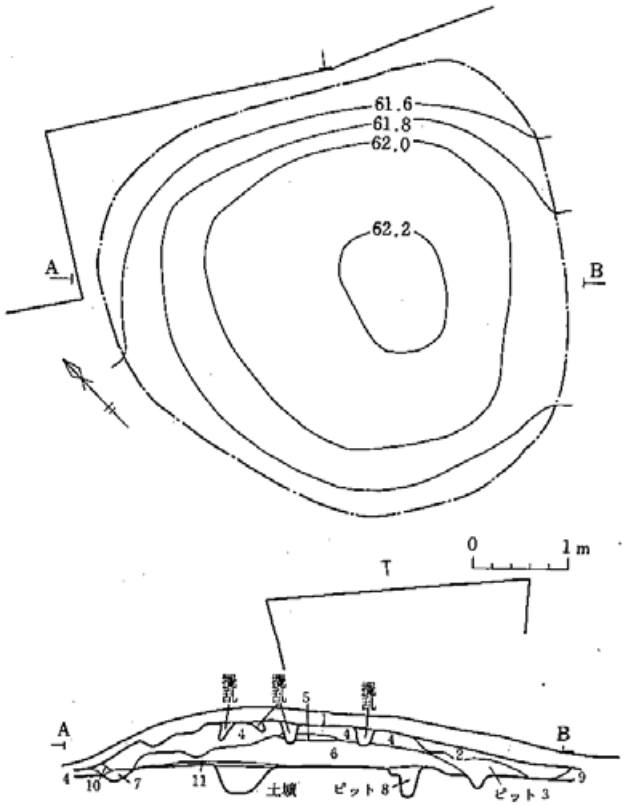
（重複関係）　盛土が土壙１をおおっている。

（形態、規模）　平面形はややゆがみの著しい方形である。長軸の長さ約 4.9m、短軸約 4.6 mで長軸の方向は南西－北東である。高さは約60 cmある。

（盛土）　まず旧表土や地山の一部を削り平坦に整地し、基底面を作り出している。底面上基には７層の盛土が認められた。盛土Ⅰ層は暗褐色土層である。厚さは約８～15 cmである。南東側の周縁部に盛られた土で、塚の中央から、南側に傾斜して盛られている。盛土Ⅱ層は黒褐色土層である。厚さは約５～20 cmである。これも塚の中央から南側に傾斜して盛られている。盛土Ⅲ層は褐色土層である。厚さは約 15～25 cmである。塚ほぼ全体に盛られている。盛土Ⅳ層は黒褐色土層である。厚さは約８cmで、塚中央部に一部分だけほぼ水平に盛られている。盛土Ⅴ層は暗褐色土層である。厚さは約 10～25 cmで、塚中央部に盛られている。盛土Ⅵ層は黒褐色土層である。厚さは約 12 cmで、南側周縁部の一部に盛られている。盛土Ⅶ層は褐色土層である。厚さ約 10 cm、北側周縁部の一部に盛られている。全体的にみると各盛土とも円弧状にゆるやかな傾斜を持って盛られている。

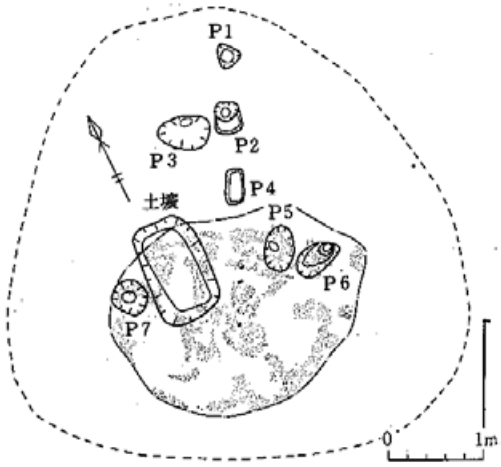
（塚に伴うと考えられる施設）

盛土下の基底面で土壙１基とピットが７個検出された。土壙は塚中央部のやや西寄りの基底にみられた。東西約 2.7m×南北約 2.1mの範囲に分布する小量の焼土を含む炭火物の薄い層の下で検出されたもので（第 10 図）、位置及び検出面から考えてこの土壙が本塚の主要な内部主体と考えられる。土壙は方形で長軸1m、短軸約68 cm深さ約30 cmである。土壙堆積土には木炭が



層の名称	層No	土色	土性	混入物、その他
表土	1		シルト	
盛土I層	2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	粘性なく、しまっていない
盛土II層	3	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	粘性なく、しまっている
盛土III層	4	褐色(7.5YR4/4)	シルト	粘性なく、しまっている
盛土IV層	5	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	粘性ややあり、しまっていない
盛土V層	6	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	粘性ややあり、しまっている、炭化物を含む
漸移層土	7	褐色(7.5YR4/4)	シルト	粘性あり、しまっていない
ピット埋土	8	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	粘性あり、しまっていない
盛土VI層	9	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	粘性あり、しまっていない
盛土VII層	10	褐色(7.5YR4/4)	シルト	粘性あり、しまっている
木炭層	11		シルト	炭化物、焼土を含む

第9図　第3号塚



第10図　第3号塚、土壙と炭化物層

多くみられ、焼土もわずかに含まれていた。

ピットの平面形は円形、楕円形、方形、ゆがんだ方形などであり、大きさは25～55㎝、深さは10～41㎝で、平面形、規模ともに多様である。ピットの埋土中に焼土が含まれているものもある。詳しくは表の通りである。

	形態	長さ(cm)	深さ(cm)	備考
ピット1	ゆがんだ方形	25×23	20	
ピット2	方形	35×28	30	
ピット3	ゆがんだ方形	55×38	39	木炭混入している
ピット4	方形	35×20	10	
ピット5	楕円形	45×30	35	焼土が少しみられる
ピット6	楕円形	50×30	28	木炭混入している
ピット7	楕円形	35	26	木炭混入している

（出土遺物）

盛土中より赤焼土器が数片出土している。なお、塚に直接関係するような遺物の発見はなかった。

赤焼土器

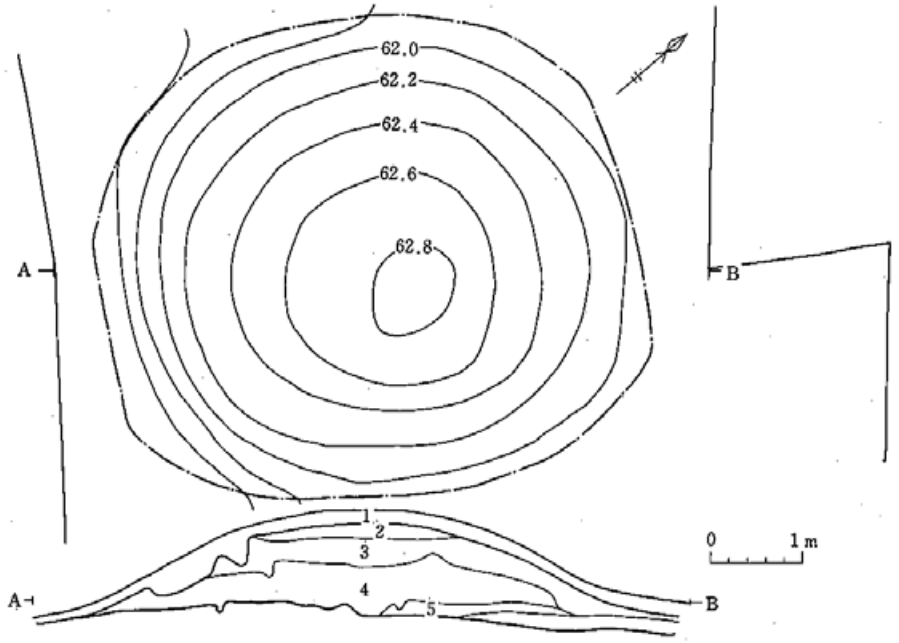
坏　盛土中より２片出土している。小破片であり、全体の器形をうかがえるものはない。内外面ともロクロ調整であり、底部は糸切りで再調整は施されていない。色調は橙色、にぶい橙色を呈する。

第４号塚

（形態、規模）　平面形は隅丸方形である。長軸約5.8m、短軸約5.2mで、長軸の方向は南西－北東である。高さは約90㎝ある。

（盛土）　旧表土や地山の一部を削り平坦に整地し、基底面を作り出している。基底面上には5層の盛土が認められる。

盛土Ⅰ層は褐色土層である。厚さ約10～15㎝で、塚中央部にほぼ水平に盛られている。盛土Ⅱ層は暗褐色土層である。厚さは約20～30㎝で、塚全体に盛られている。盛土Ⅲ層は黒褐色土層である。厚さ約40～50㎝、ほぼ塚全体にわたってみられ、ほぼ水平に盛られている。盛土Ⅳ



層の名称	層No	土　色	土 性	記入物、その他	層の名称	層No	土　色	土 性	記入物その他
表　土	1		シルト		盛土Ⅲ層	4	黒 褐 色(10YR3/)	シルト	炭化物を含む
盛土Ⅰ層	2	褐　色(7.5YR4/)	シルト	粘性はない、しまっている	盛土Ⅳ層	5	暗赤褐色(5YR3/)	シルト	ロームとの混に木炭を含む
盛土Ⅱ層	3	暗 褐 色(7.5YR3/)	シルト	黒褐色、褐色をブロック状に含む	盛土Ⅴ層	6	黒　色(7.5YR1/)	シルト	暗褐色をブロック状に含む

第11図第４号塚

層は暗赤褐色土層である。厚さは約 10～15 ㎝で、塚の一部にほぼ水平に盛られている。盛土Ⅴ層は黒色土層である。厚さ約 15 ㎝で塚北側基底面上面にほぼ水平に盛られている。層全体的にみると盛土は下部で厚く上部で薄く、ほぼ水平に盛られている。

（塚に伴うと考えられる施設）　検出されなかった。

（出土遺物）

遺物は盛土中から赤焼土器が発見されている。なお塚に面接関係するような遺物の発見はなかった。

赤焼土器

坏　盛土中より 2 片出土している。小破片であり、全体の器形をうかがえるものはない。内外面ともロクロ調整であり、底部は糸切りで再調整は施されていない。色調は橙色、にぶい橙色を呈する。

第５号塚

（重複関係）　第 5 号塚盛土上面から土壙 5 が掘りこまれている。

（形態、規模）　全体的に円に近い形であるが、著しくゆがんでおり、南側はやや角ばっている。長軸の長さ約 5.4m、短軸約 5m である。高さは約 60 ㎝ある。

（盛土）　旧表土や地山の一部を削り平坦に整地し、基底面を作り出している。基底面上には 4 層の盛土が認められた。盛土Ⅰ層は褐色土層である。厚さ約 5～15 ㎝で、塚全体に盛られている。盛土Ⅰ層は黒褐色土層である。厚さ約 10～15 ㎝で、塚全体に盛られている。盛土Ⅲ層は褐色土層である。厚さ約 10～15 ㎝で、水平に盛られている。盛土Ⅳ層は厚さ約 8～15 ㎝で、ほぼ水平に盛られている。盛土はほぼ同じ厚さで水平に盛られている。

（塚に伴うと考えられる施設）　検出されなかった。

（出土遺物）　遺物は盛土中から、石器、須恵器、赤焼土器が発見されている。なお、塚に直接関係するような遺物の発見はなかった。

石器（第 13 図 4）

削器　表土より 1 点出土している。素材の中央部に一部調整剥離が加えられている。

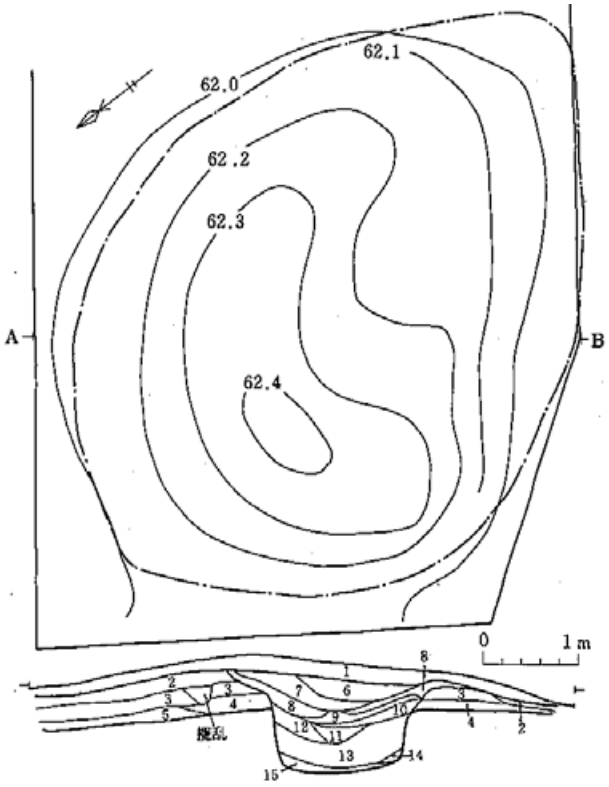
須恵器

甕　表土より 1 片、盛土Ⅰ層より 1 片出土している。いずれも胴部破片である。内外面ともロクロ調整である。

赤焼土器

坏　盛土中より 79 片出土している。小破片であり、全体の器形をうかがえるものはない。内外面ともロクロ調整であり、底部は糸切りで再調整は施されていない。色調は橙色、にぶい橙色

を呈する。



層の名称	層No	土　色	土 性	混入物、その他
表　土	1		シルト	
盛土 I 層	2	褐　色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物をわずかに含む
盛土 II 層	3	黒褐色(10Y R3/2)	シルト	炭化物を含む
盛土 III 層	4	褐　色(7.5YR4/4)	シルト	粘性があり、しまっている
盛土 IV 層	5		シルト	黒褐色土がブロック状にまじる
土壙堆積土	6	暗褐色(10Y R3/4)	シルト	炭化物がみられる
〃	7	黒褐色(10Y R3/4)	シルト	ローム を斑点状に含む 木炭を含む
〃	8	暗褐色(10Y R3/4)	シルト	ローム をブロック状に含む
〃	9	黒褐色(10Y R3/4)	シルト	炭化物をわずかに含む
〃	10	暗褐色(10Y R3/4)	シルト	ローム をブロック状に含む
〃	11	暗褐色(10Y R3/4)	シルト	ローム をわずかに含む
〃	12	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	暗褐色土をわずかに含む
〃	13	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	暗褐色土をブロック状に含む
〃	14	暗褐色(10Y R3/4)	シルト	ローム をわずかに含む
〃	15	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	粘性がある

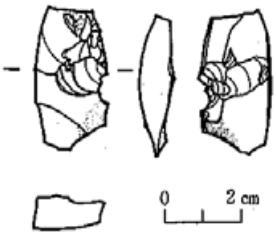
第12図　第５号塚と土壙５

2. 土壙

５基出土している。以下各土壙について検出位置、平面形、規模、深さ、底面の状況、出土遺物について記す。

土壙１

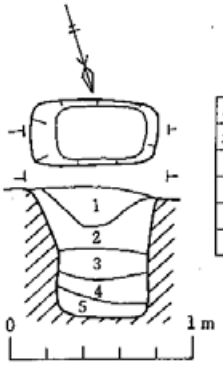
第２号塚と第３号塚との間で、両塚の盛土下より検出された。平面形は方形である。規模は118 cm×82 cmで長軸の方向はほぼ東西で、深さは30～40 cmである。底面はほぼ平坦である。土壙の北東辺に外接して約35×25 cm、深さ約32 cmのほぼ円形のピットを持つ。遺物は出土していない。



第13図　第５号塚出土遺物

土壙２

第３号塚からやや離れた北側の地区で、旧表土上面より検出された。平面形は方形であ



層の名称	層No	土　色	土性	混入物、その他
土壙堆積土	1	暗 褐 色(7.5YR3/3)	シルト	かたくしまっている粘性はない
〃	2	暗暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	ローム をブロック状に含む
〃	3	黒 褐 色(7.5YR3/2)	シルト	しまっていない粘性はある
〃	4	黒 褐 色(7.5YR3/2)	シルト	ローム を斑状に含む
〃	5	褐　色(10Y R4/4)	シルト	しまっていない粘性はある

第14図　塚を伴わない土壙２

る。規模は約 70×35 ㎝で、長軸の方向は南東－北西である。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

土壙 3

第 4 号塚と第 5 号塚の間の地山面で検出された。平面形は方形である。規模は約 80×40 ㎝で長軸の方向は南東－北西である。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

土壙 4

第 4 号塚北側の地区の地山面で検出された。平面形は方形である。規模は約 120×85 ㎝で、長軸の方向は北東－南西で、深さは約 25 ㎝で、底面はほぼ平坦である。土壙の南西辺に外接して約 25×20 ㎝、深さ約 32 ㎝のほぼ円形のピットを持っている。

土壙 5

第 5 号塚中央部盛土上面より検出された。平面形は方形である。規模は約 150×120 ㎝で、長軸の方向は南西－北東である。深さは約 1ｍで、底面はほぼ平坦である。土壙底面近くの堆積土中より磁器片、古銭、人骨片が出土している。

磁器

土壙堆積土中より 1 片出土している。口縁部の小破片であり器形については不明である。

古銭

土壙堆積土中より 6 枚出土している。

人骨

土壙堆積土中より出土している。ヒトの歯の残片であり、非常にもろく、わずかに原形をとどめているにすぎない。

3. 溝

第 4 号塚と第 5 号塚の間の地山面で検出された。尾根を横断して南北に延びている。幅約 1ｍ、深さ約 30 ㎝である。両壁はゆるやかに傾斜し、底面はほぼ平坦である。溝堆積土中より赤焼土器 25 片出土している。

4. 表土出土の遺物

赤焼土器

坏　第 1 号塚表土より 14 片、第 2 号塚表土より 2 片、第 5 号塚表土より 17 片、塚の周辺の表土面ともロクロ調整され、底部はすべて糸切りで、再調整は施されていない。色調は橙色、にぶい橙色を呈する。

須恵器

第1号塚表土中より1片出土している。口縁部の小破片である。内外面ともロクロ調整されている。

Ⅳ. 考 察

今回の調査で検出した遺構には、塚土壙、ピット、溝などがある。以下塚、土壙それぞれについて、若干の考察を試みる。

1. 塚

塚は5基確認され、ほぼ東西に一列に並んで位置している。塚と塚の間隔は第1号塚から第4号塚までの4基は近接しており、第5号塚は第4号塚と約6m離れて位置している。

平面形はゆがみの著しいものもあるが、ほぼ方形を基調としている。現状規模は約5～9mである。長軸の方向は南西－北東のものが大部分である。高さは20～120㎝であるが、20～60㎝程度の低いものが多い。

塚の構築方法は旧表土、地山の一部を削り平坦に整地し基底面を作り出し、その上に盛土をしているもの（第1、3、4、5号塚）が大部分であるが、第2号塚だけは一部旧表土をのこし、その上に盛土をしている。

盛土は2～10層認められた。本遺跡の塚の盛土にはすべて黒色土、地山の黄褐色土、および両者が混りあった土を用いており、いずれも人為的に盛られたものである。塚にはA：ほぼ中央部に基底面より掘りこまれた土壙を内部主体とし、周縁部にピットを持つもの（2、3号塚）と、B：塚に直接関係する施設をまったくもたないもの（第4、5号塚）とがある。Aグループの場合、土壙の平面形はいずれも方形をなし、長軸1～1.2mで2基ともほぼ同じ大きさである。深さは12～30㎝と浅い。いずれも基底面上面にみられた炭化物層の下より発見されたものである。出土した古銭には強い火熱を受けた形跡が認められた。したがって、塚構築前にこの土壙内で大規模な焚火が行なわれた可能性が極めて強い。遺物はAグループの2号塚の土壙内から、古銭が出土しているのみである。

2. 土壙

土壙は規模の点から3グループに分類され、その特徴は以下の通りである。

ａ．規模が長軸1.5mほどの大型なもの（土壙5）

平面形は方形である。長軸の方向は南西－北東で、深さは1mである。堆積土中より磁器片

古銭、人骨片が出土している。

ｂ．規模が長軸1.2mほどの中型で長軸方向にピットを1個持つもの。（土壙1、4）

平面形は方形である。長軸の方向はほぼ東西（土壙 1）と北東－南西（土壙 4）である。遺物は出土していない。

ｃ．規模が長軸0.8mほどの小型のもの（土壙2、3）

平面形は方形である。長軸の方向はいずれも南東－北西である。遺物は出土していない。

次に塚や土壙の性格について考えてみたい。

塚は内部主体の有無によりＡ・Ｂ両グループに分けられた。まず、Ａグループからみてゆきたい。2 号塚から古銭が 4 枚出土している。これは中近世の墓に一般的にみられる六道銭の一部と考えられるので、本土壙が墓であることはまず間違いないと考えられる。人骨などは発見されなかったが焚火のあとや古銭のゆがみなどからみて、埋葬にあたりこの場で火葬された可能性もある。その後、土壙上に塚を築いたものであろう。3 号塚については遺物は全く出土していないが、土壙や塚の規模、形態、検出状況などは2 号塚との共通性がきわめて強いことから、これも同じような墓と考えてよいかと思われる。Ｂグループは、内部主体が不明のものであるが、塚の形態はＡグループのものと極めてよく類似していることから、これも本来はＡグループと同じ意図で構築された塚とみることも可能である。

土壙は規模によりＡ～Ｃの各グループに分けられた。このうち遺物が出土したのはＡグループの土壙5 のみである。これは六道銭とみられる 6 枚の古銭が出土しているので、土壙墓と考えてさしつかえないものと思われる。土壙Ｂ、Ｃ両グループについては、遺物から性格を推定することはできない。ところで、これらの土壙は大和町日光山遺跡で発見され近世の土壙墓とされているものに規模、形態がきわめて良く類似している。したがって、Ｂ、Ｃグループの土壙も一応、土壙墓とみておいた方がよいのではないかと思われる。

次に各遺構相互の関係について考えてみたい。遺構の重複関係より次の変遷が考えられる。

土壙ｂ（土壙1、4）→塚Ａグループ（第2、3 号塚）

塚Ｂグループ（第4、5 号塚）→土壙ａ（土壙5）

ところで、前述したように塚ａと塚ｂは塚の形状規模などから類似した性格の遺構と考えられるので、両者にあまり大きな時間的な差がないものと想定することも可能かと思われる。

また塚Ａ、土壙ａからは同じような六道銭が出土している。したがってこれらの塚、土壙群は、比較的短時間に連続して構築された可能性が強い。

さて、本遺跡の年代であるが、第 2 号塚と土壙 5 からは古銭がでている。この古銭は永楽通宝と洪武通宝である。永楽通宝の初鋳年代は1408 年、洪武通宝は1368 年であるから、これらの

塚および土壙墓は中世末以降に構築されたものと考えられる。一方、一般的にみて、近世中頃以降の墳墓では六道銭に寛永通宝が含まれている場合が多いが、本遺跡からは、寛永通宝は 1 点も出土していない。以上のことから本遺跡の年代を大づかみに把えた場合、中世末から近世初頭の年代が考えられよう。なお石匙、須恵器、赤焼土器などは、塚を構築する際に塚にまぎれこんだものであろう。

遺構出土遺物一覧表

遺構＼遺物		石器	須恵器	赤焼土器	磁器	古銭	人骨片
第 1 号塚	盛土	1	1	1			
	ピット						
第 2 号塚	盛土			3			
	土壙					4	
	ピット						
第 3 号塚	盛土			2			
	土壙						
	ピット						
第 4 号塚				2			
第 5 号塚		1	2	79			
土壙 1							
土壙 2							
土壙 3							
土壙 4							
土壙 5					1	6	1
溝				25			
計		2	3	112	1	10	1

V. ま と め

今回の調査で得られた成果を要約すると次の様になる

1. 本遺跡は築館丘陵から分岐した一小丘陵の尾根上に立地している。
2. 本遺跡には5基の塚が存在する。
3. いずれの塚も基底面は表土や地山面を削り、平坦に整地してある。
4. 塚には内部施設を有するものがあり、第1号塚よりピットと配石が、第2、3号塚より土壙とピットが検出されている。なお、第2、3号塚より検出された土壙は位置、検出面などから、これらの塚の主要な内部主体と考えられる。また、盛土上面、盛土下、地山面よりは土壙 5基と溝1が検出されている。

   出土遺物には石器、須恵器、赤焼土器、磁器、古銭がある。古銭は出土状態から六通銭であると考えられる。石器、須恵器、赤焼土器などは塚を構築する際にまぎれこんだものと考えられる。
5. 塚や土壙の性格は墳墓または土壙墓である。なお、2 号塚土壙は埋葬にあたり、この場で火葬された可能性がある。本遺跡の年代は中世末近世初頭と考えられる。

〈引用・参考文献〉

川崎　利夫（1976）：「山形県における古代、中世の火葬基について」『東北考古学の諸問題』

高清水町史編纂委（1976）：「考古学からみた高清水」『高清水町史』

宮城県教育委員会（1973）：「権現山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第31集　宮城県教育委員会

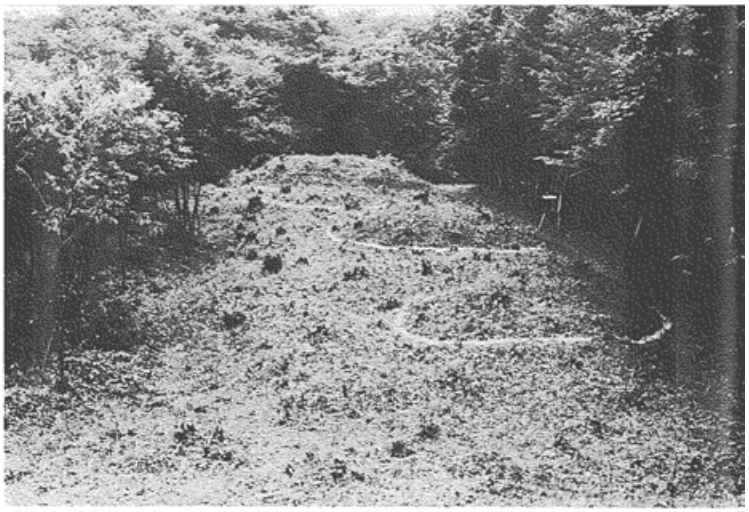
宮城県教育委員会（1973）：「日光山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第31集　宮城県教育委員会

宮城県教育委員会（1977）：「横倉大久保遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第48集　宮城県教育委員会

宮城県教育委員会（1973）：「宮城町想海塚発掘報告」『宮城町文化財調査報告書』第1集　宮城町教育委員会

写　真　図　版

発掘前の塚の状況
（西側から）

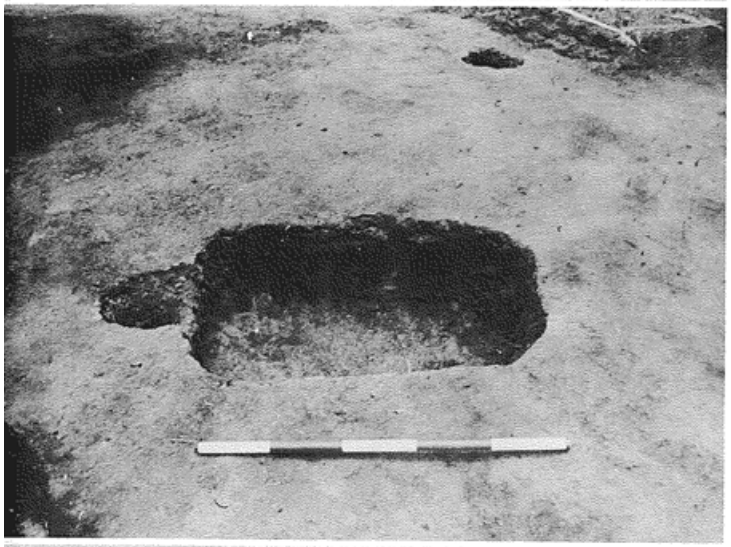


同上発掘後の状況
（西側から）

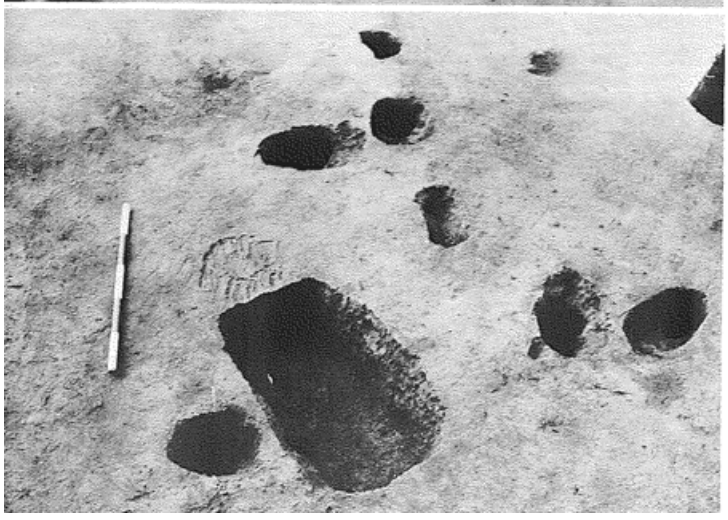
第４号塚南北断面
（南側から）

図版１

第５号塚土壙断面
（西側から）



塚を伴わない土壙１



第３号塚下で検出された
土壙およびピット

図版２

(7) 木（き）　戸（ど）　遺　跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 425
1．遺跡の立地 …… 425
2．周辺の遺跡 …… 425
Ⅱ．調査の方法と経過 …… 425
Ⅲ．発見された遺構と出土遺物 …… 429
1．竪穴住居跡 …… 429
2．竪穴遺構 …… 440
3．焼土遺構 …… 445
4．土壙 …… 445
5．表土の出土遺物 …… 446
Ⅳ．遺構、遺物に関する考察 …… 450
1．出土遺物の考察 …… 450
2．遺構の考察 …… 451
Ⅴ．ま　と　め …… 452
参考文献 …… 452

調 査 要 項

遺　跡　名：木戸遺跡（宮城県遺跡地名表：木戸平沢遺跡）

遺 跡 記 号：ＥＦ（宮城県遺跡地名表登載番号：41034）

遺跡所在地：宮城県栗原郡築館町萩沢字木戸

調査対象面積：約 12,000 ㎡（発掘面積も同じ）

調 査 期 間：昭和 51 年 10 月 4 日～10 月 8 日、11 月 8 日～12 月 11 日、昭和 52 年 4 月 18 日～

調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課

後藤勝彦・小井川和夫・後藤彪・高橋守克・千葉宗久・阿部恵・中島直・手塚均

調査協力者：金野正（宮城県築館女子高等学校教諭）

Ⅰ．遺跡の立地と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地

木戸遺跡は、栗原郡築館町萩沢木戸に所在し、築館町の中心部より南東方直線距離にして約2㎞の地点に位置している。

遺跡が所在している築館町は、宮城県北部に位置している。県北部の地形をみると、西側に奥羽山地帯、東側には北上山地帯が南北に長く延びており、その間に奥羽山麓と中部低地帯が拡がっている。中部低地帯には北上川や鳴瀬川とその支流が流れ、流域に段丘、扇状地、沖積地が形成されている。奥羽山麓は、奥羽山地帯の東翼に位置し、なだらかな丘陵である。そのひとつである築館丘陵は、一迫町柳ノ目付近から東側に向かい次第に低い丘陵になり、末端部は樹枝状になっている。これと接する中部低地帯には、伊豆沼、内沼等の湖沼地帯が発達している。

遺跡は、この樹枝状に分岐した丘陵上（標高約30m）に立地している。この丘陵は萩沢川に合流する小河川による小谷沢によって南、北に分断され、独立丘陵のような様相を呈している。

2. 周辺の遺跡

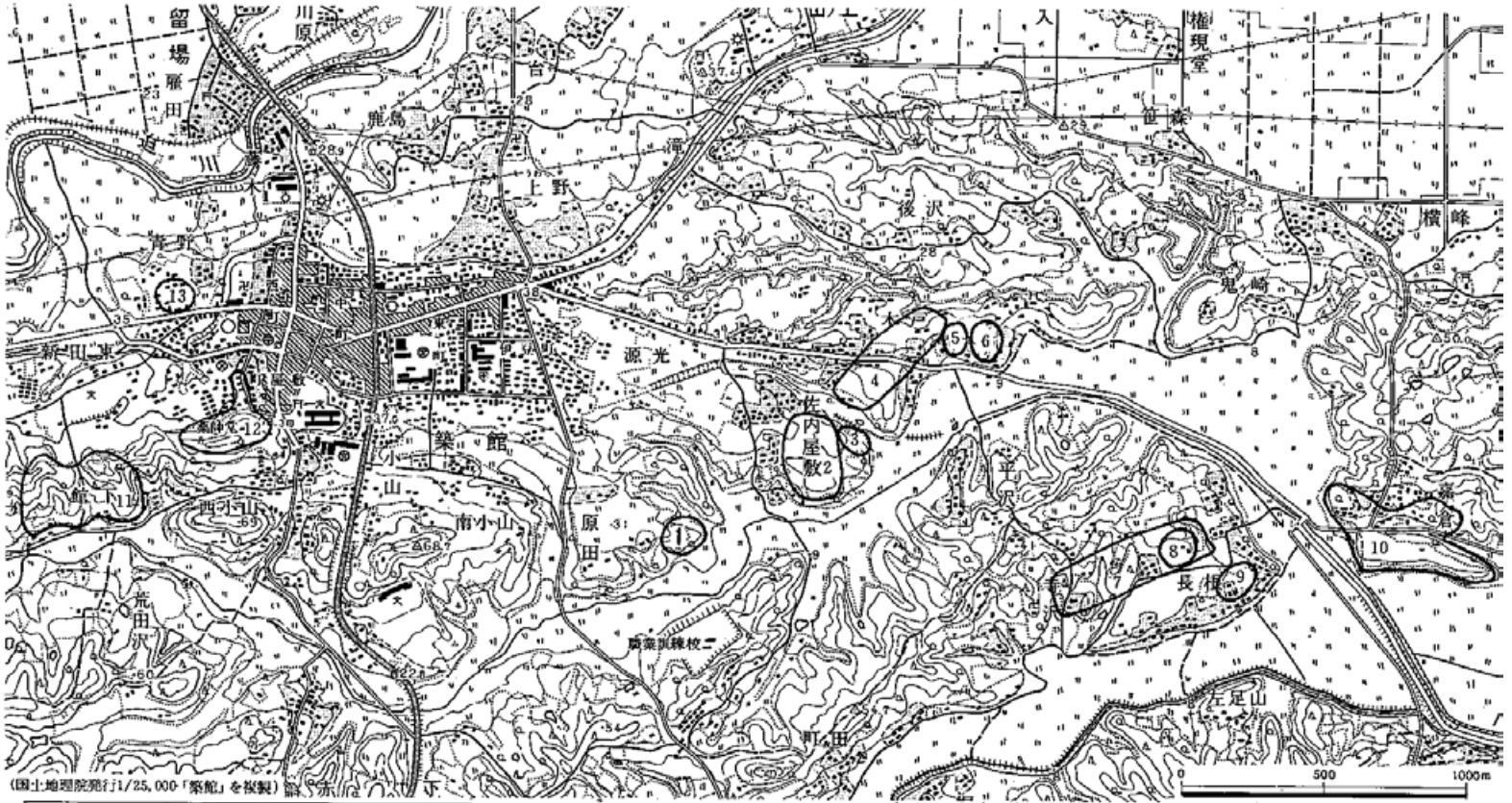
本遺跡周辺の丘陵上、沖積低地に接する丘陵斜面上に多くの遺跡が立地している。本遺跡の南側には縄文時代、奈良、平安時代の集落跡である佐内屋敷遺跡があり、東側に接して縄文時代の竪穴住居跡9軒検出された鰻沢遺跡（古川工高：1974、宮教委：1975）がある。さらに東側には萩沢城跡が丘陵の先端部に立地している。南西方には、谷をはさんで原田遺跡（縄文中期、奈良・平安）がある。また、伊豆沼、内沼の湖沼地帯に面した丘陵の斜面には、嘉倉貝塚、横須賀貝塚などのような淡水性の貝塚が立地している。

Ⅱ．調査の方法と経過

東北自動車道が遺跡を南北に縦断し、調査範囲が広いため、調査は3次にわたり実施された。以下、各次の調査について記していく。

第1次調査：県道築館一迫線の付けかえ工事に伴う調査で、迂回道路部分を対象とし、昭和51年10月4日から調査を開始した。表土をはぎ、遺構確認をした結果、地山面で住居跡2軒（第1、3号住居跡）が確認された。その後、1軒の住居跡の精査をし実測図（1/20）を作成、写真撮影して10月8日に調査を終了した。

第2次調査：遺跡北端を除く部分の調査である。昭和51年11月8日から調査を開始した。県道の南側の地区設定は縦貫道の中心杭ＳＴA481＋00ＳＴA481＋60を基準線にし、さ

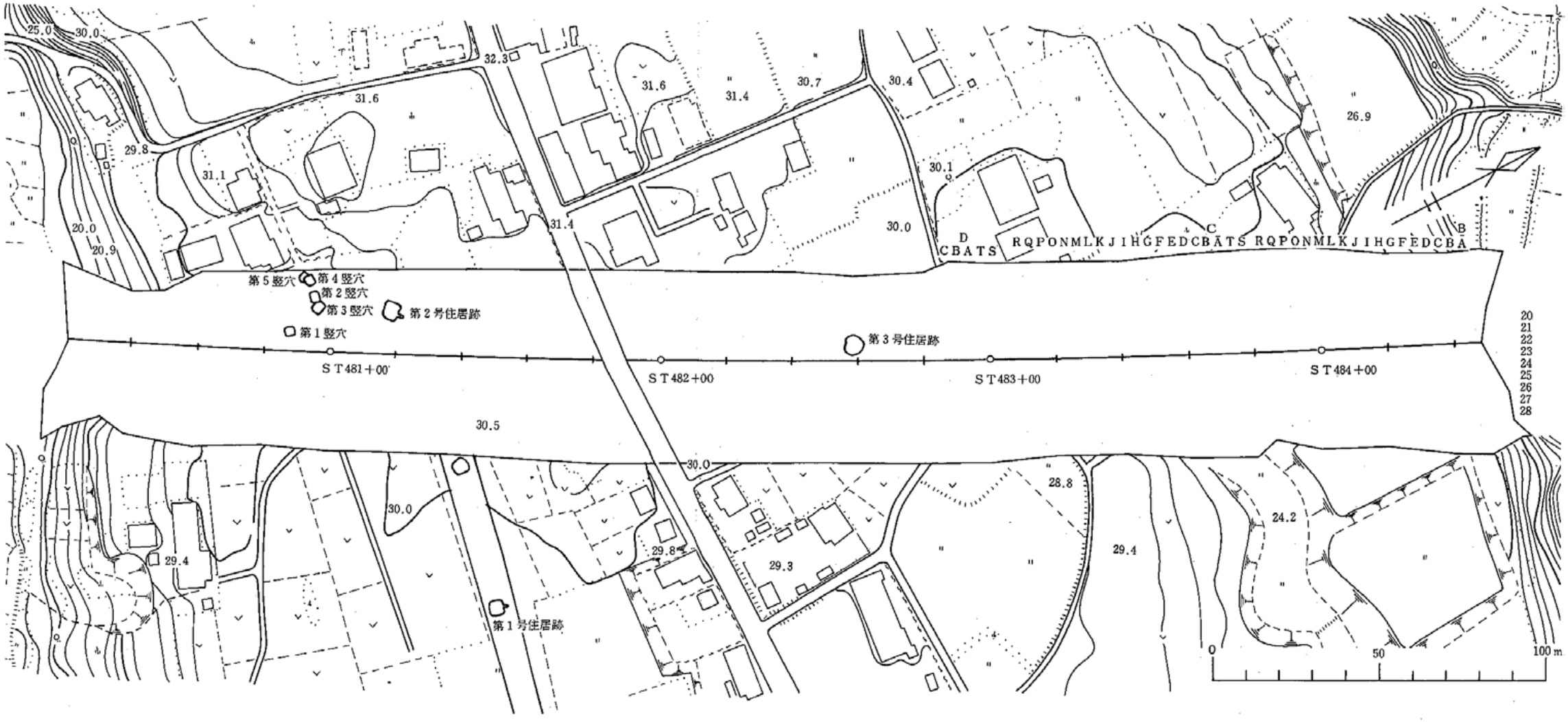


（国土地理院発行1/25,000「築館」を複製）

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	木戸遺跡	台地	集落跡	縄文 奈良・平安(中)	5	鰻沢遺跡	台地	集落跡	縄文（中）
2	新田遺跡	丘陵	包含地	縄文 奈良・平安(早)	6	萩沢城跡	台地	城館	中世・近世
3	木戸平沢遺跡	台地	包含地	縄文	7	照越台遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（中・晩）古墳・奈良・平安
4	原田遺跡	丘陵	集落跡	縄文 奈良・平安(中)					

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
8	舟形遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（晩）	11	築館城跡	丘陵	城館	中世・近世
9	玉萩台遺跡	台地	包含地	縄文(中・後・晩)	12	薬師山北遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳（前）
10	蔵倉貝塚	台地	貝塚	縄文（早・前）弥生（中・後）	13	青野遺跡	台地	包含地	奈良・平安

第1図　木戸遺跡と周辺の遺跡



第2図　周辺の地形と遺構配図

らに東西に直交する基準線を設定し、両基準線を基に 3m方眼のグリットを設定した。遺構確認した結果、表土下、地山面で住居跡８軒、焼焼土遺構１基、土壙２基が確認された。その後、２軒の住居跡の精査をし、その他の遺構は確認だけにとどめた。調査が終了したのは12 月 11 日である。

第３次調査：第２次調査で確認にとどめた住居跡５軒、焼土遺構１基、土壙２基の精査と北端部の調査である。調査は昭和 52 年４月 18 日から開始した。第２次調査で住居跡として確認されたものは、その後の精査で竪穴遺構として取り扱った。

北端部は自動車道の中心杭ＳＴＡ484＋00 とＳＴＡ483＋20 を結ぶ線を基に3m方眼のグリッドを設定し、遺構の確認をした。その結果、表土下、地山面で、掘立柱建物跡を確認したが、現代のものであることが明らかであり、精査は行なわれなかった。他に遺構は確認されなかった。

Ⅲ．発見された遺構と出土遺物

1．竪穴住居跡

第１号住居跡

〔確認、重複〕地山面で確認された。南西隅が近世の墓３基によって切られている。

〔平面形、規模〕平面形は１辺 3.6mの正方形である。床面積は約 13.83 ㎡である。

〔堆積土〕６層認められる。

第Ⅰ層：にぶい黄褐色（10ＹＲ$^{5}/_{4}$）砂、住居中央部に堆積している。

第Ⅱ層：極暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{3}$）シルト、住居ほぼ全域に堆積している。

第Ⅲ層：黒褐色（10ＹＲ$^{2}/_{3}$）シルト、カマド付近に堆積しており、本炭粒、焼土を若干含んでいる。

第Ⅳ層：暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{4}$）シルト、住居南壁から中央部に向かって堆積している。

第Ⅴ層：黒褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{2}$）シルト、住居壁沿いに堆積している。

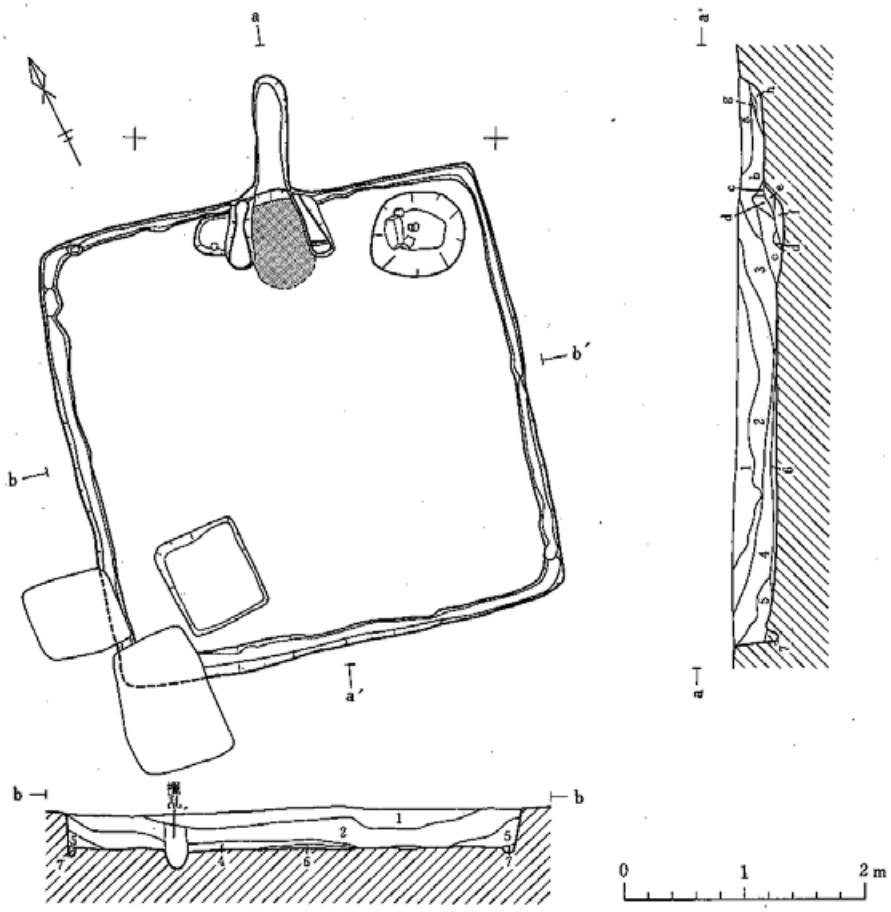
第Ⅵ層：褐色（7.5ＹＲ$^{4}/_{4}$）砂質シルト、住居中央部床面上にうすく堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。南西隅を除いて遺存状態は良好である。ほぼ垂直に立ち上がり、高さは約 24 ㎝～30 ㎝である。

〔床〕地山を床としている。ほぼ平坦で固くなっている。

〔柱穴〕ピットが検出されていない。

〔周溝〕カマドの取り付く北辺中央部を除き、壁沿いに認められる。断面形はU字形を呈し、底面の幅は約 10㎝と一定しており、深さは約５㎝～10 ㎝である。



第１号住居跡堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
I	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	細砂	
I	2	極暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	やや粘性あり
II	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭粒、焼土粒含む
III	4	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	炭化物わずかに含む
IV	5	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物わずかに含む
V	6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物多く含む
VI	7	褐色(7.5YR4/4)	砂質シルト	周溝内堆積土
カマド内堆積土	a	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘土粒、木炭粒混入
〃	b	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	木炭粒、焼土粒多く含む
〃	c	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	木炭粒、焼土粒多く含む
〃	d	明赤褐色(5YR5/6)	粘土	天井崩落土火熱により赤変
〃	e	黒色(10YR2/1)		木炭層
〃	f	赤褐色(5YR5/6)		焼土層
〃	g	黒色(10YR2/1)	シルト	
〃	h	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山粒混入

第3図　第１号住居跡

〔カマド〕北壁中央部のやや東寄りに付設されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部側壁は灰色粘土で構築されている。燃焼部内の最大幅は、奥行きとともに約50㎝である。燃焼部から奥壁の段（約18㎝）を境にして煙道部が住居外にのびている。煙道部の長さは97㎝、幅30㎝である。深さは確認面から約20㎝で底面は、ほぼ水平である。先端部の壁は緩やかに立ち上がる。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの右側で確認された。直径約80㎝の円形を呈しており、深さは床面から約76㎝である。堆積土は1層で黒褐色(7.5YR$^{2}/_{2}$)シルトに地山土、白色粘土が混入しているものである（ピット1）。

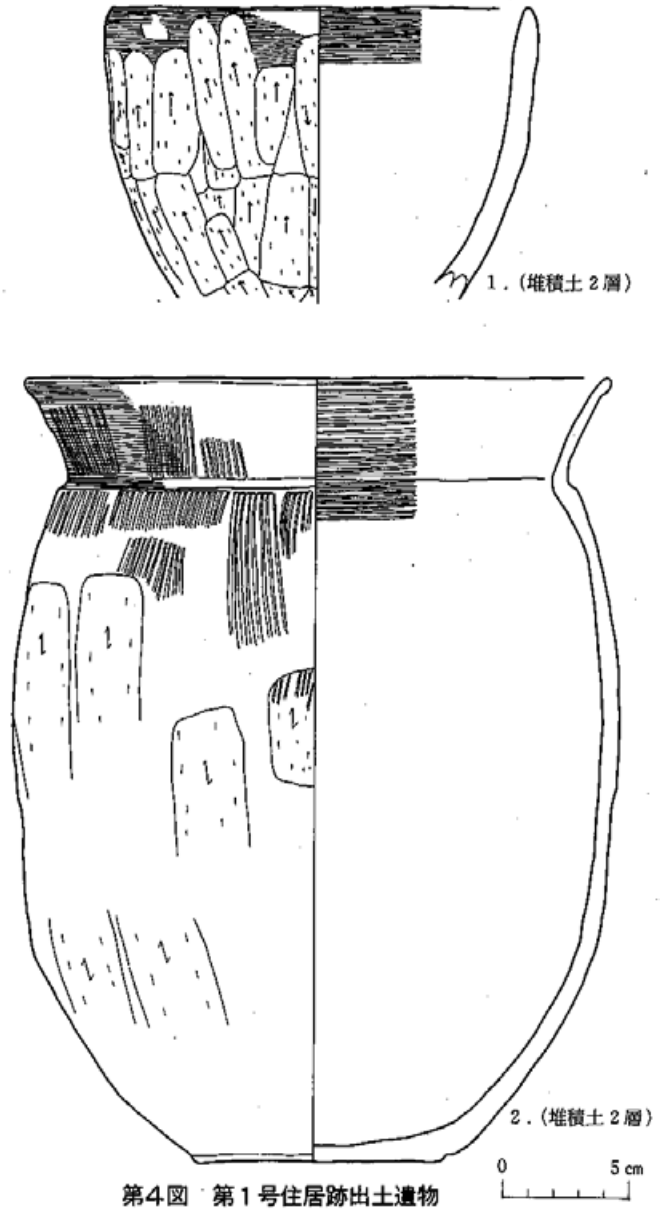
〔出土遺物〕住居に伴う遺物としては貯蔵穴状ピット内出土の遺物のみで、その他は住居内堆積土中からのものである。

＝住居に伴う遺物＝

貯蔵穴状ピット堆積土中から土師器甕の体部破片1点が出土している。外面の器面調整はヘラケズリ、内面はヘラナデのものである。

＝堆積土中出土遺物＝

堆積土から土師器甕が出土している。ほとんどが破片で、図示できるものは2点のみである。いずれも製作に際し、ロクロを使用していないものである（第4図2）。最大径が口縁部にあり器高より小さい。口縁部は外傾し頸部に段を有しているものである。器面調整は、口縁部外面で縦方向の刷毛目の後、横ナデが施されている。体部外面は頸部に近いところで刷毛目がみられるが、下半ではみられず、



第4図　第1号住居跡出土遺物

ヘラケズリが施されている。内面の調整は、口縁部から頚部にかけて横方向の刷毛目で、体部は不明瞭であるがナデが施されている。

（第４図１）は体部下半が欠損しているものである。最大径が口縁部にあり、口縁部はほぼ直立する。器面調整は、外面の口縁部には、横ナデの後、縦方向のヘラケズリが施されている。体部は縦方向のヘラケズリが施され、口縁部に至っている。内面の口縁部には横ナデが施され、体部は磨滅のため不明である。

第２号住居跡

〔確認、重複〕地山面で確認した。東西に走る後世の溝によって切られている。

〔平面形、規模〕平面形は、１辺約4.4mの正方形である。床面積は約17.76㎡である。

〔堆積土〕４層認められる。

第Ⅰ層：灰白色（7.5Y$^{8}/_{1}$）火山灰、住居中央部に堆積している。

第Ⅱ層：黒褐色（7.5YR$^{3}/_{2}$）シルト、住居中央部に堆積している。

第Ⅲ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{4}$）シルト、住居ほぼ全域に堆積している。

第Ⅳ層：暗褐色（10YR$^{3}/_{3}$）、カマド付近、住居壁沿いに堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。溝によって切られているところを除いて遺存状態は良好である。ほぼ垂直に立ち上がり、壁の高さは約20㎝である。

〔床〕多少の凹凸があるが、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕床面上で４個のピットが確認された。これらは柱痕跡があり、配置から柱穴と考えられる。

〔周溝〕カマドがとりつけられている部分を除き、住居壁に沿って全周している。断面形はU字形を呈し、底面の幅は約５㎝～10㎝、底面からの深さは、約10㎝である。

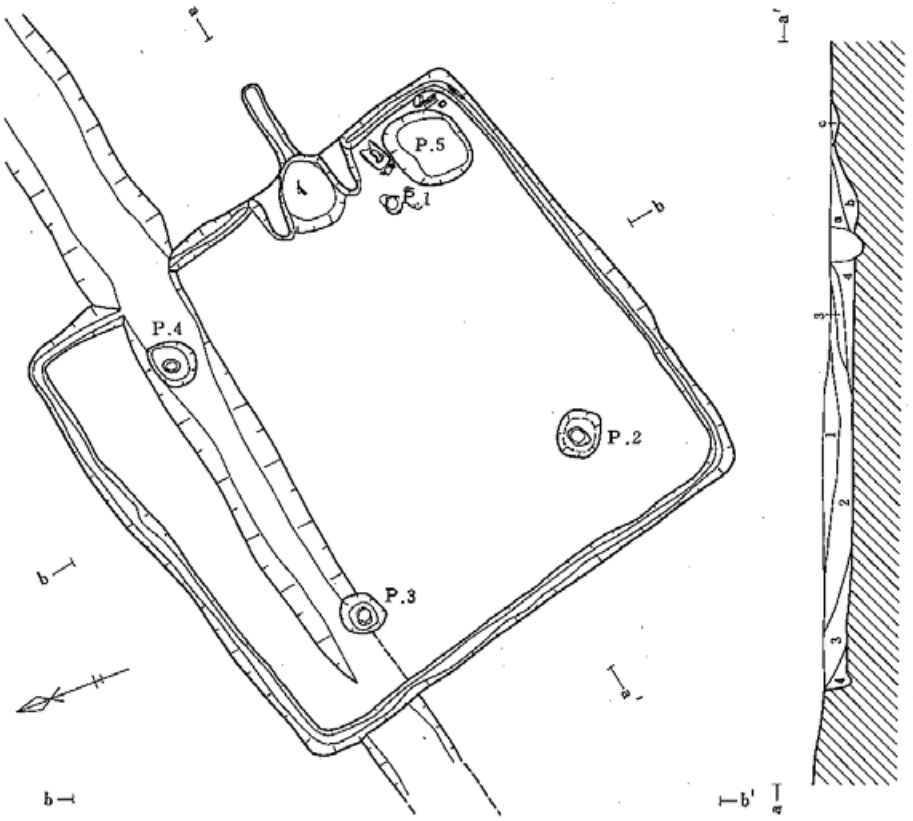
〔カマド〕東壁中央部のやや南寄りに付設されている。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部側壁は灰色粘土で構築されている。燃焼部内の幅は最大で約60㎝、奥行きは約55㎝である。底面は床面よりも低く皿状を呈している。燃焼部から奥壁の段（約７㎝）を境にして煙道部が住居外にのびている。煙道部の長さは約70㎝、幅約15㎝である。深さは、確認面から約4cm～14㎝で先端に向かってゆるやかに立ち上がり、先端はわずかにくぼんでいる。

〔貯蔵穴状ピット〕住居の南東隅にあり、直径約70㎝、深さ約14㎝の円形のピットである。堆積土は１層であり、灰白色の粘土のブロックが混入している。

〔出土遺物〕住居に伴う遺物は床面上、カマド内、貯蔵穴状ピットから出土しており、その他は堆積土中の遺物がある。

＝住居に伴う遺物＝

土師器坏、甕がある。



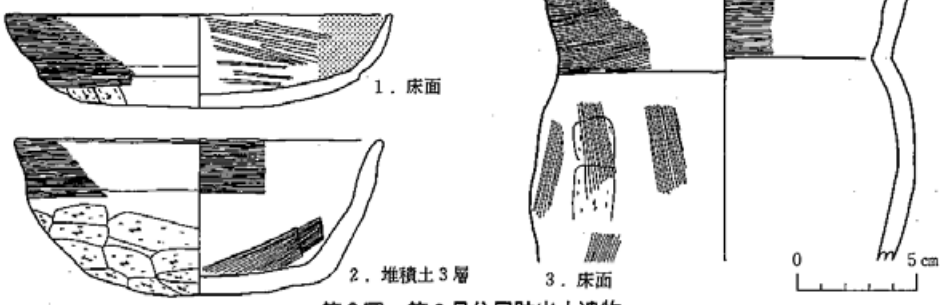
第２号住居跡堆積土

層　位	層No	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	1	灰白色(7.5Y 列)	火山灰	
Ⅱ	2	黒褐色(7.5YR列)	シルト	地山粒混入
Ⅲ	3	暗褐色(7.5YR列)	シルト	地山粒混入
Ⅳ	4	暗褐色(10Y R列)	シルト	
カマド内堆積土	a	褐　色(7.5YR列)	シルト	焼土粒、粘土ブロック混入
〃	b	赤褐色(5 Y R列)	シルト	焼土粒多く入る 炭化少し入る
〃	c	褐　色(7.5YR列)	シルト	焼土粒わずかに入る
掘 方 堆 積 土	5	黒　色(10Y R列)	シルト	

第２号住居跡ピット

ピットNo / 記載	ピット１		ピット２	ピット３	ピット４	ピット５
	掘り方	柱痕跡				
深　さ		40cm	40cm	42cm	34cm	15cm
堆積土 土色	褐　色 7.5YR5/3	暗褐色 7.5YR3/3	暗褐色 7.5YR3/3	暗褐色 7.5YR3/3	暗褐色 7.5YR3/3	暗褐色 7.5YR3/3
堆積土 土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備　考	地山土混入					10Y R5/4 (灰白色) 混入

第５図　第２号住居跡



第６図　第２号住居跡出土遺物

土師器坏：（第 6 図 1）底部は丸底である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、体部の外面に段を形成している。外面の器面調整は、段から下はヘラケズリが施され、段から上は横ナデが施されている。内面は、ヘラミガキ、黒色処理されている。

土師器甕：（第 7 図 6）は、最大径が口縁部にある長胴形のもので口縁部が外傾するものである。外面の器面調整は、口縁部には横ナデが施され、体部に縦方向のヘラケズリが施されている。内面は、口縁部から頚部にかけて横ナデが施され、体部にはヘラナデ・ナデが施されている。（第 6 図 3）は、体部下半から底部にかけて欠損しているものである。最大径が口縁部にあるもので口縁部は外傾する。外面の器面調整は口縁部には横ナデが施され、体部にはヘラケズリの後、ナデが施されている。内面の口縁部には、横ナデが施され、体部は摩滅のため不明である。（第 7 図 1）は、体部上半と口縁部端部が残存しているものである。口縁部は外傾する。外面の器面調整は、口縁部には、横ナデが施され、体部にはヘラケズリが施されている。内面の口縁部には横ナデが施され、体部にはヘラナデが施されている。（第 7 図 2）は、体部下半と口縁部端部が残存していないものである。口縁部は外傾する。外面の器面調整は、口縁部には横ナデが施され、体部は摩滅のため不明である。

（第 7 図 5）は底部と体部下半のみが残存しているものである。底部には木葉痕がみられる。外面の器面調整は、体部にはヘラケズリが施されている。内面には、不明瞭であるが、ナデが施されている。（第 7 図 3）は、最大径が体部にあるもので口縁部はほぼ直立する。外面の器面調整は、口縁部には横ナデが施され、体部には、ヘラケズリが施されている。

その他破片は、第 1 表に示すとおりである。全体的な傾向として土師器甕の体部破片が多い。

＝堆積土中出土遺物＝

土師器坏（第 6 図 2）：底部は丸底である。底部から体部にかけて内弯気味に立ち上がり、体部上端はわずかな稜を形成し、口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は外反する。外面の器面調整は、口縁部には、横ナデが施され、体部から底部にかけてヘラケズリが施されている。内面は、口縁部には横ナデが施され、体部にはヘラナデが施されている。

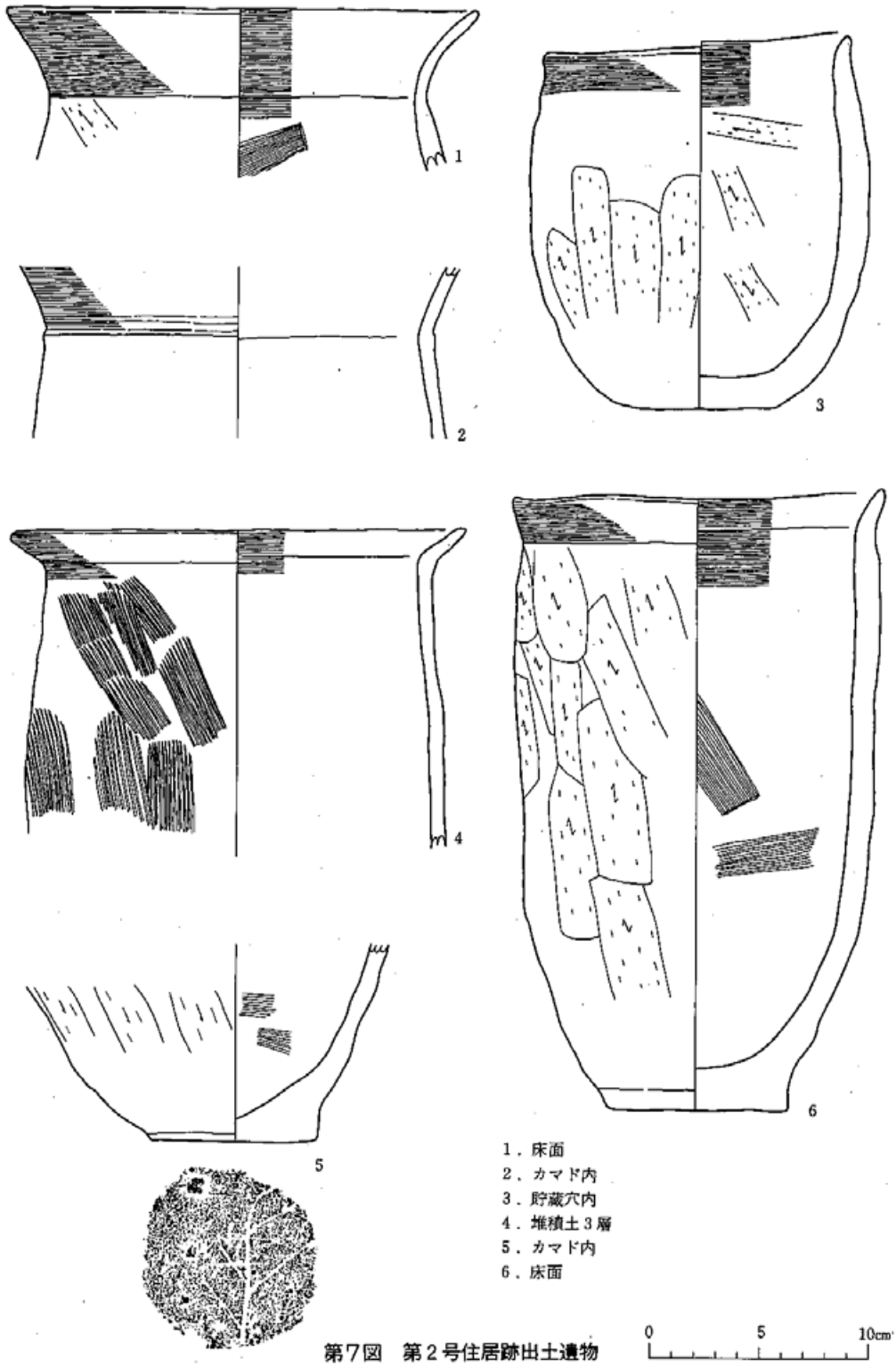
土師器甕（第 7 図 4）体部下半から底部にかけて欠損しているものである。体部中央部がややふくらみ、やや内弯気味に立ち上がり、頚部はややすぼまり、口縁部は外傾する。外面の器面調整は、口縁部から頚部にかけて横ナデが施され、体部には刷毛目が施されている。内面は、口縁部には横ナデが施され、体部は磨滅のため不明である。

その他、第 1 表に示すとおりである。

第 3 号住居跡

〔確認・重複〕重複は認められない。地山面で確認された。

〔平面形・規模〕直径約 7.9mの円形である。床面積は約 46.01 ㎡である。



1．床面
2．カマド内
3．貯蔵穴内
4．堆積土３層
5．カマド内
6．床面

第７図　第２号住居跡出土遺物

〔堆積土〕5層に認められる。

第Ⅰ層：暗赤褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{2}$）シルト　住居中央部に堆積している。後世の攪乱により残り少ない。

第Ⅱ層：暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{2}$）シルト　西壁付近に堆積している。

第Ⅲ層：暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{4}$）シルト　住居中央部と西側の壁は近くに堆積している。

第Ⅳ層：暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{3}$）シルト　床面上全体に堆積している。

第Ⅴ層：極暗褐色（7.5ＹＲ$^{2}/_{3}$）シルト　住居壁、周溝内に堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。削平のため、遺存状態はあまり良くない。壁高は高い所で約 10 ㎝である。

〔床〕地山を床面としている。ほぼ平坦であるが、住居中央部は低い。全体的に床面はかたくない。

〔柱穴〕床面上で18個のピットが検出された。その内、柱痕跡が確認されたのはピット7とピット10である。ピットの規模、深さ、配置関係からすべてのピットが柱穴の可能性をもつ。

〔周溝〕壁沿いを全周する。断面形はU字形を呈し、床面幅は5～20㎝、床面からの深さは20～40㎝である。

〔炉〕住居床面中央に約70㎝×50㎝の範囲に焼面がみられ、炉と考えられる。

〔出土遺物〕住居に伴う遺物として床面上、周溝内、ピット出土の遺物がある。

＝住居に伴う遺物＝

縄文土器や凹石・剥片がある。縄文土器はいずれも破片であり、実測図可能なものはない。

縄文土器（第9図1～5）

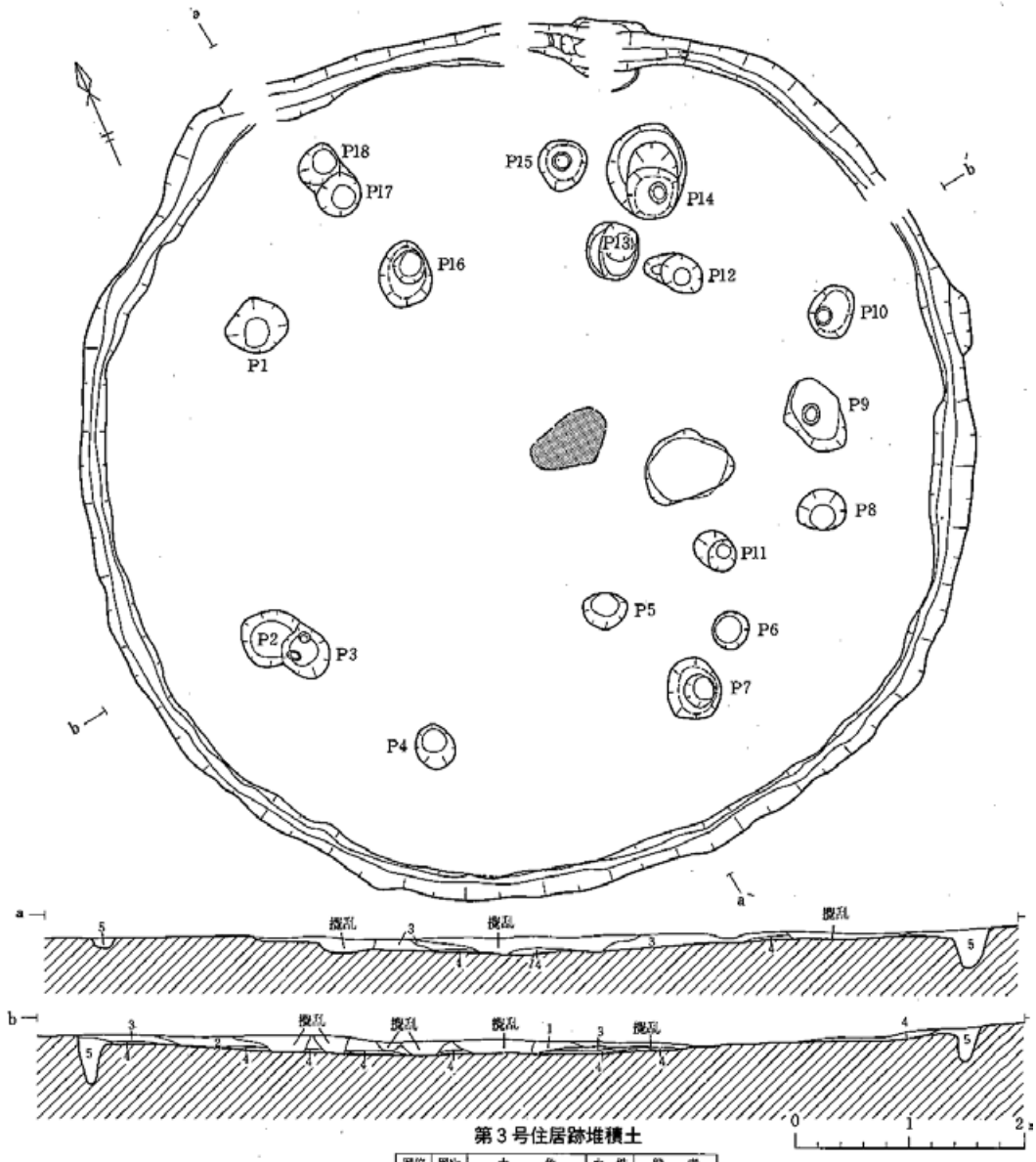
口縁部資料は、2点で深鉢形土器の破片である。

1は、平縁で縄文（ＲＬ）を地文として口縁部上端には、粘土紐貼り付けによる調整された隆起線文と沈線文を併用した調整隆沈文が施され、横位に展開する渦巻文が施されている。下端には調整隆沈文が三本横位に曲線的に走っている。2は、波状口縁の破片である。口縁部は肥厚しており、口唇部には調整隆沈文が施されている。口縁部下端に1個の貫通孔が穿たれている。3～5は、深鉢形土器の体部破片である。4は縄文（ＲＬ）を地文として3本の沈線が曲線的に展開し、渦巻文が施こされている。3は縄文（ＲＬ）を地文として調整隆起文が施されている。5は縄文のみのものである。

石器

凹石（第10図1・2）

2点出土している。平面形、断面形はいずれも楕円形を呈する。2の凹部は、上下両面に1個ずつあり、いずれも平面形は円形で断面は皿状を呈する。1の凹部は上面に1個で平面形は



第３号住居跡堆積土

層位	層No	土　色	土　性	備　考
I	1	暗赤褐色（５ＹＲ3/6）	シルト	やや粘性有り
II	2	黒 褐 色(7.5YR3/1)	シルト	炭化物混入
III	3	暗 褐 色(7.5YR3/3)	シルト	地山土混入
IV	4	暗 褐 色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物混入
V	5	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	地山粒混入

第３号住居跡ピット

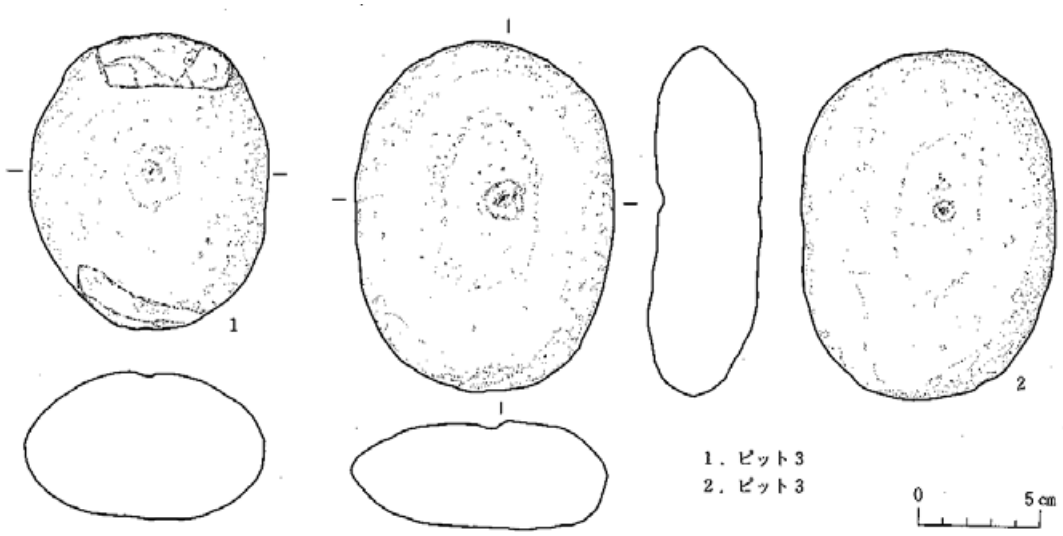
ピット№ / 記載		ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	ピット5	ピット6	ピット7	ピット8	ピット9	ピット10	ピット11	ピット12	ピット13	ピット14	ピット15	ピット16	ピット17	ピット18
								掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡							
開き(cm)		74	61	64	67	69	75	75	60	52	58	50	56	57	54	45	53	39	29
堆積土	土色	褐灰色 7.5YR4/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	暗 褐 色 7.5YR3/3	暗 褐 色 7.5YR3/3	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1	黒 褐 色 7.5YR3/1
	土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備　考		本図収入	本図収入				本図・地山土収入	地山土収入	本図収入	本図収入	地山土収入	本図収入	本図炭化物収入		本図・地山土収入	地山土収入	本図・地山土収入	本図・地山土収入	本図・炭化物収入

第８図　第３号住居跡

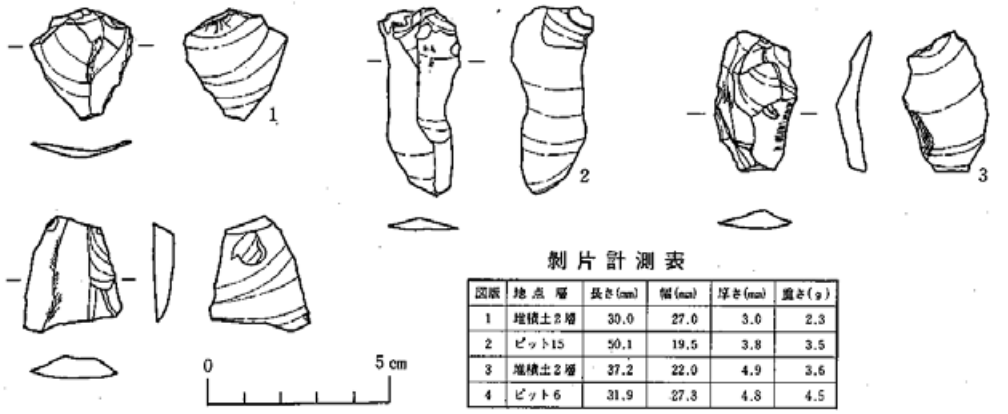
縄文土器観察表

図No	層・地点	部 位	文様単位	文様表現技法	地 文	内面調整	分 類
1	周 溝	口縁部	横位貼巻文	調整隆沈文	縄文(RL)	ミガキ(横位)	2 類
2	床 面	口縁部		口唇部に調整隆沈文		ミガキ(横位)	
3	周 溝	体 部		調整隆沈文	縄文(不明)	ミガキ(横位)	2 類
4	ピット10	体 部	貼 巻 文	沈 線 文	縄文(RL)	ミガキ(横位)	3 類
5	周溝内	体 部			縄文(RL)	ミガキ	6 類
6	堆積土1層	口縁部	横位楕円文	調整沈線文、磨消縄文	縄文(LR)	ミガキ(横位)	4 類
7	〃 〃	口縁部		磨消縄文	縄文(RL)	ミガキ(横位)	
8	〃 〃	体 部		沈 線 文	縄文(LR)	不 明	3 類
9	〃 2層	体 部		沈 線 文	縄文(不明)	不 明	〃
10	〃 3層	体 部		沈 線 文	縄文(不明)	ミガキ(横位)	〃
11	〃 〃	体 部		沈 線 文	縄文(不明)	ミガキ	〃
12	〃 1層	体 部		沈 線 文	縄文(不明)	不 明	〃
13	〃 〃	体 部		沈 線 文	撚糸文(R)	ミガキ(横位)	〃
14	〃 〃	体 部		調整隆沈文	縄文(不明)	不 明	2 類
15	〃 〃	体 部		調整隆沈文	不明	ミガキ(横位)	〃
16	〃 〃	体 部		調整沈線文、磨消縄文	縄文(不明)	ミガキ	4 類
17	〃 〃	体 部		調整沈線文、磨消縄文	縄文(RL)	ミガキ(横位)	〃
18	〃 〃	体 部			縄文(RL)	ミガキ	6 類
19	〃 〃	体 部			縄文(LR)	ミガキ	〃
20	〃 〃	体 部			縄文(LR)	ミガキ	〃

第9図　第3号住居跡出土縄文土器



第10図　第３号住居跡出土石器（凹石）



剥片計測表

図版	地点 層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
1	堆積土2層	30.0	27.0	3.0	2.3
2	ピット15	50.1	19.5	3.8	3.5
3	堆積土2層	37.2	22.0	4.9	3.6
4	ピット6	31.9	27.3	4.8	4.5

第11図　第３号住居跡出剥版

円形であり、断面は皿状を呈する。

剥片（第11図2・4）

いずれも縦長のもので4は平坦な打面が認められ、2の打面は残っていない。両者とも調整剥離は認められない。

＝堆積土出土遺物＝

縄文土器、剥片が出土している。

縄文土器（第9図6～20）

口縁部資料は2点でいずれも深鉢形土器の破片である。6の口縁部は無文帯となり、調整沈線文による曲線的な区画文が描かれ、その中に縄文（ＬＲ）が施されている。7は口縁部が無文帯となり、体部に縄文が施こされている。8～20は深鉢形土器の体部破片である。（8～20）は縄文を地文として沈線文が施されているものである。沈線文はいずれも曲線的である。（14・

25）は、粘土紐貼り付けによる調整された隆起線文と沈線文が併用された調整隆沈文が施されているものである。（16・17）は磨消縄文がされ、磨消部と縄文部は調整沈線文によって画されている。（18～20）は、縄文のみのものである。

石器

剥片（第11図1・3）

2点出土している。

1 は打面がわずかに残っているもので、3 は打面が残っていない。両者とも調整剥離がみとめられない。

2. 竪穴遺構

第1号竪穴遺構

〔確認・重複〕地山面で確認された。重複は認められない。

〔平面形・規模〕一辺約 3.2mの正方形である。

〔堆積土〕3層にわかれる。

第Ⅰ層：黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）シルト　中央部に堆積している。

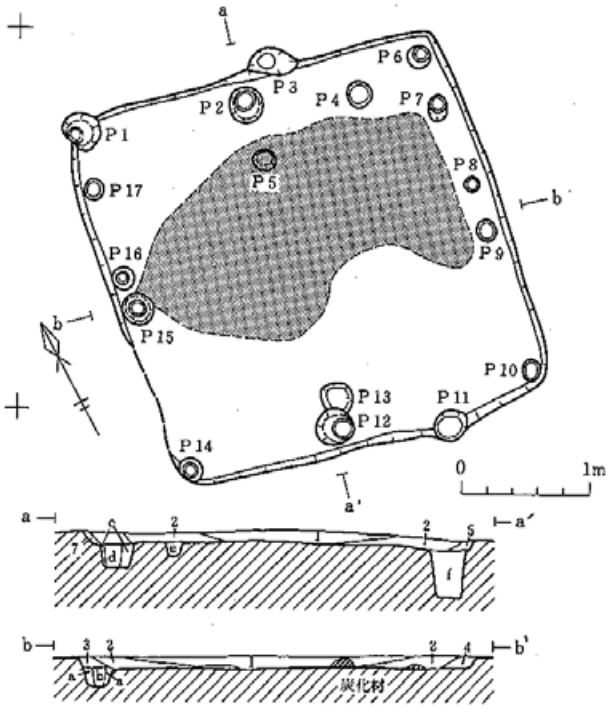
第Ⅱ層：極暗褐色（7.5YR$^{2}/_{3}$）シルト　竪穴壁付近に堆積している。

第Ⅲ層：黒褐色（10YR$^{2}/_{3}$）シルト　壁沿いに堆積している。

〔壁〕西壁の1部が削平のため残っていない。残存する壁高は高い所で約10㎝である。立ち上がりは、ゆるやかである。

〔底面〕地山を底面としており、ほぼ平坦である。中央部から北側寄りの底面は約 1.5m×約 2.7mの範囲で火熱を受け赤変しており、炭化した木材が倒れた状態で検出された。

〔柱穴〕底面で17個のピットが確認された。柱痕跡が確認されたピット



第1号竪穴

層位	層No	土色	土性	備考
Ⅰ	1	黒褐色（7.5YR3/1）	シルト	焼土木炭含む
Ⅱ	2	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	焼土木炭多く含む
Ⅲ	3	黒褐色（10YR3/1）	シルト	木炭少し含む
Ⅲ	4	黒褐色（10YR3/1）	シルト	焼土多く含む
Ⅲ	5	黒褐色（10YR3/1）	シルト	
Ⅱ	6	赤褐色（5YR4/6）	シルト	
Ⅲ	7	黒褐色（10YR3/1）	シルト	
P15掘り方	a	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	
〃 柱痕跡	b	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	
P2掘り方	c	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	
〃 柱痕跡	d	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	
P5	e	黒褐色（7.5YR3/1）	シルト	
P12掘り方	f	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	

第12図　第1号竪穴遺構

は8個である。ピットの形、大きさ、深さ、配置から12個のピット（P.1～P.12）が、柱穴と考えられる。

〔出土遺物〕なし。

第1号竪穴ピット

記載 ピットNo		ピット1		ピット2		ピット3	ピット4	ピット5	ピット6		ピット7		ピット8	ピット9
		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡				掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡		
深さ														
堆積土	土色	極暗褐色 7.5YR3/3	黒褐色 7.5YR3/2	極暗褐色 7.5YR3/3	明赤褐色 5YR5/8	黒褐色 7.5YR3/2	黒褐色 7.5YR3/2	黒褐色 7.5YR3/2	極暗褐色 7.5YR3/3	明赤褐色 5YR5/8	極暗褐色 7.5YR3/3	黒褐色 7.5YR3/2	黒褐色 7.5YR3/2	黒褐色 7.5YR3/2
	土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備考		地山土を含む	多量の炭化物混入	地山土を含む	焼土、木炭が混入している	木炭、地山土含む	地山土含む	地山土、木炭含む	地山土を含む	木炭、多量に含む	地山土を含む	木炭、多量に含む	木炭、多量に含む	木炭、多量に含む

記載 ピットNo		ピット10	ピット11	ピット12		ピット13	ピット14		ピット15		ピット16		ピット17	
				掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡		
深さ														
堆積土	土色	黒褐色 7.5YR3/2	黒褐色 7.5YR3/2	極暗褐色 7.5YR3/3	黒褐色 7.5YR3/2	暗褐色 7.5YR3/3	極暗褐色 7.5YR3/3	黒褐色 7.5YR3/2	極暗褐色 7.5YR3/3	明赤褐色 5YR5/8	極暗褐色 7.5YR3/3	黒褐色 7.5YR3/2	黒褐色 7.5YR3/2	
	土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	
備考		焼土、木炭多量に含む	地山土を含む		木炭、地山土を含む		地山	木炭、焼土含む	地山土を含む	焼土、木炭多量に含む	地山土を含む	焼土、木炭含む	焼土、木炭含む	

第２号竪穴遺構（第13図）

〔確認、重複〕地山面で確認した。第3号竪穴を切っている。

〔平面形、規模〕一辺約3.2mの不整正方形である。

〔堆積土〕5層みとめられる。

第Ⅰ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{4}$）シルト　中央部に堆積している。

第Ⅱ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{3}$）シルト　中央部に堆積している。

第Ⅲ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{4}$）シルト　南壁を除く壁沿いに堆積している。

第Ⅳ層：褐色（10YR$^{4}/_{6}$）シルト　南壁沿いに堆積している。

第Ⅴ層：極暗褐色（7.5YR$^{2}/_{3}$）シルト　底面全体にうすく堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。北壁の残存高が最も高く約30㎝である。立ち上がりはゆるやかである。

〔底面〕地山を底面としている。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕底面上で7個のピットが確認された。その内6個（P.1～P.6）は壁に沿っており、しかも対応するものである。ピット7については対応するものがない柱穴と考えられる。

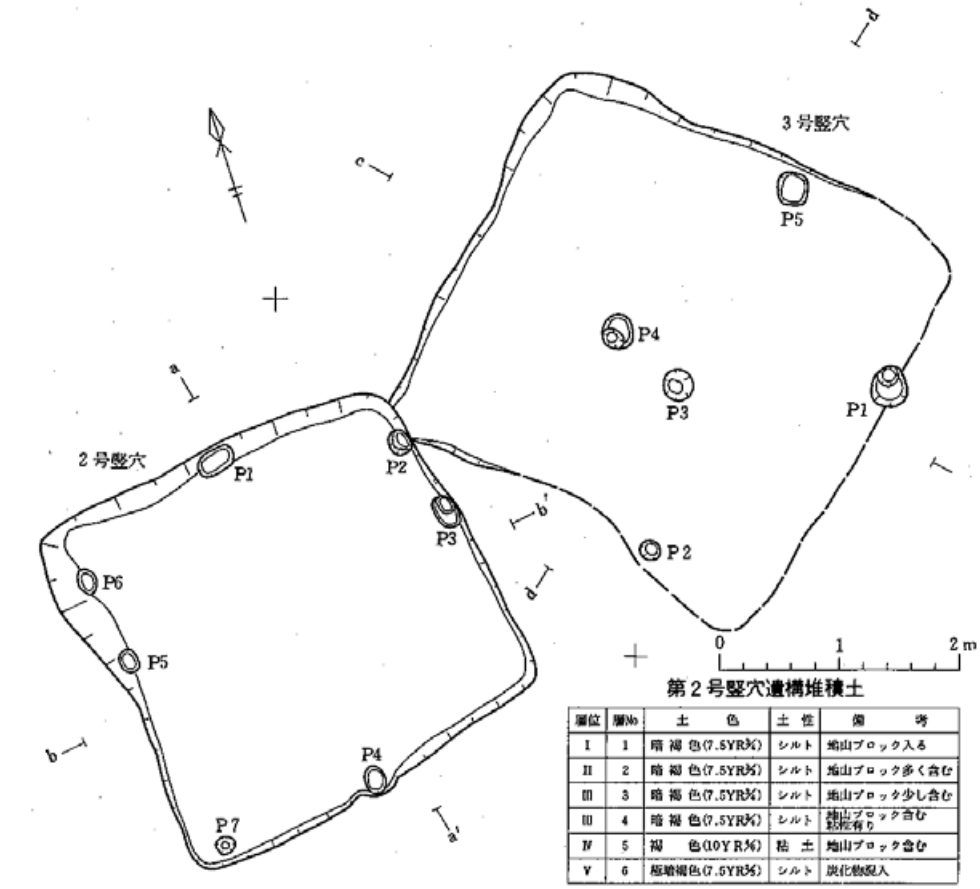
〔出土遺物〕堆積土第Ⅲ層から土師器片、第Ⅳ層から中世陶器片が出土している。

第３号竪穴遺構

〔確認・重複〕地山面で確認された。2号竪穴に切られている。

〔平面形・規模〕南辺が3.7mで東半は残存していないが、正方形と思われる。

〔堆積土〕3層認められる。

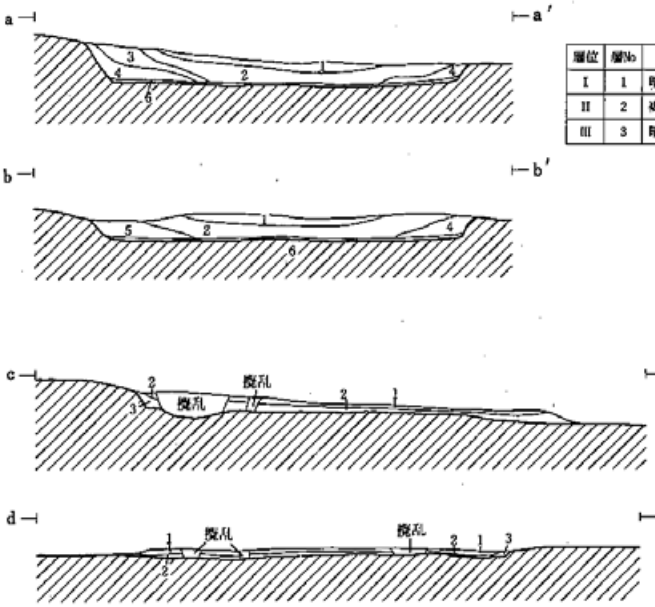


第２号竪穴遺構堆積土

層位	層No	土　色	土 性	備　考
I	1	暗 褐 色(7.5YR3/4)	シルト	地山ブロック入る
II	2	暗 褐 色(7.5YR3/3)	シルト	地山ブロック多く含む
III	3	暗 褐 色(7.5YR3/4)	シルト	地山ブロック少し含む
III	4	暗 褐 色(7.5YR3/4)	シルト	地山ブロック含む 粘性有り
IV	5	褐　色(10YR4/6)	粘 土	地山ブロック含む
V	6	極暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物混入

第３号竪穴遺構堆積土

層位	層No	土　色	土 性	備　考
I	1	暗 褐 色(7.5YR3/3)	シルト	炭白色土のブロック、地山ブロック含む
II	2	褐　色(7.5YR4/6)	シルト	地山ブロック含む
III	3	暗 褐 色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック多く含む



第２号竪穴ピット

記載＼ピット No		ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	ピット5	ピット6
深 さ							
堆積土	土色	暗褐色 10YR3/4	暗褐色 10YR3/4	暗褐色 10YR3/4	暗褐色 10YR3/4	暗褐色 10YR3/4	暗褐色 10YR3/4
	土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備 考		地山土混入					

第３号竪穴ピット

記載＼ピット No		ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	ピット5	ピット6
深 さ							
堆積土	土色	暗褐色 7.5YR3/4	暗褐色 10YR3/4	暗褐色 10YR3/4	暗褐色 7.5YR3/4	褐　色 10YR3/4	暗褐色 7.5YR3/4
	土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備 考		炭化物、地山ブロック混入	地山ブロック、小礫混入	炭化物混入	地山ブロック混入	炭化物、小礫混入	炭化物、地山ブロック混入

第13図　第２・３号竪穴遺構

第Ⅰ層：暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{3}$）シルト　全体に堆積している。
第Ⅱ層：褐色（7.5ＹＲ$^{4}/_{4}$）シルト　全域底面上に堆積している。
第Ⅲ層：暗褐色（10ＹＲ$^{3}/_{3}$）シルト　北・西壁沿いに堆積している。
〔壁〕北壁・東半の壁は残っていない。残存部分の壁高は約2.8㎝である。立ち上がりはゆるやかである。
〔底面〕竪穴中央部、北、西壁沿いの一部は地山を底面としている。南壁、北壁沿いの一部には幅約30㎝～60㎝で深さ約5㎝の掘り方があり、その埋め土の上面を底面としている。
〔柱穴〕底面上で5個のピットが確認された。配置に規則性がないため、それらが柱穴になるかは不明である。
〔出土遺物〕なし

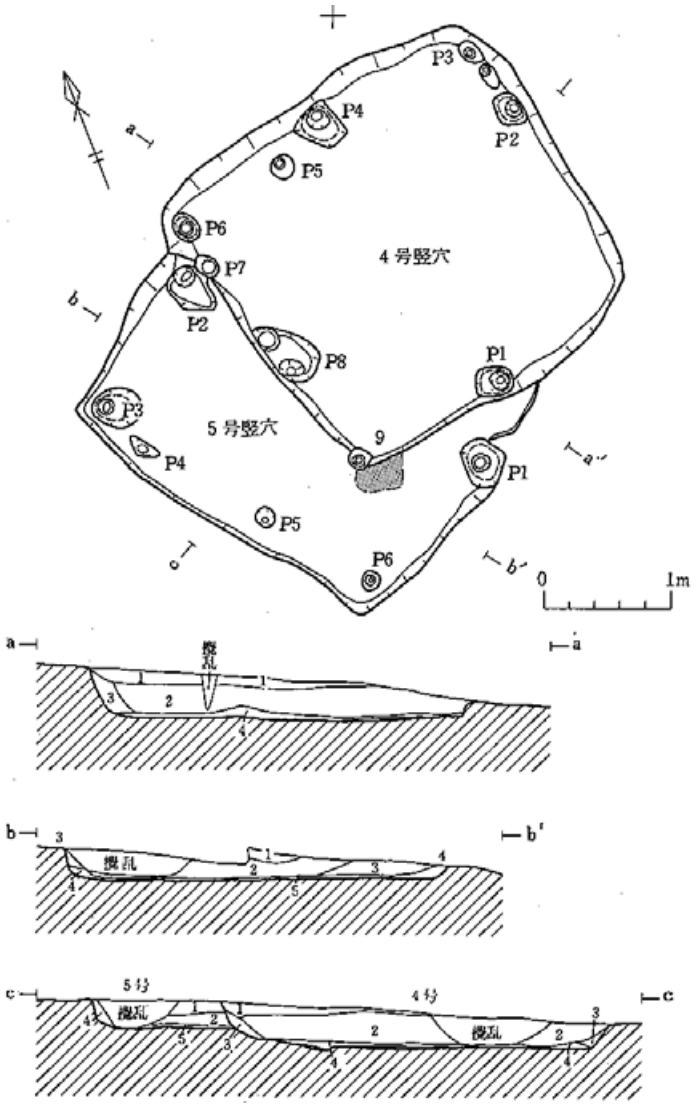
第４号竪穴遺構

〔確認・重複〕地山面で確認された。5号竪穴を切っている。
〔平面形・規模〕1辺2.9ｍの正方形である。
〔堆積土〕4層認められる。
第Ⅰ層：暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{3}$）シルト　全体に堆積している。
第Ⅱ層：暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{3}$）シルト　全体に堆積している。
第Ⅲ層：黒褐色（7.5ＹＲ$^{2}/_{2}$）シルト　東西と北壁沿いに堆積している。
第Ⅳ層：暗褐色（10ＹＲ$^{3}/_{3}$）シルト　竪穴全域底面上にうすく堆積している。
〔壁〕地山を壁としている。遺存状態は良好である。壁高は北壁で約40㎝、南壁で約14㎝である。立ち上がりはゆるやかである。
〔底面〕地山を底面としている。ほぼ平坦である。
〔柱穴〕底面上で9個のピットが確認された。そのうち、柱痕跡があるのは7個（Ｐ.1、2、4、5、6、8、9）である。これらは柱穴と考えられる。その他のピットも壁沿いに並ぶことから柱穴の可能性がある。
〔出土遺物〕堆積土第Ⅰ層より土師器甕の体部破片3点、須恵器壺の体部破片1点が出土している。

第５号竪穴遺構

〔確認・重複〕地山面で確認された。第4号竪穴に切られている。
〔平面形・規模〕西辺で一辺約2.9ｍの正方形と考えられる。
〔堆積土〕5層認められる。
第Ⅰ層：黒褐色（7.5ＹＲ$^{2}/_{2}$）シルト　中央部に堆積している。
第Ⅱ層：暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{3}$）シルト　中央部から北壁付近まで堆積している。

第Ⅲ層：暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{4}$）シルト　南、北壁沿いに堆積している。
第Ⅳ層：黒褐色（7.5ＹＲ$^{2}/_{2}$）シルト　北、西、南壁沿いに堆積している。
第Ⅴ層：黒褐色（10ＹＲ$^{2}/_{2}$）
〔壁〕地山を壁としている。北壁、南壁の一部は遺存していない。壁高は、高い所で北壁が高く約20㎝である。立ち上がりはゆるやかである。
〔底面〕地山を底面としている。ほぼ平坦である。西寄りの底面に焼面がみられる。
〔柱穴〕底面で6個のピットが確認された。その内、4個が柱穴と考えられる。
〔出土遺物〕なし



第4号竪穴遺構堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
I	1	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	地山ブロック含む
II	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山ブロック含む 炭化物わずかに混入
III	3	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	地山ブロック含む わずかに粘性有り
IV	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	

第5号竪穴遺構堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
I	1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	地山ブロック、木炭わずかに混入
II	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山ブロック多く混入
III	3	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	地山ブロック混入 わずかに粘性あり
IV	4	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	地山粒混入
V	5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒、木炭粒混入

第4号竪穴ピット

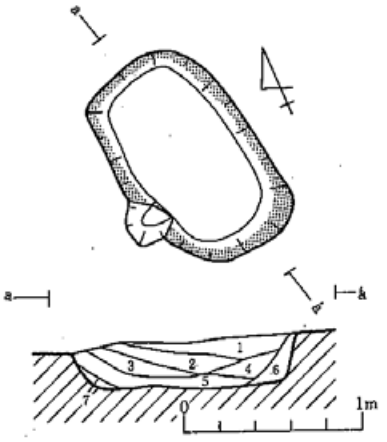
ピットNo	ピット1		ピット2		ピット3		ピット4	ピット5	ピット6		ピット7	ピット8		ピット9	
配置	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
深さ															
覆土 土色	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1		黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1
覆土 土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト		シルト	シルト	シルト	シルト
備考	地山ブロック混入	地山ブロック混入	地山ブロック混入	地山ブロック混入	地山ブロック混入	地山ブロック混入	地山ブロック混入	地山ブロック混入	地山ブロック混入	地山ブロック混入		地山ブロック混入	地山ブロック混入		地山ブロック混入

第5号竪穴ピット

ピットNo	ピット1		ピット2		ピット3		ピット4	ピット5	ピット6	
配置	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡			掘り方	柱痕跡
深さ										
覆土 土色	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	暗褐色 7.5YR3/3	黒褐色 7.5YR3/1
覆土 土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備考	地山土 混入	地山土 混入	地山土 多く混入	地山土 混入	地山土 混入	地山土 少し混入	地山土 少し混入	地山土 混入	地山土 少し混入	地山土 混入

第14図　第4・5号竪穴遺構

3. 焼土遺構



焼土遺構堆積土

層位	層No.	土　色	土 性	備　考
Ⅰ	1	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	木炭、焼土ブロック混入
Ⅱ	2	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	木炭、焼土ブロック多く混入
Ⅲ	3	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	木炭、焼土ブロック混入
Ⅳ	4	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	木炭、焼土ブロック混入
Ⅳ	5	極暗褐色（7.5YR2/3）	シルト	木炭、焼土少し混入
Ⅴ	6	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	木炭、焼土ブロック混入
Ⅴ	7	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	焼土ブロック多し混入

第15図　焼土遺構

〔確認面、重複〕地山面で確認された。壁の一部がピットにより切られている。

〔平面形、規模〕約0.8m×1.3mの隅丸方形である。

〔堆積土〕5層認められる。

第Ⅰ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{3}$）シルト　中央部に堆積している。

第Ⅱ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{3}$）シルト　南側から中央部に向って堆積している。

第Ⅲ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{3}$）シルト　北側、南側から中央部に向って堆積している。

第Ⅳ層：極暗褐色（7.5YR$^{3}/_{3}$）シルト　南側から中央部、底面上に堆積している。

第Ⅴ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{3}$）シルト　壁沿いに堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。壁高は20 cm～30cm である。立ち上がりは、地壁で比較的急で、南壁でややゆるやかである。壁は火熱を受けて赤化し固くなっている。

〔底面〕地山を底面としている。ほぼ平坦である。火熱を受けていない。

〔出土遺物〕なし。

4. 土壙

土壙１

〔確認、重複〕地山面で確認された。重複は認められない。

〔平面形、規模〕86 cm×105 cmの略方形である。

〔堆積土〕4層認められる。

第Ⅰ層：黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）シルト　中央部から南壁付近に堆積している。

第Ⅱ層：黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）シルト　北壁から中央部底面に向かって堆積している。

第Ⅲ層：黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）シルト　北壁沿いに堆積している。

第Ⅳ層：黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）シルト　南壁沿いに堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。壁高は約7 cm～9 cmである。立ち上がりはゆるやかである。

〔出土遺物〕なし。

土壙２

〔確認・重複〕地山面で確認した。2 個のピットによって切られている。

〔平面形・規模〕1.2m×0.9mの不整形である。

〔堆積土〕3 層に分かれる。

第Ⅰ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{3}$）シルト

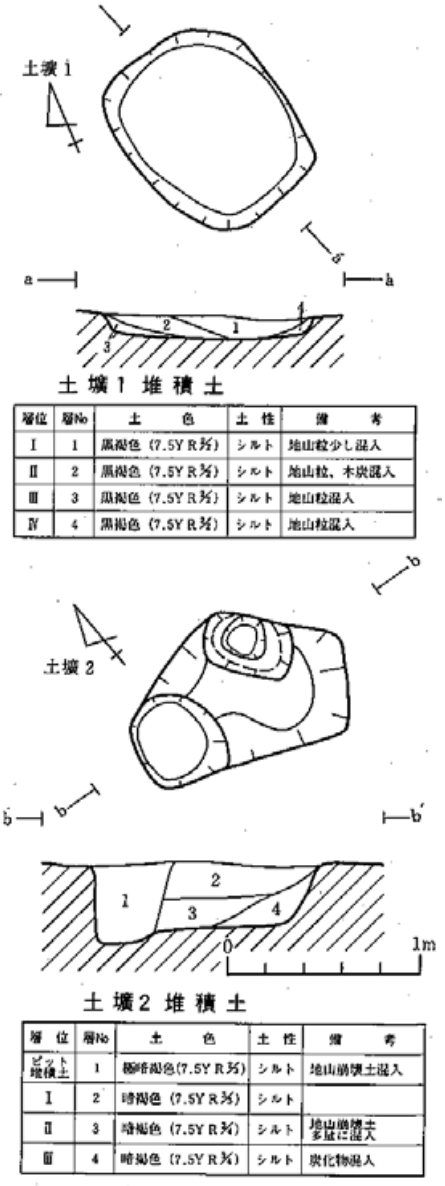
第Ⅱ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{4}$）シルト

第Ⅲ層：暗褐色（7.5YR$^{3}/_{4}$）シルト

〔壁〕地山を壁としている。残存部の壁高は約 30 ㎝である。立ち上がりはゆるやかである。

〔底面〕残存部分の底面はほぼ平坦である。地山を底面としている。

〔出土遺物〕なし

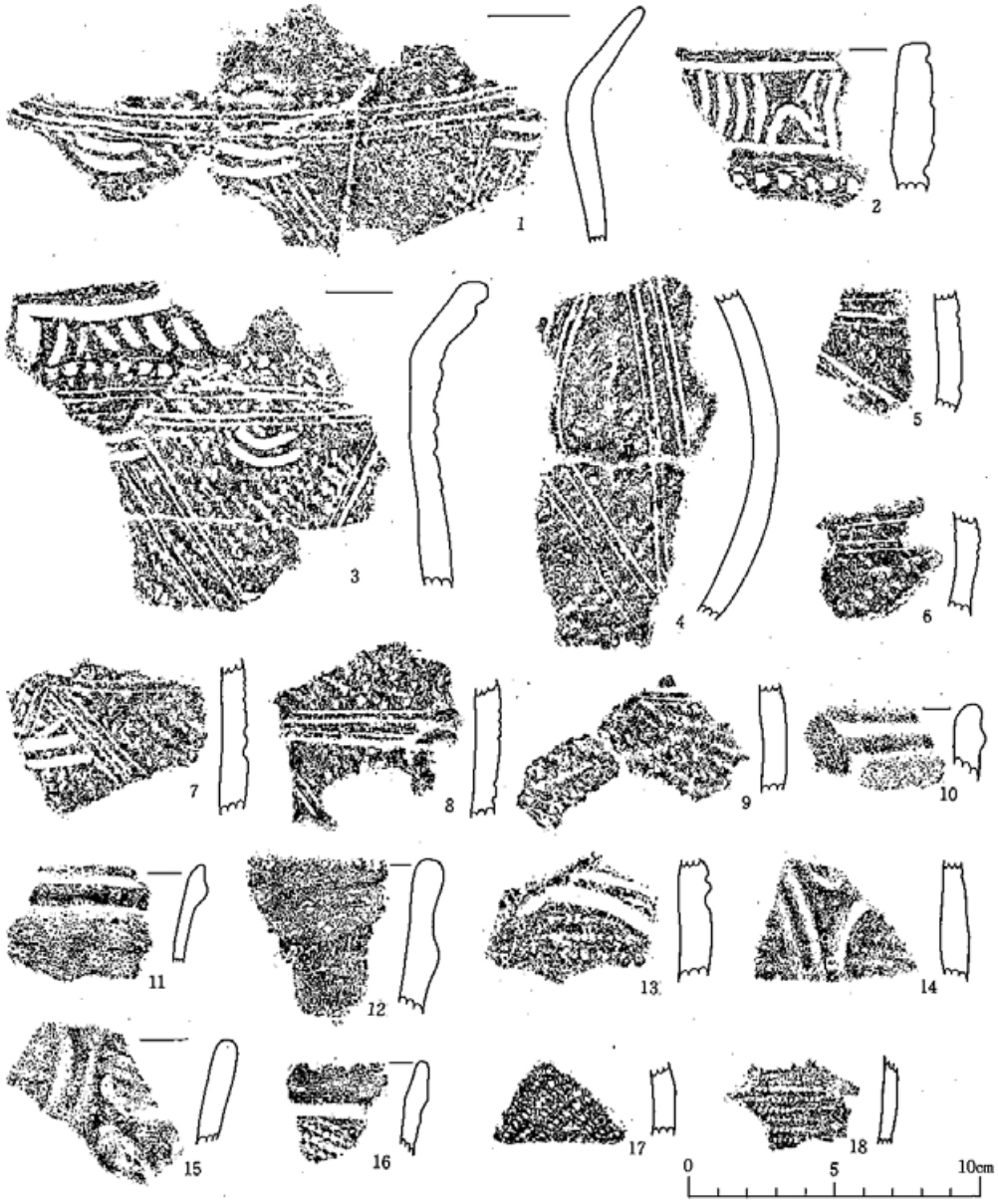


第16図　第１・２土壙

5. 表土の出土遺物

①縄文土器（第 17 図 1～18）

1～9 は同一個体のものである。深鉢形土器の破片である。波状口線で口線部には、太い沈線による弧状文が縦位に施され、頚部には半載竹管による刺突文が横位に連続的に施されている。体部は縄文を地文として半載竹管による細い平行沈線文が直線的に施されている。10、11 は、平縁で粘土紐貼り付けによる調整された隆起線文と沈線文が併用された調整隆沈文が施されている。16 の口縁部は無文帯で調整された沈線文によって縄文部と区画されている。12 は平縁で調整された隆起線文が横方向に施されている。



縄文土器観察表（表土出土）

図No	部　位	文様単位	文様表現技法	地　文	内面調整	分類	図No	部　位	文様単位	文様表現技法	地　文	内面調整	分類
1	口縁部		爪形文、平行沈線文 縄状文	不　明	不　明	1類	10	口縁部	横位連続文	調整隆沈文		不　明	2類
2	口縁部		縄状文、爪形文		不　明	〃	11	口縁部		調整隆沈文		不　明	〃
3	口縁部		縄状文、爪形文 平行沈線文	縄文(不明)	不　明	〃	12	口縁部		隆起線文		不　明	5類
4	体　部		平行沈線文	縄文(不明)	不　明	〃	13	体　部		沈 線 文	縄文(不明)	不　明	3類
5	体　部		平行沈線文	不　明	不　明	〃	14	体　部		調整隆沈文	縄文(ＬＲ)	不　明	2類
6	体　部		平行沈線文	不　明	不　明	〃	15	口縁部		調整隆沈文	不　明	不　明	〃
7	体　部		平行沈線文、縄状文	縄文(不明)	不　明	〃	16	口縁部		調整沈線文 磨消縄文	縄文(ＬＲ)	ミガキ(横位)	4類
8	体　部		平行沈線文	縄文(不明)	不　明	〃	17	体　部			縄文(ＲＬ)	不　明	6類
9	体　部		平行沈線文	縄文(不明)	不　明	〃	18	体　部			縄文(ＲＬ)	不　明	〃

第17図　表土出土遺物（縄文土器）

その他は深鉢形土器の体部破片である。13～14 は縄文を地文として比較的太い沈線文が曲線的に展開し、楕円文か円文を描くと思われる。17・18 は縄文のみのものである。

②土師器

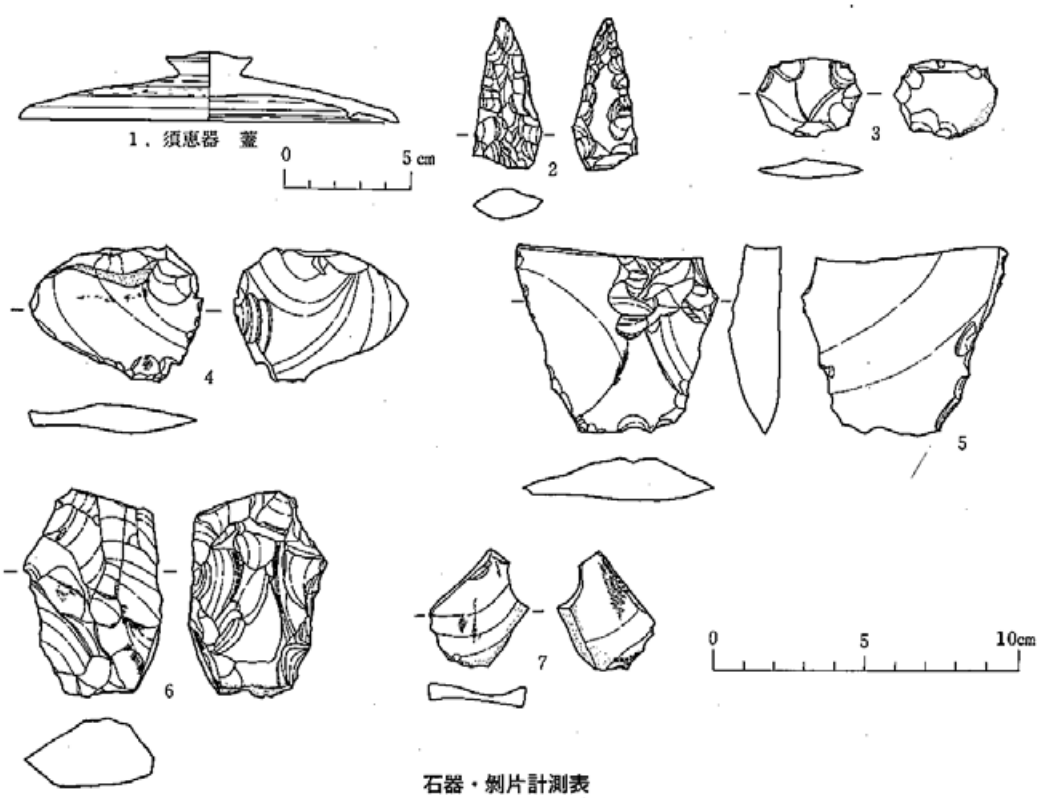
全て破片で図示できるものはない。

③須恵器（第 18 図 1）

蓋：完形器である。天井部に宝珠状のつまみをもつものである。天井部から口縁端部に向い、ゆるやかに傾斜している。天井部外面は回転をもつものである。天井部から口縁端部に向かいゆるやかに傾斜している。天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。内面にはかえりがある。

④石器（第 18 図 2～7）

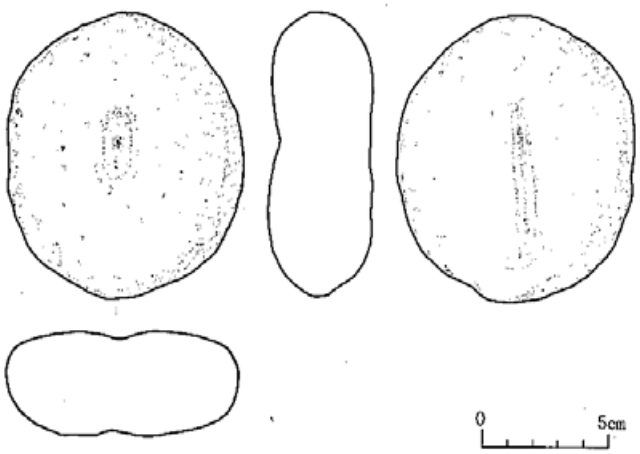
石槍、剥片石器、石核、剥片、凹石がある。



石器・剥片計測表

図版	種 別	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)
2	尖頭器	50.1	22.0	11.0	11.0
3	剥 片	33.3	26.0	7.6	7.3
4	剥 片	53.6	45.0	8.6	27.3
5	剥 片	64.3	62.9	12.8	57.2
6	石 核	65.9	43.9	24.1	86.9
7	剥 片	38.2	32.7	5.5	6.4

第18図　表土出土遺物（須恵器・石器・剥片）



第19図　表土出土遺物（凹石）

石槍（第18図2）

基部が欠損している。半欠品であり、基部か先端部か不明である。両面に調整剥離が入念に加えられている。

剥片（第18図3～5・7）

4 は平坦な打面がわずかに残っているものである。その他の打面は残存していない。いずれも調整剥離はみられない。

石核（第18図6）

縦長のもので、多方向からの剥離痕がみられる。自然面が残っている部分もある。

凹石（第19図）

平面形は、長軸 11.2 ㎝、短軸 9.2㎝ の楕円形を呈している。断面は横・縦断面とも楕円形である。凹部は上、下両面に1個ずつある。上面の凹部は平面形を呈しており、下面の凹部は溝状になっている。

第1表　破片集計表（図示遺物は除く）

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	1号住居跡 1層	1号住居跡 2層	1号住居跡 3層	1号住居跡 4層	1号住居跡 ピット1	2号住居跡 1層	2号住居跡 2層	2号住居跡 3層	2号住居跡 床面	2号住居跡 カマド内	2号住居跡 貯蔵穴	3号竪穴 3層	3号竪穴 4層	4号竪穴 1層	計
土師器	坏	口縁部	横ナデ－横ナデ								1							1
			横ナデ－ヘラミガキ（黒色）								1							1
	甕	口縁部	横ナデ－横ナデ		7					1	1		1					10
			不明－横ナデ		1							1						2
		体部	ヘラケズリ－ナデ		3						8		3					14
			ヘラケズリ－ヘラナデ					1		1	1	2	1	1				7
			ヘラケズリ－ヘラケズリ		2													2
			ヘラケズリ－不明		13					1	19	3	1					37
			刷毛目－ナデ		4													4
			刷毛目－ヘラナデ		1													1
			刷毛目－不明		7						7							14
			不明－ナデ		2													2
			不明－不明		79		5			7	8	4	7	1	3		3	117
		底部	木葉痕		1													1
須恵器	坏	口縁部	ロクロ－ロクロ								1							1
		底部	回転ヘラケズリ								1							1
	甕	体部	平行タタキ目－刷毛目									1						1
	瓶	体部	自然釉														1	1
中世陶器	甕	体部														1		1
計						120		5	1		10	48	11	13	2	3	1	248

Ⅳ．遺構、遺物に関する考察

1．出土遺物の考察

①縄文土器

全て破片で図上復元できるものはなく全体の器形は知り得ないが、文様表現技法、文様構成により、6類に分類することができる。

第1類：口縁部は波状口縁で、太い沈線による弧状文、頚部には瓜形文、体部には細い平行沈線文が施されているもの。

第2類：調整された隆起線文と沈線文を併用した調整隆沈文が施されているもの。

第3類：縄文を地文として沈線文が曲線的に施されているもの。

第4類：調整された隆沈文や沈線文が施され、磨消縄文がみられるもの。

第5類：断面が略三角形を呈する隆起線文が横方向に施されているもの。

第6類：地文のみのもの。

次に各類の編年的位置について考えてみたい。

第1類の土器は、涌谷町長根貝塚（宮教委：1969）出土土器群、南方町青島貝塚（加藤、後藤他：1975）の第4類土器などに特徴が類似しており、縄文時代前期末大木6式期のものと考えられる。第2類、3類の土器は、南方町長者貝塚（阿部・遊佐：1978）、青島貝塚、大郷町大松沢貝殻塚貝塚（加藤：1956）出土の土器に類似しており、縄文時代中期中葉大木 8ｂ式期のものと思われる。第4類の土器は、磨消縄文技法がみられるものである。築館町鰻沢遺跡（古川工高：1974、宮教委：1975）南方町青島貝塚、大衡村上深沢遺跡（宮教委：1978）等で類似したものが出ており、縄文時代中期後葉大木9、10式期のものと考えられるが、いずれも破片のため文様構成に不明な点が多く、大木9式か大木10式の土器と判断することは困難である。第5類の土器は、築館町鰻沢遺跡等で類似したものが出ており、縄文時代中期後葉大木10式のものと考えられる。第6類土器は、縄文、撚糸文のみの地文だけで不明なものである。

②土師器

第1号住居、第2号住居出土の図上復元したものの分類、年代について述べてみる。

坏：2 点のみである。外面に稜をもち、黒色処理されていないものと類似しているものは、志波姫町山ノ上遺跡（手塚：1980）仙台市栗原遺跡（仙台市教・東北学院大学：1979）等出ており住社式のものと思われる。外面に段をもち、対応する内面に稜をもち、黒色処理されているものと類似したものは、仙台市栗原遺跡等で出ており、栗囲式と思われる。

甕：いずれもロクロを使用していないものである。

最大径の位置によって2つに分類できる。

A類：最大径の位置が口縁部にあるもの。

B類：最大径の位置が体部にあるもの。

（甕A類）：口縁部の形態によりさらに2つに分類することができる。

ＡⅠ類：口縁部が外傾するもの。

ＡⅡ類：口縁部が直立するもの。

（甕B類）：口縁部が直立するものである。

ＡⅠ、B類は、第2号住居跡に於いて共伴している。しかも体部外面に段を有し、内面黒色処理されている坏と共伴関係にあり、栗囲式期のものと思われる。ＡⅡ類は第1号住居跡埋積土中からのもので、ＡⅠ類と共伴している。

③須恵器

蓋：共併するものはなく、単独で出土した。宝珠形のつまみはやや扁平化しており、内面にかえりがあることから7C末頃と思われる。

2. 遺構の考察

①竪穴住居跡

精査した住居跡は3軒である。平面形が円形な住居跡は1軒（第3号住居跡）で住居のほぼ中央部に地床炉を有し、壁沿いに周溝がめぐっている。柱穴はピット18個確認されたが、重複しているピットもあり、柱の本数は不明である。出土遺物から縄文時代中葉大木 8b式期のものと考えられる。

平面形が正方形の住居は2軒（1、2号住居跡）で、いずれもカマドが付設され、貯蔵穴を有し、壁沿いに周溝がめぐっている。柱穴は、第2号住居跡は、4本柱で、第1号住居跡は、不明である。出土遺物から第2号住居は奈良時代栗囲式期のものと考えられ、第1号住居跡は年代を決定する遺物が出ておらず、不明である。

②竪穴遺構

5基発見されている。いずれも正面形は一辺約 3mの正方形のものである。柱穴が認められ上部構造を有していたと考えられる。柱穴の配置は、壁沿いに対応するものなど共通性がある。また、いずれも壁はゆるやかに立ち上がる。底面は平坦で固くしまっており、焼面が認められるもの（第1号、5号竪穴）があり、特に第1号竪穴では、広い範囲に焼面がひろがり、炭化材が検出されており、火災にあったものと思われる。出土遺物は、第3号竪穴堆積土中から土師器片、須恵器片がわずかに出土している。3号竪穴の底面近く第4層から中世陶器片が出ており、年代を考えるのに重要な資料であり、中世頃の遺構の可能性がある。性格については、不明な点が多いが、柱穴があり、住居の可能性があるが、その他の施設かもしれない。

③焼土遺構

平面形が隅丸方形のものである。壁が火熱を受け赤変し固くなっており、底面には及んでないものである。出土遺物もなく、性格、年代も不明である。

④土壙

2基発見された。いずれも性格、年代とも不明である。

Ⅴ．ま と め

1. 木戸遺跡は、築館丘陵が、伊豆沼、内沼等の湖沼地帯に樹枝状に延びた丘陵上に立地している。
2. 発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、竪穴遺構5基、焼土遺構1基、土壙2基である。出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器等が出ている。
3. 第2号住居跡は、出土遺物から奈良時代栗囲式期のもので、第3号住居跡は、縄文時代中期中葉大木8b式期のものと思われる。第1号住居跡は不明である。
4. 竪穴遺構5基は、柱穴が検出されており、中世の遺構と思われるが、その性格については、不明である。
5. 焼土遺構、土壙は、性格、年代とも不明である。
6. 木戸遺構は、今回発見された遺構の分布からみて、さらに東西に拡がるものと考えられる。

引用・参考文献

古川工業高等学校郷土研究会（1974）：『うなぎ沢遺跡説明資料』

宮城県教育委員会（1975）：『鰻沢遺跡』「宮城県文化財調査報告書」第40集　宮城県教育委員会

宮城県教育委員会（1969）：『埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚』「宮城県文化財調査報告書」第19集　宮城県教育委員会

加藤・後藤他（1975）：『登米郡南方町青島員塚発掘調査報告』「南方町史資料編」南方町

阿部恵、遊佐五郎（1978）：『長者原貝塚』「南方町文化財調査報告書」第1集　南方町

加藤孝（1956）：『陸前国大松澤貝殻塚の研究』「宮城学院女子大学研究論文集」9・10号

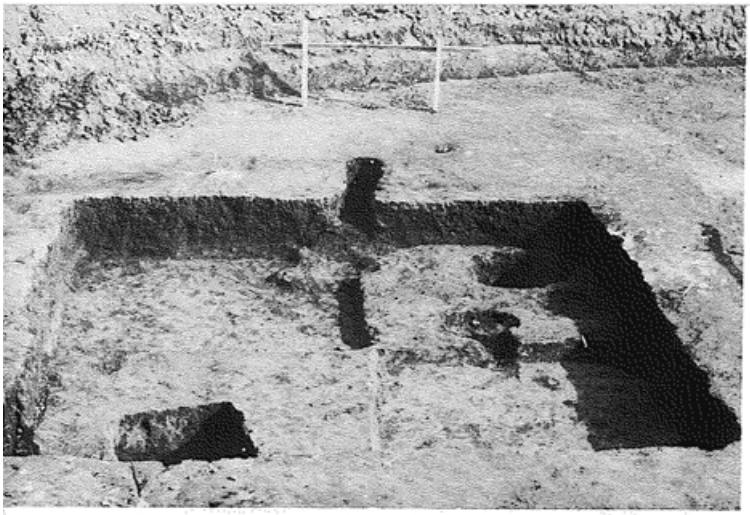
宮城県教育委員会（1978）：『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ－上深沢遺跡』「宮城県文化財調査報告書」第52集　宮城県教育委員会

仙台市教育委員会・東北学院大学考古学研究部（1979）：『栗遺跡発掘調査報告書』「仙台市文化財調査報告書」第14集

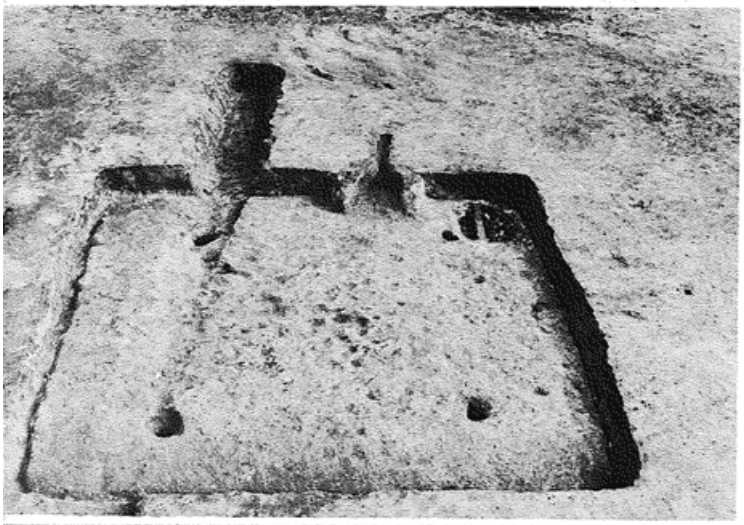
手塚均（1980）：『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ－山ノ上遺跡－』（本書所収）

写　真　図　版

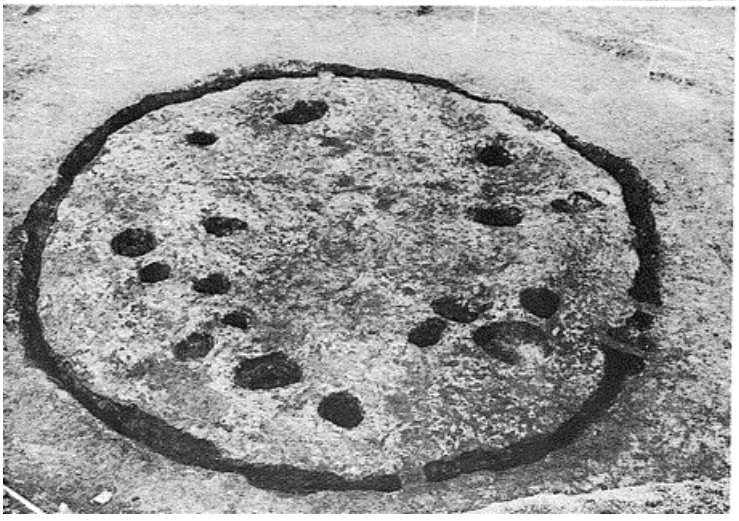
図版1　遺跡遠景



第１号住居跡



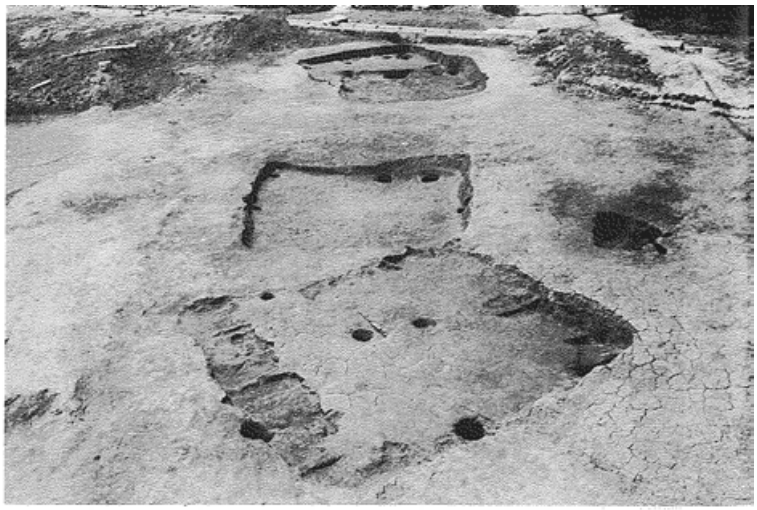
第２号住居跡



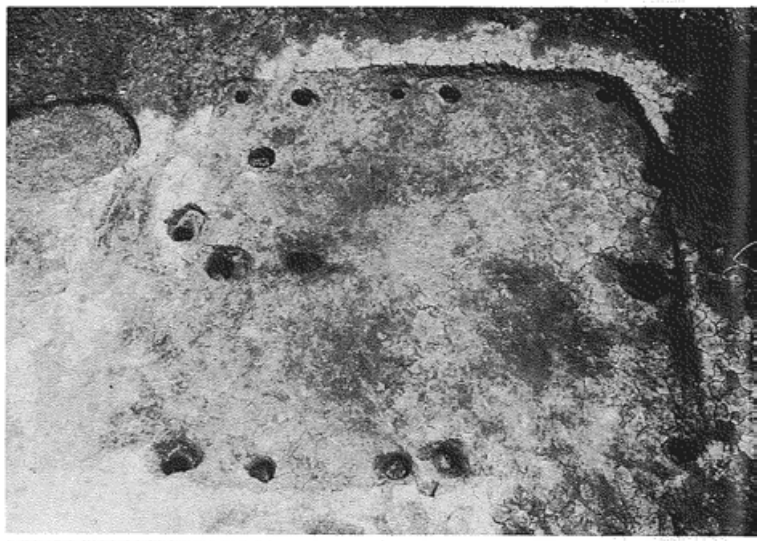
第３号住居跡

図版２　住 居 跡

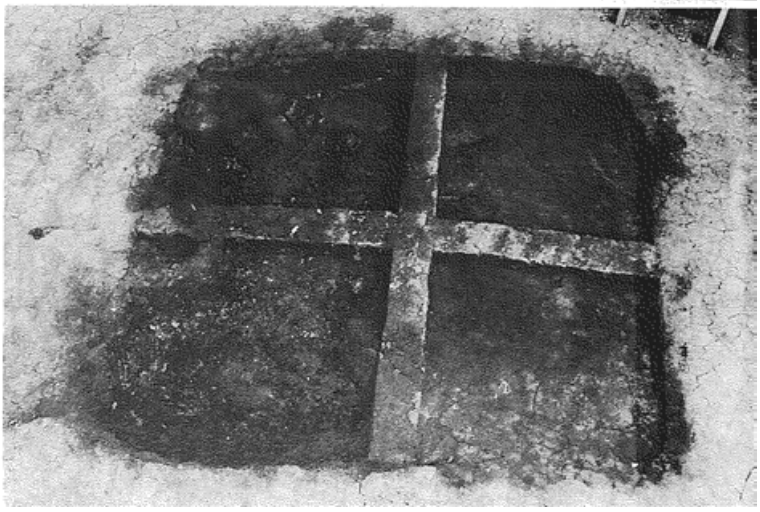
竪穴配置



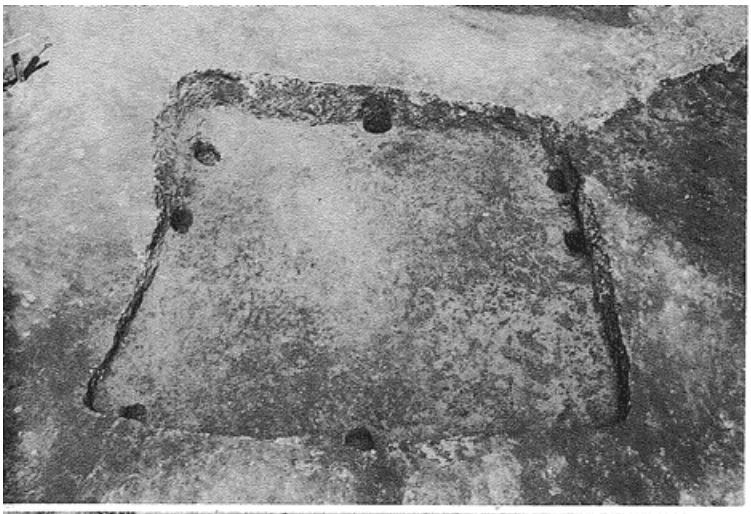
1号竪穴



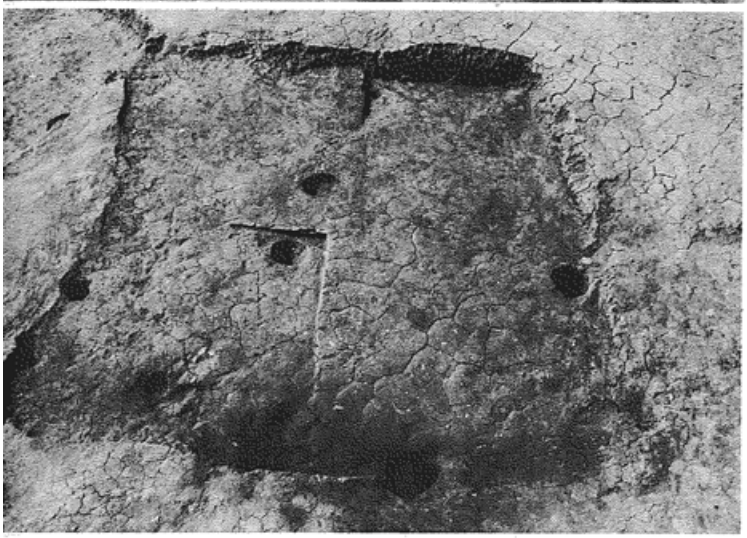
1号竪穴
炭化材出土状況



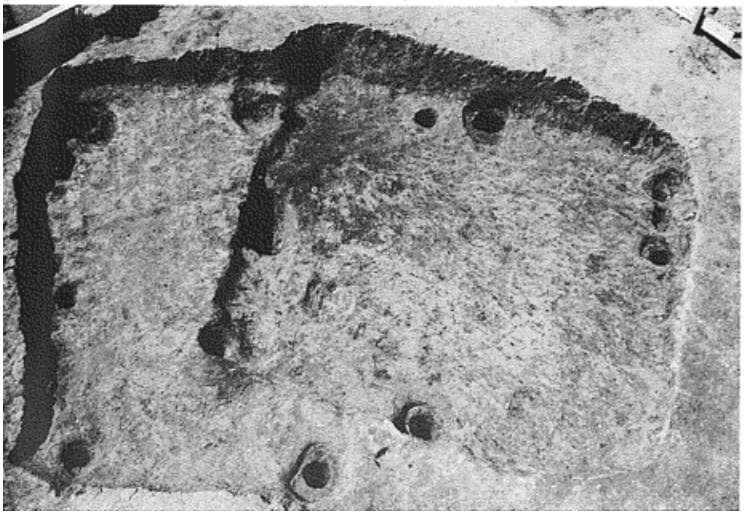
図版3



2号竪穴



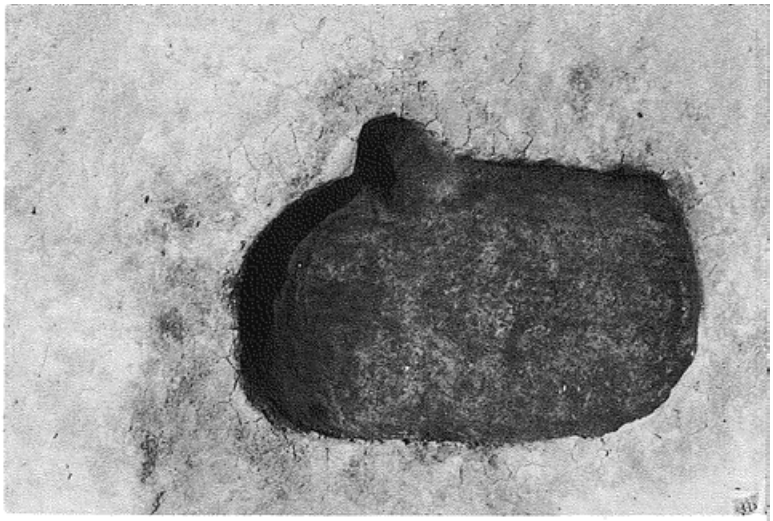
3号竪穴



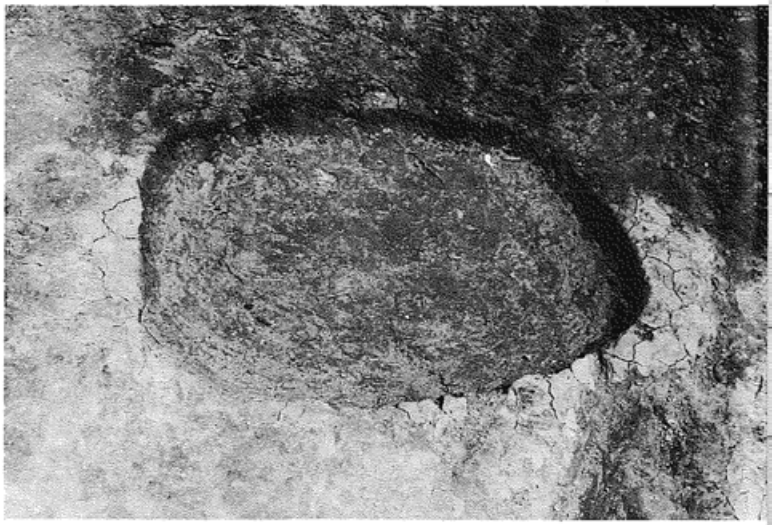
4・5号竪穴

図版4

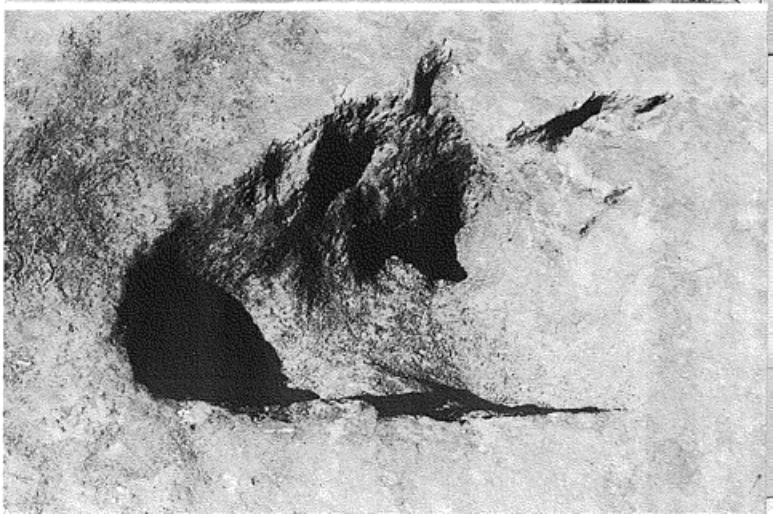
焼土遺構



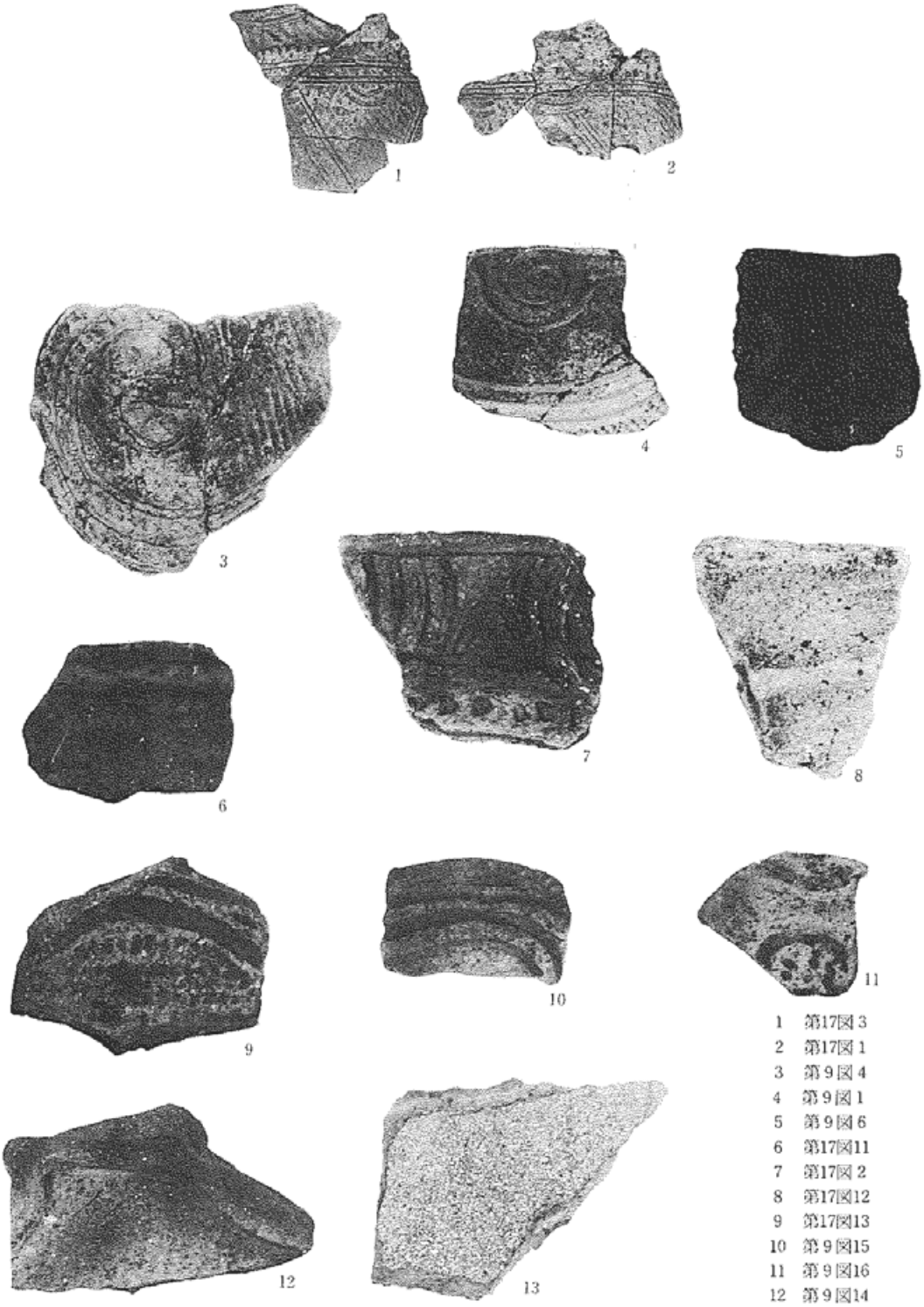
土　壙1



土　壙2

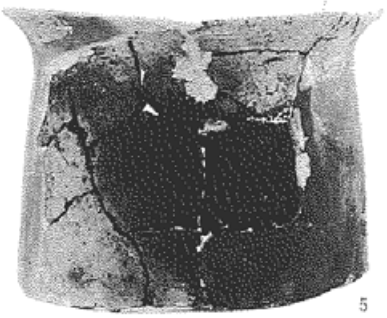


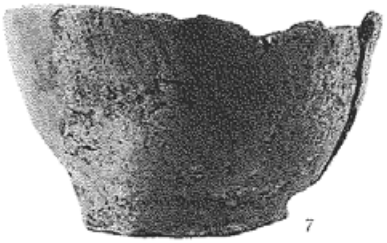
図版5



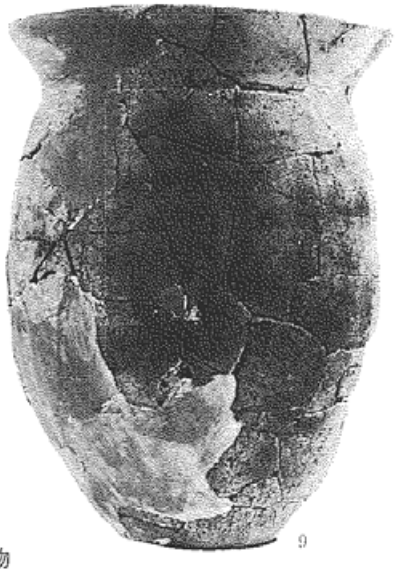
1　第17図3
2　第17図1
3　第9図4
4　第9図1
5　第9図6
6　第17図11
7　第17図2
8　第17図12
9　第17図13
10　第9図15
11　第9図16
12　第9図14
13　中世陶器
　3号竪穴4層

図版6　縄文土器

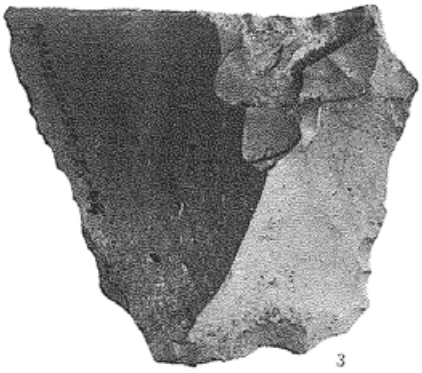




1　第6図1
2　第6図2
3　第18図1
4　第7図3
5　第7図4
6　第4図1
7　第7図5
8　第7図6
9　第4図2



図版7　出土遺物



1　第18図 2
2　第18図 4
3　第18図 6
4　第18図 6
5　第19図
6　第10図 1
7　第10図 2

図版８　出 土 遺 物